甲府城下町遺跡（公用車等駐車場地点）

－公用車等駐車場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

２０１９.３

山　梨　県　総　務　部
山 梨 県 教 育 委 員 会

序章　調査報告のあらまし

1　はじめに

甲府城下町遺跡は、甲府城の築城に伴い整備された城下町遺跡です。この報告書は、山梨県甲府市丸の内二丁目17 － 6、甲府信用金庫本店跡地の約 940 ㎡を対象に、埋蔵文化財記録保存のための調査成果をまとめたものです。

調査地点は甲府城跡（舞鶴城公園・山梨県庁）の西側に位置し、江戸時代には甲府城の一の堀と二の堀に囲まれた武家地の中、城内と城外を結ぶ「青沼町口」の隣接地にあたります。この辺りは武家地の中でも様々な施設が置かれた場所であり、18 世紀以降の絵図では「御米蔵」「普請方定小屋」「馬場」などの記載が見られます。この章では本書を利用する際の手引きとなるよう、調査の概要を整理しました。

2　調査の進め方

（1）調査に至るまで

この調査が実施されることになったのは、当該地が山梨県総務部が行う公用車等駐車場整備事業に伴い、公用車等の立体駐車場の建設が計画されたからです。今回の調査地点から 100mほど北側で、2004 年に甲府市教育委員会が行った発掘調査では、甲府城下町に伴う江戸時代から近代までの遺構や遺物が見つかりました。特に江戸時代の馬場や近代上水遺構など、土地の変遷がわかる遺構が多く確認されました（『甲府市文化財調査報告 33　甲府城下町遺跡Ⅲ』2006 年 3 月刊行）。当該地において、2016 年に試掘調査を行い、埋蔵文化財の確認をしたところ、建物が建っていた場所を囲むような形で、江戸時代の文化層が残っていることがわかりました。この試掘調査の結果を受けて事業主体の山梨県総務部と県教育委員会で協議し、2017 年 5 月 1 日から 7 月 21 日までの日程で調査を行いました。詳細は「第 1 章　調査の経緯と経過」にあります。

（2）調査の方法

調査の方法は、まず試掘調査で分かった埋蔵文化財の深さまでの土（表土）を重機を使って除去します。今回は調査区を東側・南側（1 区）と西側・北側（2 区）に分け、反転して調査を行うことにしました。まず調査 1 区について表土を除去し、その後、人力により遺構確認や遺構の掘り下げ、遺物の取り上げ等を進めていきました。また、各段階で測量や写真撮影を行いました。1 区の調査を終了後、埋戻しを行い、2 区の調査を同様に進めていきました。

現地調査終了後は、出土遺物のデータ化や調査中の図面・写真等による記録類の整理等を進め、本書を作成しました。詳細は「第 3 章　調査の方法と成果」にあります。

3　調査で発見されたもの、分かったこと

今回の調査では主に南側、西側に、江戸時代～近代の遺構が集中して見つかりました。また、陶磁器をはじめ箸や下駄などの木製品、釘などの鉄製品も見つかっています。細かな内容は「第 3 章　調査の方法と成果」に報告していますが、ここではどのようなものが出土したのか、また分かったことを概観します。

（1）江戸時代

今回の調査で見つかった遺物は 18 世紀以降のものが大半でした。遺構は集水枡、暗渠、石垣、溝などが確認されており、おそらくは遺物と同時期であることが推測されます。18 世紀以降の絵図では調査区は「御米蔵」「米蔵」と書かれた区域にあたりますが、今回の調査では、それらとの関係を示すような発見はありませんでした。一方で、調査区の南西側では水に関わる遺構が多く確認されました。中でも石組の集水枡は、甲府城下町遺跡では初めて発見された遺構です。集水枡は大きさ 1.6m × 1.2mの精緻に造られたものでした。おそらくは公共インフラに関わるものと考えられます。また、石組の水路が 3 本付いており、そのうち一本は西側の二の堀へ向かって伸びていました。おそらくは二の堀に排水していたと考えられます。また、その集水枡を壊して、新たな排水の施設として暗渠が造られていました。排水の方法も、時期によって変遷していたことが明らかになりました。

これらの遺構は、水の処理という都市計画を考える上で重要な発見となりました。

（2）近代

調査区は明治時代には甲府監獄署が置かれていました。今回、確認された6号溝と盛土状遺構は、監獄署に伴う可能性が高く、区画を仕切る水路と堤であった可能性があります。6号溝は箸や下駄などの木製品をはじめとして、加工が施された小さな木片が多く見つかりました。甲府監獄署の絵図と対比すると、6号溝と思われる水路の脇に「木工工場」があり、木製品や木片が発掘された理由が窺えます。また、それ以外にも「獄」と書かれた碗が出土するなど、当時の痕跡が色濃く残っていました。

「獄」と書かれた碗

4　今後の課題

この度の甲府城下町遺跡の発掘調査は、限定された範囲でしたが、多くの遺構・遺物が発見され、時期による土地の変遷が明らかになりました。特に水に関わる遺構が多く確認され、扇状地に立地する甲府城下町に暮らす人々の生活の工夫について考えさせられる成果となりました。

今回の調査で発見された集水枡・暗渠は、城下町の町づくりを考える上で特に重要であると判断しました。そのため、文化財審議委員から指導を受け、山梨県総務部、県土整備部、出納局、教育委員会の各部署で協議を行いました。その結果、駐車場の工法を変更し、集水枡と暗渠は埋設保存をすることになりました。埋設保存を行った場所には、2018年1月に総務部が遺構の案内看板を設置しました。

今、私たちが暮らしている土地の地下には、まだまだ良好な状態で過去に人々が暮らした痕跡が眠っています。引き続き甲府城下町の研究が進められ、甲府城下町の姿がさらに明らかになることを願います。

集水枡・暗渠（南東より）

序　　文

本書は甲府市丸の内二丁目 17 － 6 に所在する甲府城下町遺跡の発掘調査報告書です。発掘調査は、山梨県総務部財産管理課による公用車等駐車場整備事業にかかる立体駐車場建設工事に伴って、約 940 ㎡の範囲を平成 29 年 5 月 1 日～ 7 月 21 日にかけて実施しました。

今回報告する甲府城下町遺跡（公用車等駐車場地点）は、甲府城の西側に位置しており、一の堀と二の堀に挟まれた武家地にあたります。調査地点は、城外と城内を繋ぐ「青沼町口」に隣接する場所であり、18 世紀以降の絵図には「御蔵」「御米蔵」「蔵屋敷」などと書かれております。近代になると、甲府監獄署の敷地内となり、その後は私立山梨病院が建てられるなど、土地の利用に様々な変遷がありました。

平成 16 年には今回の調査地点から 100mほど北側で、甲府市教育委員会が発掘調査を行っており、江戸時代の馬場跡や近代の上水施設などが確認されています。

さて、今回の発掘調査では、江戸時代から近代にかけて多くの遺構や遺物が見つかりました。江戸時代の遺構では、集水枡や暗渠、石垣などが確認されました。特に集水枡は大きさ 0.5 ～ 0.8m以上の石を積み上げて造った大型のものであり、甲府城下町遺跡では初めて確認された遺構となります。枡からは二の堀の方向へ水路が伸びており、おそらく堀へ排水していたと考えられます。また、この遺構を壊して暗渠が造られており、排水施設が時期によって作り変えられていたことが明らかになりました。これまで、二の堀への排水施設が発掘調査で確認されたことはほとんどなく、都市の水利用や排水を考える上で非常に重要な調査成果となりました。このほかに、近代の遺構・遺物では、監獄署に伴うものと考えられる溝、「獄」という字が書かれた陶磁器や医師大会の記念メダルなどが確認されました。

現在の甲府は、中世の武田城下町、近世の甲府城下町の形成・整備から、連綿と続いてきた都市であります。過去に築かれた都市構造やそれに伴う様々な技術は、未来へと継承されていく重要なものです。今後の調査研究の進展とともに、甲府の歴史を考えるうえで、本報告書が多くの方々にご活用いただければ幸いです。

最後に、調査に当たってご指導・ご協力いただいた関係者、関係機関に厚く御礼を申し上げます。

平成 31 年 3 月

山梨県埋蔵文化財センター

所 長　馬 場 博 樹

例　言

1　本書は山梨県甲府市丸の内二丁目 17 － 6 に所在する甲府城下町遺跡（公用車等駐車場地点）の発掘調査報告書である。

2　調査は公用車等駐車場整備事業に伴う事前調査であり、山梨県総務部より山梨県教育委員会が委託を受け、山梨県埋蔵文化財センターが発掘調査・整理作業・報告書作成を実施したものである。

3　発掘調査にあたった組織は次のとおりである。

調査主体　山梨県教育委員会　調査機関　山梨県埋蔵文化財センター

所長　中山誠二（平成 29 年度）・馬場博樹（平成 30 年度）

調査担当　史跡資料活用課　柴田亮平（主任・文化財主事）・北澤宏明（文化財主事）・末木健（非常勤嘱託）

4　発掘調査期間及び整理作業機関は以下の通りである。

発掘調査　平成 29 年 5 月 1 日～平成 29 年 7 月 21 日

基礎的整理作業　平成 30 年 1 月 9 日～平成 30 年 3 月 16 日

本格的整理作業　平成 30 年 6 月 18 日～平成 31 年 3 月 15 日

5　本書の執筆・編集は第 4 章を除いて柴田が行った。第 4 章第 1 節はパリノ・サーヴェイ株式会社が、第 4 章第 2 節は山梨県立博物館学芸員西願麻以が、それぞれ執筆を行った。

6　遺構写真・調査風景写真及び報告書掲載遺物は柴田・北澤・末木が撮影した。

7　発掘調査における世界測地系座標に基づく基準点・水準点の測量、3Dレーザー測量及び図化作業は昭和測量株式会社に委託した。RCヘリなどによる遺跡全体の写真実測及び航空空中写真の撮影は株式会社テクノプランニングに委託した。木製品の保存処理および図化、写真撮影の作業は公益財団法人山梨文化財研究所に委託した。遺跡内で採取した土壌の自然科学分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。金属製品の科学分析、墨書木製品の赤外線写真撮影は山梨県立博物館が行った。また、遺構の測量及び図化システムとして、株式会社CUBICの「遺構くん」を使用した。

8　本報告に関わる記録図面・写真・出土遺物などは、山梨県埋蔵文化財センターに一括して保管してある。

9　発掘調査及び整理作業においては、次の方々・機関にご協力、ご教示を賜った。記して謝意を表す次第である（敬称略、順不同）。

萩原三雄（山梨県文化財保護審議会委員）、望月祐仁（甲府市市民部）、志村憲一・伊藤正幸・平塚洋一（甲府市教育委員会）、大嶌正之（甲斐市教育委員会）、今村直樹（中央市教育委員会）、出月洋文（湯之奥金山博物館）、望月秀和（公益財団法人山梨文化財研究所）、泉英樹・萩野谷主税・山路恭之助（昭和測量株式会社）、丹澤寛幸（株式会社内藤ハウス）、原正人、平山優、堀内秀樹、望月昇

発掘作業員　穴山公・新谷博朋・君塚邦子・小池幹子・小林英樹・坂井健一・鷹野勉・角田光夫・新津茂・丸山孝子・宮城良男・迎有希子・横山路枝

整理作業員　齋木麻希子・斉藤律子・流石利枝子・新津多恵・藤原由紀子

凡　例

1　調査区は世界測地系座標によって設定しており、図中に付した（X＝○○、Y＝○○）といった数値は座標線の数値である。

2　本書への掲載にあたり、遺構の表記には略号を用いず、遺構種別と検出順に付した数字にて表した。

3　本書へ掲載した遺構、遺物の縮尺は図版中にスケールを示し、対応する番号を明記した。

4　発掘調査において、遺物の取り上げ時に略号を使用したため、観察表に記載した。略号の各対応は下記のとおりである。

P：陶磁器類・土器　　KW：瓦　　W：木製品　　M：金属製品　　C：炭化物

目　次

序章　調査報告のあらまし
序文
例言
凡例
目次

第１章　調査の経緯と経過
第１節　調査に至る経緯 …… 1
第２節　調査の目的と課題 …… 1
第３節　調査の経過 …… 1

第２章　周辺環境
第１節　遺跡の位置と地理的環境 …… 3
第２節　歴史的環境 …… 3

第３章　調査の方法と成果
第１節　発掘調査の方法 …… 9
第２節　基本層序 …… 9
第３節　遺構・遺物 …… 9

第４章　自然科学分析
第１節　土壌分析（パリノ・サーヴェイ株式会社）……44
第２節　金属関連資料の科学分析（山梨県立博物館　学芸員　西願　麻以）……50

第５章　総　　括
第１節　調査区の変遷について ……53
第２節　調査区南西側の水に関わる遺構について ……53
第３節　甲府監獄署とそれに伴う遺構について ……55

写真図版 ……59

挿　図　目　次

第１図　甲府城下町遺跡の周辺遺跡 …… 4
第２図　甲府城下町遺跡旧街路・旧町名図および主要調査地点 …… 6
第３図　発掘調査区・土層模式図 ……16
第４図　調査区南西部の土層堆積状況 ……17
第５図　遺構全体図 ……18
第６図　３号溝・２号土坑・３号土坑平面図 ……19
第７図　３号溝断面図 ……20
第８図　４号溝平面図・断面図 ……21
第９図　東側石垣平面図・立面図・断面図 ……22

第 10 図　調査区南西部拡大図・盛土状遺構断面図 ……23
第 11 図　6 号溝平面図・断面図 ……24
第 12 図　西側石垣平面図・立面図 ……25
第 13 図　暗渠平面図・断面図 ……26
第 14 図　集水枡平面図・立面図・断面図 ……27
第 15 図　集水枡立面図・断面図 ……28
第 16 図　7 号溝平面図・断面図 ……28
第 17 図　出土遺物（陶磁器・土器 1）（3 号・4 号・6 号溝） ……29
第 18 図　出土遺物（陶磁器・土器 2・石製品）（6 号溝・西側石垣周辺） ……30
第 19 図　出土遺物（陶磁器・土器 3）（西側石垣周辺・集水枡） ……31
第 20 図　出土遺物（陶磁器・土器 4・羽口）（暗渠北側・東側石垣周辺・かく乱） ……32
第 21 図　出土遺物（瓦 1）（3 号・4 号溝） ……33
第 22 図　出土遺物（瓦 2）（6 号溝・西側石垣周辺） ……34
第 23 図　出土遺物（瓦 3）（西側石垣周辺・東側石垣周辺・暗渠北側） ……35
第 24 図　出土遺物（瓦 4・銭貨など）（暗渠北側・暗渠袖・暗渠・かく乱） ……36
第 25 図　出土遺物（木製品 1）（2 号・3 号土坑・3 号溝）……37
第 26 図　出土遺物（木製品 2）（6 号溝） ……38
第 27 図　出土遺物（木製品 3・金属製品）（6 号溝・包含層） ……39
第 28 図　出土遺物（木製品 4）（6 号溝・包含層・表土） ……40
第 29 図　花粉化石 ……49
第 30 図　珪藻化石・大型植物遺体 ……49
第 31 図　実体顕微鏡画像 ……51
第 32 図　蛍光X線分析定性結果 ……52
第 33 図　上府中上水のルート「（上府中上水堰の図（著者原図））」（露木 1966 を改変） ……54
第 34 図　「山梨縣監獄全圖　六百分之一」（個人蔵）（原図を 40 %に縮小して掲載） ……56
第 35 図　「山梨縣監獄全圖　但六百分之一」（個人蔵）（原図を 40 %に縮小して掲載） ……57
第 36 図　「山梨縣監獄全圖　但六百分之一」（個人蔵）（拡大図（凡 1/400 ）） ……58

表　目　次

第 1 表　甲府城下町遺跡の周辺遺跡一覧 …… 5
第 2 表　甲府城下町の調査地点一覧 …… 7
第 3 表　陶磁器・土器観察表 ……41
第 4 表　瓦観察表 ……42
第 5 表　木製品観察表 ……42
第 6 表　金属製品観察表 ……43
第 7 表　銭貨等観察表 ……43
第 8 表　石製品観察表 ……43
第 9 表　遺構一覧表 ……43
第 10 表　寄生虫卵分析・花粉分析分析結果 ……45
第 11 表　珪藻分析結果 ……46
第 12 表　微生物分析結果 ……46
第 13 表　蛍光X線分析定性結果 ……51
第 14 表　Cu-Zn-Pb割合 ……51

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

甲府城下町遺跡（公用車等駐車場地点）の発掘調査は公用車等駐車場整備事業に伴うものである。この事業は山梨県総務部財産管理課（平成 27 年度までは管財課）によって進められており、山梨県甲府市丸の内二丁目 17 － 6 に県庁公用車等の立体駐車場を建設するものである。この場所は元々、甲府信用金庫の所有地であり、甲府信用金庫本店が建っていたが、当地と県立図書館跡地等の交換契約によって、平成 26 年に県有地となった（甲府信用金庫本店建替のため、平成 27 年度まで貸出）。平成 27 年度に建物が解体され、建物の基礎撤去の際は、甲府市教育委員会、山梨県埋蔵文化財センターの担当者が立会を行った。

事業の実施にあたり、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内であったため、平成 28 年に試掘調査を行った。その結果、建物が建っていた土地の中央部はかく乱が激しく、遺構・遺物は確認できなかったが、その周囲は「ロ」の字状に江戸時代の造成面が残存しており、遺構が確認された。そのため、学術文化財課と財産管理課による協議を実施し、その結果、平成 29 年度に本調査を実施することとなった。平成 29 年 4 月 1 日に山梨県総務部財産管理課長と学術文化財課長の間で覚書が締結され、5 月 1 日より発掘調査に着手した。

なお、今回の埋蔵文化財発掘調査に係わる法的手続きなどは、以下のとおりである。

- 平成 29 年 4 月 1 日　公用車等駐車場整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査に関する覚書を山梨県総務部財産管理課と山梨県教育委員会学術文化財課で締結した。
- 平成 29 年 5 月 11 日　文化財保護法第 99 条第 1 項に基づく埋蔵文化財発掘調査着手の報告を山梨県教育委員会教育長へ提出した（教埋文第 71 号「埋蔵文化財発掘調査の実施について（甲府城下町遺跡（公用車等駐車場整備事業））」）。
- 平成 29 年 7 月 24 日　文化財保護法第 100 条第 2 項の規定により埋蔵文化財発見の通知を山梨県教育委員会教育長へ提出し、甲府警察署への通知を依頼した（教埋文第 236 号「埋蔵文化財の発見について（甲府城下町遺跡）（公用車等駐車場）」）。
- 平成 30 年 5 月 1 日　公用車等駐車場整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査に関する覚書（本格的整理作業、報告書作成・刊行）を山梨県総務部財産管理課と山梨県教育委員会学術文化財課で締結した。

第２節　調査の目的と課題

本調査地点は、甲府城の西側、「一の堀」と「二の堀」に囲まれた武家地に所在する。その中でも、二の堀のすぐ脇にあたり、南西側には武家地とその外側の出入り口である「青沼町口」が位置する。調査では遺構・遺物の配置及び構造を正確に記録・保存し、それらの帰属時期及び変遷を明らかにしつつ、城下町の解明に努めた。

第３節　調査の経過

5 月 1 日より作業員を雇用し、発掘機材の搬入や調査区仮囲いネットの設置を行った。「ロ」の字状の調査区の東側、南側を 1 区、北側、西側を 2 区として、反転調査を行った（第 3 図）。5 月 2 日から 5 月 9 日まで 1 区の表土剥ぎを行い、それと並行して人力での作業を開始した。調査区の東側はかく乱が激しく、残存している層はあまり確認できなかった。南側では東西に延びる溝を 2 条、同方向へ伸びる石垣などを確認した。1 区の調査は 5 月 26 日に空撮を行い、終了した。5 月 29 日に埋め戻しをおこなったが、1 区で確認した石垣が 2 区へ伸びていたため、その周辺は埋め戻しを行わなかった。

5 月 30 日から 6 月 1 日にかけて機材等の移動を行い、6 月 2 日から 2 区の表土剥ぎを開始した。表土剥ぎは 6 月 7 日まで行ったが、北側のかく乱が予想以上に激しく、残存している箇所がほとんどないことから、早めに調査

を終了して、北側を排土置き場として利用することとなった。そのため、北側を２－１区、西側を２－２区と設定し、２－１区は６月 13 日に空撮を行い、同日から６月 15 日にかけて埋め戻した。２－２区では１区から伸びていた溝や石垣に加え、集水枡や暗渠、盛土状遺構などが確認された。

石積みの集水枡は、これまで甲府城下町遺跡では確認されておらず、水に伴う遺構は城下町の町づくりを考える上で、特に重要であると判断した。そのため、山梨県文化財保護審議会委員から指導を受け、財産管理課、県土整備部営繕課、出納局工事検査課、学術文化財課、施工業者、当センターで数度の協議を行った。その結果、駐車場の工法を変更し、集水枡と暗渠は埋設保存することとなった。

６月 23 日に２－２区の空撮を行い、６月 24 日から６月 26 日まで埋め戻しをおこなった。ただし、集水枡、暗渠については調査を続行し、７月 13 日に三次元測量を行った。７月 18 日から７月 19 日に集水枡、暗渠の埋め戻しを行ったが、埋設保存のため、対象範囲に穴あきのブルーシートを敷いた後、土嚢で周囲を囲って白砂を充填した。そこに「文化財アリ」と書いた埋設シートを敷いて、さらにその上には白砂で埋め戻しを行った。７月 21 日までに機材の撤収を行い、調査を終了した。

平成 30 年１月には公用車等駐車場の建設完了と同時に、埋設保存した遺構の解説看板を財産管理課が設置した。

埋設保存１（埋設シート設置状況）

埋設保存２（白砂充填状況）

山梨県文化財保護審議会委員による現地確認

解説看板設置状況

第 2 章　周辺環境

第 1 節　遺跡の位置と地理的環境

本書にて報告する周知の埋蔵文化財包蔵地「甲府城下町遺跡」は、山梨県の県庁所在地である甲府市に所在する。

甲府市は甲府盆地を南北に縦断する細長い市域をもつ。南端は県土中央に展開する甲府盆地南縁にて富士河口湖町と接し、北端は甲府市最高地点である金峰山にて長野県境となる。調査地点が所在する甲府中心市街地は、北に要害山をはじめとする水ヶ森山地が発達して甲府盆地北縁の一角を構成する。水ヶ森山地と甲府盆地の境界では、秩父山塊へ続く太良ヶ峠より南流する相川が甲府市下積翠寺町付近を扇頂として、相川扇状地を形成する。相川扇状地は東方を興因寺山（854.5m）、西方を北から順に要害山（787m）、大笠山（518.9m）、愛宕山（427.9m）に囲まれる。愛宕山の南西には、相川扇状地の形成とともに周囲が埋没することで形成されたとされる一条小山と呼ばれる独立丘陵がある。近世には一条小山の山体に甲府城が築かれるとともに、甲府城を中心に城下町が形成された。

甲府城下町は、一の堀に囲まれた「内城」と内城外縁から二の堀に囲繞された「内郭」、二の堀から三の堀に囲まれた「外郭」、三の堀外側の「郭外」から構成される。内郭には家老屋敷などの諸役所・倉庫・武家屋敷地、外郭には町人地・武家屋敷地、郭外には町人地・寺社地がそれぞれ置かれた。調査地点は内城（甲府城）西側の外郭、武家地に位置する。二の堀の脇にあたり、隣接する南西側には外郭と郭外の出入り口である「青沼町口」が設けられている。絵図資料では 17 世紀代の頃は明瞭ではないが、18 世紀初頭の『甲州吉里領地時城図』では「御蔵」、18 世紀前半から幕末までにかけては「御米蔵」、「米蔵」などと記載されていた場である（『楽只堂年録』第 173 巻、『元文三年甲府城下町絵図』など）。少なくとも 18 世紀以降には蔵にまつわる場所であったことが窺える。

第 2 節　歴史的環境　※（　）内の番号は第 1 図及び第 1 表中の番号に該当する。

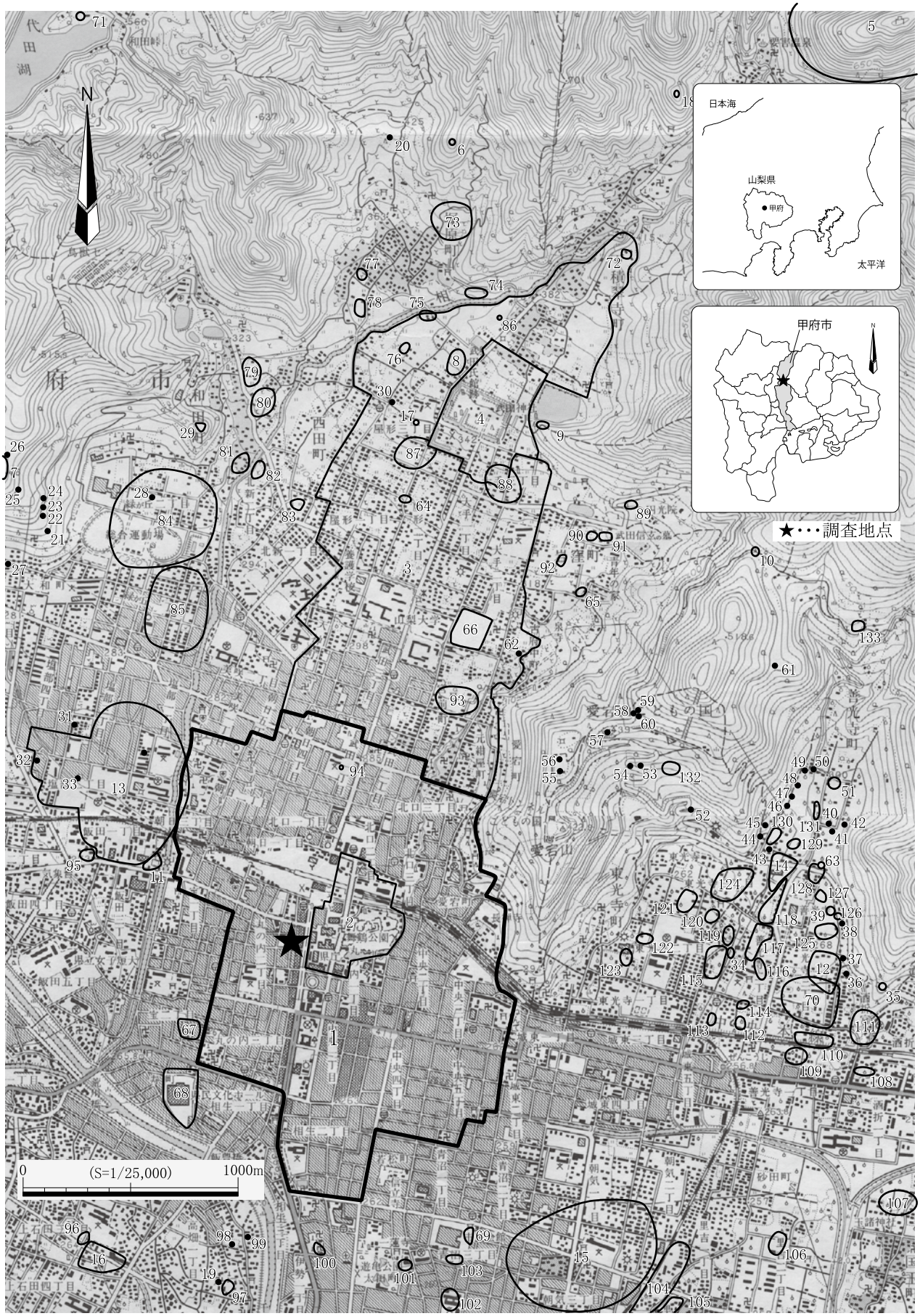
旧石器時代　これまでの甲府盆地における調査では、旧石器時代の居住地と考えられる遺跡は発見されていない。甲府市域においても同様であるが、八幡神社遺跡（93）において、ナイフ形石器や切出形石器など 4 点の石器が見つかっている。ただし、剥片の出土は確認できず、拠点的な居住域ではないことが指摘されるが、この時代にヒトが立ち入る領域であったことが窺える。

縄文時代　山梨県全域において、縄文時代の遺跡数は多い。しかし、甲府市域においては対照的に少なく、相川扇状地域においては、緑ヶ丘二丁目遺跡（84）や大手下遺跡（88）、八幡神社遺跡などに限られる。ただし、甲府城下町遺跡のこれまでの発掘調査において、縄文時代に帰属する遺物が少量ながら発見されていることから、未発見の遺跡も存在するかもしれない。周辺地域を見ると、集落遺跡として北原遺跡（14）、朝気遺跡（15）、上石田遺跡（16）がある。

弥生時代　山梨県は弥生時代になると遺跡数が減少する傾向である。甲府市域も例外ではなく、集落跡が塩部遺跡（13）や朝気遺跡（15）で発見されるに留まり、遺跡の分布は極めて希少である。

古墳時代　甲府城下町遺跡内では、しばしば古墳時代に帰属する遺物が出土する。また、甲府裁判所地点においては、竪穴状遺構より弥生時代末～古墳時代前期の遺物が伴出している。甲府城下町遺跡で、中・近世以前の遺構が見つかることは珍しい。周辺地域を見ると、甲府城下町遺跡に隣接する塩部遺跡（13）においては、古墳時代前期の集落跡及び方形周溝墓群が発見されている。方形周溝墓からは古墳時代前期（4 世紀後半）のウマの歯が出土しており、甲府盆地北部のこの地において当該期の一勢力を構成していたことが窺える。また、6 世紀前半には、甲府城下町遺跡の北西にある湯村山山麓に万寿森古墳（27）が築造されるほか、湯村山（21 ～ 26）、愛宕山（52 ～ 61）、善光寺周辺地域（34 ～ 51）に古墳や積石塚が築かれる。

古代　古代律令下において、甲斐国では山梨郡・巨摩郡・八代郡・都留郡の 4 郡が置かれた。現在の甲府市域は、古代甲斐国では北東部に山梨郡表門郷、北西部に巨摩郡青沼郷、南部に八代郡白井郷の 3 郡にまたがる。甲府城下町遺跡の周辺地域では、古墳時代後半から平安時代竪穴建物跡や溝、近世の墓壙などが検出された青沼遺跡（69）



第１図　甲府城下町遺跡の周辺遺跡

※図中の番号は第１表に対応

第１表　甲府城下町遺跡の周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	時　代	種別
1	甲府城下町遺跡	近世	城館跡
2	甲府城跡	近世	城館跡
3	武田城下町遺跡	中世	城館跡
4	武田氏館跡	中世	城館跡
5	要害城跡	中世	城館跡
6	鐘推堂山遺跡	中世	城館跡
7	湯村山城跡	中世	城館跡
8	土屋敷遺跡	中世	城館跡
9	躑躅ヶ崎亭跡	中世	城館跡
10	茶堂烽火台	中世	城館跡
11	横田氏屋敷跡	中世	城館跡
12	板垣氏屋敷跡	中世	城館跡
13	塩部遺跡	弥生～平安	集落跡
14	北原遺跡	縄文・平安	集落跡
15	朝気遺跡	縄文～平安	集落跡
16	上石田遺跡	縄文	集落跡
17	峰本南A遺跡	中世	寺院跡
18	一ノ森経塚遺跡群	中世	経塚
19	高源寺経塚	近世	経塚
20	疣石古墳	古墳	古墳
21	湯村山1号墳	古墳	古墳
22	湯村山2号墳	古墳	古墳
23	湯村山3号墳	古墳	古墳
24	湯村山4号墳	古墳	古墳
25	湯村山5号墳	古墳	古墳
26	湯村山6号墳	古墳	古墳
27	万寿森古墳	古墳	古墳
28	和田無名墳	古墳	古墳
29	三光寺山遺跡	古墳	古墳
30	お塚さん古墳	古墳	古墳
31	早乙女塚古墳	古墳	古墳
32	鴨塚古墳	古墳	古墳
33	荒神塚古墳	古墳	古墳
34	法印塚古墳	古墳	古墳
35	不老園塚古墳	古墳	古墳
36	ポンポコ塚	古墳	古墳
37	おめ塚古墳	古墳	古墳
38	善光寺無名塚	古墳	古墳
39	善光寺無名墳	古墳	古墳
40	三日月古墳	古墳	古墳
41	地蔵塚古墳	古墳	古墳
42	鎧塚古墳	古墳	古墳
43	北原無名1号墳	古墳	古墳
44	北原無名3号墳	古墳	古墳
45	北原無名4号墳	古墳	古墳
46	北原無名5号墳	古墳	古墳
47	北原無名6号墳	古墳	古墳
48	北原無名7号墳	古墳	古墳
49	善光寺塚2号墳	古墳	古墳
50	善光寺塚1号墳	古墳	古墳
51	北善光B遺跡	古墳	古墳
52	山楽荘古墳	古墳	古墳
53	大笠山3号墳	古墳	古墳
54	大笠山2号墳	古墳	古墳
55	夢見山2号墳	古墳	古墳
56	夢見山1号墳	古墳	古墳
57	大笠山1号墳	古墳	古墳
58	二ツ塚1号墳	古墳	古墳
59	二ツ塚2号墳	古墳	古墳
60	二ツ塚3号墳	古墳	古墳
61	一ツ塚古墳	古墳	古墳
62	コツ塚古墳	古墳	古墳
63	上土器窯跡	奈良	瓦窯跡
64	長閑遺跡	中世	包蔵地
65	岩窪遺跡	奈良～中世	包蔵地
66	山梨大学遺跡	奈良・平安	包蔵地
67	宝町遺跡	縄文・平安	包蔵地

番号	遺跡名	時　代	種別
68	寿町遺跡	縄文～近世	包蔵地
69	青沼遺跡	古墳	包蔵地
70	本郷遺跡	縄文・古墳～近世	包蔵地
71	丸山遺跡	縄文～古墳	散布地
72	日影田遺跡		散布地
73	山路遺跡		散布地
74	不動遺跡	近世	散布地
75	御馬屋小路A遺跡	中世	散布地
76	御馬屋小路B遺跡		散布地
77	西前田A遺跡	中世・近世	散布地
78	西前田B遺跡		散布地
79	十二天遺跡	平安	散布地
80	永井遺跡	古墳・平安	散布地
81	村之内遺跡	古墳～平安	散布地
82	向田A遺跡	弥生・古墳	散布地
83	向田B遺跡		散布地
84	緑ヶ丘二丁目遺跡	古墳～平安	散布地
85	緑ヶ丘一丁目遺跡	古墳	散布地
86	日影遺跡		散布地
87	峰本南B遺跡	近世	散布地
88	大手下遺跡	縄文	散布地
89	岩窪C遺跡	古墳	散布地
90	中道東遺跡	近世	散布地
91	岩窪A遺跡	近世	散布地
92	中道西遺跡	古墳	散布地
93	八幡神社遺跡	縄文	散布地
94	新紺屋小学校遺跡	近世	散布地
95	飯田一丁目遺跡	弥生・古墳	散布地
96	上石田B遺跡	平安	散布地
97	宮北遺跡	縄文・平安	散布地
98	大北河原遺跡	平安	散布地
99	久保北河原遺跡	平安	散布地
100	千松院遺跡	中世	散布地
101	太田町遺跡	古墳～近世	散布地
102	湯田一丁目遺跡	古墳	散布地
103	青沼三丁目遺跡	中世・近世	散布地
104	里吉天神遺跡	古墳～平安	散布地
105	家之前遺跡	平安	散布地
106	中坪遺跡	古墳	散布地
107	大橋遺跡	中世	散布地
108	内林遺跡	近世	散布地
109	本郷C遺跡	古墳～中世	散布地
110	本郷B遺跡	平安～近世	散布地
111	酒折縄文遺跡	縄文	散布地
112	宮の前遺跡	縄文	散布地
113	東光寺遺跡	平安～近世	散布地
114	説教遺跡	平安～近世	散布地
115	銀杏之木遺跡	平安～近世	散布地
116	上郷遺跡	平安～近世	散布地
117	宮之脇B遺跡	縄文・平安	散布地
118	宮之脇A遺跡	縄文・平安	散布地
119	宮裏遺跡	平安～近世	散布地
120	六大天遺跡	平安～近世	散布地
121	亥ノ兎遺跡	縄文・古墳・平安～近世	散布地
122	六反田遺跡	平安～近世	散布地
123	御崎田遺跡	平安	散布地
124	地蔵北遺跡	古墳～平安	散布地
125	殿屋敷遺跡	平安～近世	散布地
126	南善光A遺跡	平安～近世	散布地
127	南善光B遺跡	古墳～平安	散布地
128	善光寺北遺跡	縄文・平安	散布地
129	堤下A遺跡	平安～近世	散布地
130	堤下B遺跡	平安～近世	散布地
131	北善光A遺跡	平安～近世	散布地
132	大笠山水の元遺跡	古墳	散布地
133	茶堂遺跡	平安	散布地

第２図　甲府城下町遺跡旧街路・旧町名図および主要調査地点

第２表　甲府城下町の調査地点一覧

番号	遺跡名
★	甲府城下町遺跡（公用車等駐車場地点）
1	甲府城三の堀跡
2	甲府城下町遺跡（武田二丁目10－100地点）
3	甲府城下町遺跡（新紺屋小学校校庭地点）
4	甲府城下町遺跡（武田二丁目82－３）
5	甲府城下町遺跡（武田二丁目（いちやまマート駐車場跡））
6	甲府城下町遺跡（朝日四丁目99他地点）
7	甲府城下町遺跡（北口一丁目50－１地点）
8	甲府城下町遺跡（北口二丁目17・18・21地点）
9	甲府城下町遺跡（北口二丁目12－１地点）
10	甲府城下町遺跡（桜シルク跡B区）
11	甲府城下町遺跡（北口二丁目（二の堀跡））
12	甲府城下町遺跡（北口二丁目14－９地点）
13	甲府城下町遺跡（桜シルク跡A区）
14	甲府城下町遺跡（日向町遺跡第１地点）
15	甲府城下町遺跡（武田県道沿い）
16	甲府城下町遺跡（北口二丁目（県立図書館建設地点））
17	甲府城下町遺跡（日向町遺跡第２地点）
18	甲府城下町遺跡（北口二丁目94地点）
19	甲府城下町遺跡（薮田氏屋敷跡）
20	甲府城下町遺跡（北口三丁目101（納戸小路武家屋敷跡））
21	甲府城跡（清水曲輪）
22	甲府城（30街区）
23	甲府城屋形曲輪（駐輪場）
24	甲府城屋形曲輪（駐車場）
25	県史跡甲府城跡
26	甲府城（県庁前ローソン地点）
27	甲府城跡（柳御門跡）
28	甲府城跡（追手門）
29	甲府城下町遺跡（追手門）
30	甲府城下町遺跡（丸の内一丁目13（市道））
31	甲府城下町遺跡（丸の内一丁目13－９地点）
32	甲府城下町遺跡（朝日二丁目214）
33	甲府城下町遺跡（横沢口）
34	甲府城二の堀跡
35	甲府城下町遺跡（丸の内二丁目８－８地点）
36	甲府城下町遺跡（丸の内一丁目２－３他地点）
37	甲府城下町遺跡（丸の内二丁目（裏先手小路跡））
38	甲府城下町遺跡（B西区）
39	甲府城下町遺跡（丸の内一丁目１－３地点））
40	甲府城下町遺跡（丸の内二丁目138地点）
41	甲府城下町遺跡（43街区労働局地点）
42	甲府城下町遺跡（B区）
43	北口一丁目１－５（山手御役宅跡）
44	甲府城下町遺跡（A区）
45	甲府城下町遺跡（丸の内二丁目109地点）

番号	遺跡名
46	甲府城下町遺跡（丸の内二丁目31－９地点）
47	甲府城下町遺跡（丸の内二丁目３地点）
48	甲府城下町遺跡（舞鶴小学校）
49	甲府城下町遺跡（丸の内二丁目623（百石町武家屋敷跡））
50	甲府城下町遺跡（甲府地方裁判所地点）
51	甲府城下町遺跡（集会所地点）
52	甲府城下町遺跡（紅梅地区再開発）
53	甲府城下町遺跡（丸の内一丁目505－１他地点）
54	甲府城下町遺跡（中央一丁目115他地点）
55	甲府城下町遺跡（相生二丁目４地点）
56	甲府城下町遺跡（城東二丁目９）
57	甲府城下町遺跡（舞鶴城公園西通り西区）
58	甲府城下町遺跡（舞鶴城公園西通り線北・南区）
59	甲府城下町遺跡（土地開発整理事業17街区）
60	甲府城下町遺跡（土地区画整理事業43街区）
61	甲府城下町遺跡（甲府市庁舎建設地点）
62	甲府城下町遺跡（甲府法務局建設地点）
63	甲府城下町遺跡（古府中環状浅原橋線）
64	甲府城下町遺跡（北口二丁目１－８・１－９地点）
65	甲府城下町遺跡（駅前駐輪場地点）
66	甲府城下町遺跡（旧柳町一丁目地点）
67	甲府城下町遺跡（朝日町一丁目118地点）
A	家老薮田五郎右衛門屋敷
B	山手御役宅
C	家老柳沢権太夫屋敷
D	追手御役宅
E	家老滝田平太左衛門屋敷
F	御薬園
G	家老鈴木主水屋敷
H	城代柳沢隼人屋敷
I	微典館
J	普請方定小屋
K	馬場
L	御米蔵
M	御供長屋
N	御目付屋敷
O	御組屋敷
P	御樹木屋敷
Q	歓喜院
R	金座
S	町年寄坂田家
T	本陣
U	問屋
V	町年寄山本家
W	若松座
X	家老近藤図書屋敷

や弥生時代から平安時代にかけて形成された集落遺跡である朝気遺跡が所在する。これらの遺跡は甲府城下町遺跡の南東に位置し、古代には巨摩郡青沼郷の一角をなしていたとされ、特に大規模な集落跡であった朝気遺跡は、青沼郷の中心地と推定された。

中世　甲斐源氏の始祖である新羅三郎義光の嫡男忠頼は、甲府城が築城される以前の一条小山及び、その周辺に所在した一条郷を領して一条忠頼と称した。一条小山の名称は、忠頼がこの地に居館を置いたことに由来している。寿永三年（1184）、忠頼が源頼朝に誅殺されると、忠頼夫人により菩提の尼寺が建立される。正和元年（1312）には遊行二世他阿真教に帰依した一条時信により時宗寺院として改められ、名を稲久山一蓮寺とした。16世紀前半には武田信虎により甲府の北方、躑躅ヶ崎の地に館が築かれ、信虎・信玄・勝頼の約60年間にわたり武田城下町が整備され、町は発展した。

近世（武田氏滅亡～甲府勤番期）　天正十年（1582）に武田氏が滅亡して以降、甲斐国は織田信長の家臣である河尻秀隆の支配から始まり、同年に本能寺にて信長が倒されると秀隆が一揆により倒され、徳川家康の家臣平岩親吉が支配するようになる。しかし、同十八年（1590）に家康が関東へ移封されると、豊臣秀吉の甥である羽柴秀勝が置かれ、翌年には代わって秀吉の家臣である加藤光泰、同じく浅野長政へと、甲斐国の支配者は目まぐるしく変化していった。甲府城は秀吉の命令により関東の徳川家康をけん制する目的で、羽柴秀勝、加藤光泰らによって築城が始められ、浅野長政、幸長父子の頃（1600年頃）に完成をみたと言われている。甲府城が築かれた一条小山にあった一蓮寺は天正十九年（1591）頃には城下町の南方に移転され、他の寺院も城や城下町整備時に順次移動させられている。慶長五年（1600）の関ヶ原の戦い以降は、長政・幸長が紀伊国和歌山へ転封、再び家康の支配下となり、徳川義直（城代平岩親吉）、徳川忠長、徳川綱重・綱豊父子と、宝永元年（1704）まで徳川氏の一族の領主が続いた。慶長十二年（1607）には幕府の直轄地となり、武川十二騎が城番を務めるようになった。宝永元年、5代将軍綱吉の側用人である柳沢吉保が武州川越から15万石で入部し、翌宝永二年には甲府城の屋形曲輪・楽屋曲輪などの殿舎の造営と石垣の修築を行うとともに、武家地の不足に伴い城下町の再整備が行われた。調査地点から北に約100mの地点の調査では、近世の馬場跡や井戸、近代の甲府監獄署に伴う上水跡などが確認されている。

近代（明治～太平洋戦争）　明治六年（1873）の廃城令により甲府城は内城のみが残されることとなり、明治十年前後には城内の主要な建物はほとんどが取り壊された。調査地点には明治八年（1875）に甲府監獄署が置かれた。しかし、明治三十六年（1903）に中央線が開通し、甲府駅が置かれると、県都の駅前に監獄署は不都合であるとの嘆願書が提出され、明治四十五年（1912）に現在の甲府市青沼の地へ移転された。その後、調査地点には私立山梨病院が昭和初期まで置かれていた。また、大正二年（1913）には近代上水道が甲府市街地に開通し、江戸時代から使用されていた近世上水は廃止された。中央線の開通に伴い屋形曲輪・清水曲輪が解体され、昭和30年代まで堀の埋め立てや石垣の解体が行われた。甲府城・甲府城下町の跡には次第に新しい市街地が造られていった。しかし、昭和二十年（1945）7月6・7日の空襲により甲府市街地の約74％が焼き尽くされ、城下町の様相はほぼ失われてしまった。

第３章　調査の方法と成果

第１節　発掘調査の方法

発掘区の設定　調査区は事業用地内における試掘調査の成果を基にして、甲府信用金庫本店が建っていた周囲に「ロ」の字状に設定した。事業用地内に世界測地系座標に即して基準杭を設定した。調査区が複雑な形状のため、発掘調査にあたりグリッドは設定していない。調査にあたり、排土置き場を事業用地内に確保しながら調査を実施するため、調査区の南側・東側を１区、北側を２－１区、西側を２－２区と分割して、順に調査を行った。

発掘作業　発掘調査では表土を重機を用いて遺物包含層上面まで掘削し、人力にて遺物包含層を掘削して遺構の精査を実施した。確認した遺構は図化・写真撮影など記録作業を行いながら掘削し、必要に応じて遺構の半裁を行い、土層を観察したのち掘削した。出土遺物については、破片が大きなもの、完形に近いもの、検出比率が稀なものについては光波測距儀を用いてドットを落としたのち取り上げ、それ以外のものは一括して取り上げた。

写真撮影　全景写真はRCヘリなどによる空中写真撮影を行ったほか、調査区内の高いところより鳥瞰写真を撮影した。また、地理的景観における立地を表現することを目的として、調査区域周辺の俯瞰写真を撮影した。部分写真は遺構や遺物の形成や、埋没状況がよくわかる状態で写真を撮影し、その他、遺構を特徴づける状態であれば、前述以外にも写真撮影を実施した。なお、遺構・遺物の写真撮影には35mmカラースライドフィルム、35mmモノクロフィルム、デジタルカメラを使用した。

第２節　基本層序

発掘調査では調査区の北東壁、南壁、南西壁において、土層堆積状況を確認した。そこで確認した層は、大別して６層に分類できる（第３図）。なお、調査区の南西側については、遺構が密集しており、基本土層の十分な検討ができなかった。

第３節　遺構・遺物

甲府城下町遺跡（公用車等駐車場地点）では、集水枡（水路含む）１基、暗渠１条、石垣２箇所、盛土状遺構１箇所、溝４条、土坑２基の遺構を検出した。時期は江戸時代～近代であるが、調査地点が傾斜していたため、遺構面は設定して区分することができなかった。そのため、一括して記載する。

（１）調査１区の遺構・遺物

２号土坑（第６図）

調査１区の南側で確認された。直径約0.8m、深さ約0.4mの円形土坑である。掘られた目的は判然としない。３号溝と重複しているが、２号土坑の方が新しい。

出土遺物（第25図80～82）

80は差歯下駄である。先端と左側の一部に、使用の際についたと思われる凹みが確認できる。小型のため、女性用・子供用の可能性も考えられる。81は木杭である。先端をナタのような工具で加工している。ホゾ穴のような痕跡が確認されており、建築部材などを転用していると考えられる。82は丸太状木製品である。柱材のように見えるが、用途は不明である。先端をナタのような工具で加工している。

帰属時期　覆土中の遺物から、近代に帰属すると考えられる。

３号土坑（第６・７図）

調査１区の南側で確認された。最大径約1m、深さ約0.7mの楕円形の土坑である。掘られた目的は判然としない。３号溝と重複しているが、３号土坑の方が古い。

出土遺物（第 25 図 83 ～ 84 ）

83 は木杭である。先端をナタのような工具で加工している。ホゾ穴のような痕跡が確認されており、建築部材などを転用していると考えられる。84 は丸太状木製品である。柱材のように見えるが、用途は不明である。先端をナタのような工具で加工している。側面には、ナイフで付けたような横方向の傷が多数確認できる。

帰属時期　覆土中の遺物から、近代に帰属すると考えられる。

3 号溝（第 6・7 図）

調査 1 区の南側で確認された。東から西の方向へほぼ直線に伸びる素掘りの溝である。長さ 25.2m、幅はほぼ一定で 0.2mである。掘り込み面は、造成層と考えられる灰黄褐色のシルト混じりの層である。覆土周辺はグライ化しており、底部には中粒砂が堆積している箇所もあることから、水路であったと考えられる。流れは地形に沿って、東から西の方向である。南側の道路とほぼ平行しているが関係性は不明である。2 号土坑・3 号土坑と重複しているが、3 号土坑・3 号溝・2 号土坑の順で新しい。

遺構内を含め、遺構の周辺に木杭が多数刺さっている。例えば、断面図b－b'、e－e'、f－f'などは遺構と直行するように木杭が打ってあるが、関係性は不明である。

出土遺物（第 17 図 1 ～ 4 、第 21 図 51 、第 25 図 85 ～ 90 ）

1 は瀬戸・美濃産の猪口であり、明治時代前半の資料と考えられる。2 は珉平の小判皿であり、19 世紀後半の資料と考えられる。3 は瀬戸・美濃産の碗 17 世紀末葉から 18 世紀前葉の資料と考えられる。4 は在地窯産と考えられる土瓶。赤みを帯びた胎土で、緑色の釉薬を施している。明治期の資料と考えられる。

51 は巴文の軒丸瓦である。

85 ～ 88 は木杭であり、先端をナタのような道具で加工している。85・86 はホゾ穴があり、建築部材などを転用していると考えられる。86 ～ 88 は刺さった状態で検出された。89 はヘラ状の木製品。90 は木杭であるが、85 ～ 88 と異なり角材である。側面に和釘が刺さっており、何らかの部材であると考えられる。

周辺から出土した遺物（第 28 図 126 ～ 128 ）

126・127 は丸太状木製品である。柱材のように見えるが、用途は不明である。127 は上部が切断されている。平面上は 3 号溝と重なっているが、遺構よりも深い層から出土した。128 は木杭であり、先端をナタのような工具で加工している。3 号溝の脇に刺さった状態で出土した。

帰属時期　覆土中の遺物から、近代に帰属すると考えられる。

東側石垣（第 9 図）

調査 1 区の南側で確認された布積みの石垣である。東から西へ向かって約 6.4m伸びており、西端で北に直角に折れ曲がり約 2.1m伸びている。面はそれぞれ南側と西側を向いている。東側と北側はかく乱を受けて失われており、東西に伸びる南側も中央付近が失われている。ここには 1 段につき 4 個程度の築石があったことが推測される。築石は安山岩であり、自然石と加工した切石の双方を使用している。築石の間には詰石が確認され、南面の東側には上の築石の石尻を上げるような割石が置かれている。全体的な印象としては野面積みに近い。築石は南面の方が大きく、長さ 0.5 ～ 0.7m程度であり、西面は長さ 0.3 ～ 0.5m程である。隅角部の築石は比較的大型の石を使用している。全体的に南面の方が精緻に築かれている印象を受ける。築石には矢穴も確認されており、穴の幅は約 5 ～ 6cmである。石垣は 2 段積まれているが、裏栗層の幅は 0.4 ～ 0.5m程度であることから、さらに上段が積まれていた可能性も推定される。また、胴木は確認できなかった。布積みではあるが、根石は地形に沿って西へ傾斜しており、南面の東端と西端の築石の上端は約 0.5mの比高差が認められる。西面の根石には比高差は認められない。

遺構周辺のかく乱範囲には築石と同程度の大きさの切石が複数転がっており、もともとはこの東側石垣の築石であったと考えられる。これらの切石の一部には矢穴も確認される。

石垣を構築する際の造成についても、痕跡が確認された。まず、石垣の下層は約 0.2mの盛り土がなされ、その上に裏栗層、築石が置かれている。根石はすべて埋められており、何層にもわたって造成を行ったことが見て取れる（第 9 図断面図）。また、裏栗層よりも下層に、木杭が打たれていることが確認された。いわゆる乱杭として地盤を安定させるために打たれた可能性もあるが、肝心の築石の下層には確認できず、関係性は不明である。

石垣が築かれた目的は判然としないが、地割りなどの区画か、建物の基礎であった可能性が考えられる。

南側で確認できる 4 号溝は、北への折れ曲がりも含め、平行するように配置されている。4 号溝は東側石垣の造成土を掘り込んで造られており、東側石垣の方が古い遺構である。両者が同時に存在したかは判然としないが、同様の区画を意図していたと考えられる。

周辺の出土遺物（第 20 図 47 、第 23 図 68・69 ）

石垣の中から遺物は確認できなかったが、周囲の造成土からは遺物が出土した。47 は瀬戸・美濃産の小皿である。17 世紀後葉の資料と考えられる。68 は軒丸瓦である。69 は角桟切り落とし板塀瓦である。漆喰が付着している。

帰属時期　布積みであることや矢穴等を考慮すると、江戸時代（ 18 世紀以降）が推定されるが、明確には断言できない。

4 号溝（第 8 図）

調査 1 区の南側で確認された。東から西の方向へ伸びており、途中で 90°屈曲して北へ向かっている。長さ東西約 14m、南北約 10m、幅はほぼ一定で 0.3 ～ 0.5mである。覆土は礫や瓦混じりの細粒砂で固められている。東側石垣と沿うような形で伸びているため、同様の区画を意識して造られたと考えられるが、同時期性は不明である。遺構の掘込面は石垣を構築した際の造成土であることから、東側石垣よりも新しく、3 号溝よりも古い。

0.2 ～ 0.3m程の間隔で底が平坦な木杭が連続して埋め込まれており、列となっている。おそらくは土地を区画する構築物があったと考えられるが、それが柵か、板塀か、漆喰塀かは判然としない。遺構覆土や付近で確認された漆喰が付着した瓦は、1 点のみであり（第 23 図 69 ）、他に漆喰やそれが付着した遺物は確認されなかった。また、遺構の東側は木杭が確認できなかった。

出土遺物（第 17 図 5 ～ 10 、第 21 図 52 ～ 56 ）

5 、6 は肥前産の碗である。5 は染付で内面に竜の絵が描かれており、外面にも竜らしき爪が描かれている。5 は 19 世紀前葉、6 は 18 世紀後葉から 19 世紀初頭の資料と考えられる。7 、9 は瀬戸・美濃産の鉢である。7 が 18 世紀前葉から後葉、9 が 18 世紀前葉の資料と考えられる。8 は瀬戸・美濃産の灯明皿である。19 世紀（明治期）の資料と考えられる。10 は土師質の土器である。かわらけというよりは、古代の土師器坏のような印象を受ける。

52 、53 は丸瓦である。53 には釘孔が確認できる。54 は軒丸瓦である。55 、56 は軒桟瓦である。

前述のとおり、底が平坦な木杭が 30 点以上確認されたが、炭化して遺存状態が悪く、図化に耐えうる資料がなかったため、写真のみの掲載とした（写真図版 5 ）。

帰属時期　覆土中の遺物や他の遺構との関係から、江戸時代（ 18 世紀以降か？）に帰属すると考えられる。

（2）調査 2 － 2 区の遺構・遺物

6 号溝（第 11 図）

調査 2 － 2 区で確認された。北から南の方向へほぼ直線に伸びる素掘りの溝である。GLより 2m近く下がった箇所が遺構確認面であったため、安全のため遺構の北側はトレンチ部分のみの調査を行った。長さは確認できるだけで約 9m、幅は約 2.6mであり、南側は暗渠との接続部付近で収束していた。覆土周辺がグライ化しており、現在でも水が染み出てくることから水路であったと考えられる。流れは地形に沿って北から南の方向である。断面図 5 層の下層で中粒砂が帯状に堆積していることから、溝底が複数存在したことが想定される。

また、溝の中の西側を沿うようにして、木杭が南北方向へ連続して見つかっている。溝の南端では板柵が見つか

っており、西側にもしがらみや板柵が存在した可能性が考えられる。

出土遺物（第 17・18 図 11 ～ 21 、第 22 図 57・58 、第 26 ～ 28 図 91 ～ 122・124・125 ）

11 ～ 13 は瀬戸・美濃産の碗である。いずれも外面に染付が施されており、11 は内面にも染付がほどこされている。12 は内面に「獄」という文字が書かれている。明治期に設置された甲府監獄署に伴う資料と考えられる。文字は焼成後に書かれており、備品として納入された後に書かれたことが推定される。14 は瀬戸・美濃産の碗の蓋である。11 ～ 14 は明治時代前半の資料と考えられる。15 は肥前産の鉢である。17 世紀後葉から 18 世紀初頭の資料と考えられる。16 は在地窯産と考えられる鍋の把手部。赤みを帯びた胎土で、緑色の釉薬を施している。明治期の資料と考えられる。17 は京都信楽産の銚子である。19 世紀後葉の資料と考えられる。18 は瀬戸・美濃産の植木鉢である。19 世紀中葉の資料と考えられる。19 は産地不明の鉢である。明治期の資料と考えられる。20 は産地不明の素焼きの甕である。

21 は鉛筆状の石製品である。白色の粘板岩のような石材であり、ろう石のように使われたと考えられる。

57 は軒桟瓦である。58 は瓦である。焼成不良のためか、赤みを帯びた色調である。

91・92 は木杭であり、先端をナタのような工具で加工している。93・94 は楔である。95 は樽などの栓と考えられる。96 は曲げ物の底板である。97 は木札であり、上部に孔が確認できる。98 は札のような形をした板状木製品である。表にやや黒い部分があり、文字のようにも見えるが詳細は不明である。97・98 は赤外線写真撮影を行ったが、墨書の痕跡は確認できなかった。99 は鉛筆状の木製品であるが、用途は不明である。100・101 は箸である。箸は多く出土したが、そのうち状態の良い 2 点を図示した。101 は先端が一部焦げて黒くなっている。102 、103 は用途不明の木製品である。104 は棒状木製品である。尖端が焦げて黒くなっている。木片は特に多く出土しており、その中でも 105 ～ 114 は比較的大きく、加工痕を確認できるものである。木片の大半はナタのような道具で加工されており、面は平滑である。115・116 は木板である。両者とも 6 号溝の南側の壁面に垂直に立つように出土した。周辺の木杭に支えられるように立っていたため、護岸の板柵であると考えられる。また、暗渠との接続部にまで達していることから、暗渠に水が流れないようにする役割もあったと推測される。両者は接合しないが、大きさや断面形から同一個体である可能性も考えられる。

覆土中からは多くの金属製品が出土したが、その中で状態の良いものを図示する。117 ～ 122 は和釘である。このうち 122 以外は基部が残存しており、頭巻釘である。

124 は棒状の木製品である。加工はほとんど確認できない。大型の礫の下に挟まって出土した。取り上げの際に引き抜くことができなかったため、現場でねじ切って取り上げた。そのため、全長はさらに長かったと考えられる。125 は板状木製品である。裏側にはナタのようなもので切った加工痕が確認できる。裏側の中央付近に凹みを入れており、その中央に孔が 4 か所確認できる。そのうち 1 か所には和釘が刺さっている。何らかの部材であると考えられる。

また、覆土中から人物名らしき漢字が書かれた木札が出土したが、後述のとおり甲府監獄署に伴う資料の可能性を考え、掲載は控えた。

帰属時期　覆土中の遺物から、明治時代に帰属すると考えられる。甲府監獄署の図面に 6 号溝と思われる水路が描かれており（第 34 ～ 36 図）、それに伴うものと推測される。

盛土状遺構（第 10 図）

調査 2 － 2 区の西端で確認された。平面上で確認できず、調査区の西壁を精査したところ、シルトと細粒砂が交互に堆積していることから、土塁のような形で盛り土を行っていたと判断した。各層には礫や瓦混じりで、固く締め固められていた。一部の層には炭化物も確認された。幅や長さなどは判然としないが、6 号溝と並行するように、北北西から南南東へ伸びていたと推測される。

構築土に瓦や陶磁器片は出土したが、断片的な資料であることから、図化は行わなかった。

帰属時期　断片的に確認された遺構であるため、時期については判然としない。前述した甲府監獄署の図面の中で、6 号溝と思われる水路の脇に堤と書かれた線が見えるため（第 34 ～ 36 図）、それに伴う可能性も考えられる。

西側石垣（第 12 図）

調査 2 － 2 区の南西側で確認された布積みの石垣である。面はほぼ真北を向いており、長さ 2.7mに渡っている。築石は加工した安山岩を使用しており、長さ 0.4 ～ 0.5m程の石材が主体だが、長さ 0.8m程の大型のものも使われている。石垣の西端には未加工の自然石も確認できるが、他の築石と面が接合しておらず、築石ではないと考えられる。築石の加工は丁寧に行われており、築石同士の接合面を合わせているが、一部に詰石も使われている。いわゆる打込接と切込接の中間的な加工である。石垣は 2 段積まれているが、上部はかく乱を受けており、元々が何段であったかは不明である。裏栗石は存在しているが、上部からのかく乱を受けており、顕著には確認できなかった。ただし、西側には築石はないものの、裏栗石らしき層が薄く確認でき、石垣が伸びていたことが推測される。東側に石垣が伸びていたかは判然としない。また、胴木は確認できなかった。

遺構を真上から見下ろすと、築石が前後二重に存在している。第 2 面とした後ろの築石が当初から築かれていたものであり、第 1 面とした前面の築石は後から築かれたものである。第 1 面と第 2 面の間は、ほとんど隙間なく築かれており、面の軸も同一であることから、同じ遺構であると判断した。第 1 面、第 2 面とも目地はほぼ平行に積まれており、第 1 面の根石は西に向かって若干上がっている。周辺の自然地形は東から西に向かって急激に傾斜していることから、大規模な造成の上に石垣が築かれていることが窺える。第 2 面の築石には矢穴が散見され、穴の幅は約 6 ～ 7cmである。第 1 面の築石には矢穴は確認できなかった。第 1 面の築石が間知石のように石尻が角錐状に近くなっているのに対し、第 2 面の築石の石尻は尖ってはいない。このことから、築かれた時期が異なっている可能性が考えられる。二重に石垣を築いた理由は判然としないが、改修などが行われた可能性が考えられる。

西側石垣は断片的に確認されたため、築かれた目的等については判然としない。

周辺の出土遺物（第 18・19 図 22 ～ 42 、第 22・23 図 59 ～ 67 ）

石垣の中から遺物は確認できなかったが、周辺からは複数の時期の遺物が出土した。22・23・25・27 は瀬戸・美濃産の碗である。明治期の資料と考えられる。24・26・28 は肥前産の碗である。24 は 19 世紀前半、26 は 18 世紀後葉、28 は 19 世紀中葉の資料と考えられる。29 は小皿である。30 は瀬戸・美濃産の皿か鉢である。大正期～戦前の資料と考えられる。31 ～ 34 は肥前産の碗である。33 は被熱してススが付着している。31 は 18 世紀後葉、32 は 18 世紀中葉から後葉、33 は 18 世紀、34 は 18 世紀後半の資料と考えられる。35 は肥前産の皿である。17 世紀末葉から 18 世紀前葉の資料と考えられる。36 は肥前産の鉢である。口縁部は欠損しているが、形状から蓋がつく器種と推測される。18 世紀後葉の資料と考えられる。37 は京都信楽産の碗である。18 世紀中葉から後葉の資料と考えられる。38 は瀬戸・美濃産の灯明皿である。見込み部は被熱のためか、白化している。18 世紀前葉の資料であると考えられる。39・40 は産地不明の蓋と急須の注口部である。両者は同一の資料と考えられる。表面には鉄釉が施されている。41 は須恵器甕の胴部片である。42 は素焼きの甕である。

59 ～ 62 は軒丸瓦であり、全て巴文である。63 は丸瓦である。64 ～ 66 は軒平瓦である。全て唐草文である。64 には「やま二」の刻印が確認できる。67 は鬼瓦と考えられるが、断片的な資料であり、全体像は判然としない。

帰属時期　時期については判然としないが、集水枡よりも新しいことは明確である。築石の特徴から、第 1 面が築かれたのは近代以降であることが推定される。

暗渠（第 13 図）

調査 2 － 2 区の南西側で確認された。北東から南西方向へ約 6.7m伸びる石組みの水路である。平面形は直線ではなく、やや弧を描いている。南西側に大きさ約 0.5mの蓋石が乗り暗渠となっているが、北東側約 1mは蓋石が確認できない。遺構覆土に明確なかく乱が確認できないことから、当初より開渠であった可能性が考えられる。袖石

は安山岩の切石を並べて築いている。袖石は基本的には1段だが、部分的に2段になっている。大きさは長さ約0.2～0.4mであり、蓋石に比べて小型である。袖石、蓋石ともに矢穴は確認できなかった。袖石は石材同士の接合面を成形し、隙間のないよう整えている。溝底には石敷きなどはなく、シルト質の土が広がっている。

北東の6号溝との重複部には、東西方向の杭と板が確認できる。おそらくは6号溝の水が暗渠へ流れないよう、板柵で塞がれていたと考えられる。板柵より北側（6号溝側）の地山がグライ化しているのに対して、南西側（暗渠側）はグライ化していないことから、6号溝から水が流れていなかったことが窺える。

また、暗渠の蓋石と重複するような形で盛土状遺構のラインが北側に伸びていたと考えられるが（第10図）、関係は不明である。調査区外へと続く南西側には「二の堀」があり、そちらへ水を流していたと考えられるが、どのような目的があったかについては判然としない。

出土遺物（第20図45・46、第23・24図70～75）

暗渠の中からは、ほとんど遺物が出土しなかった。暗渠と6号溝の境界付近は、上層に瓦溜りが確認されたが、近代以降の資料が大半であった。

45は瀬戸・美濃産の碗である。19世紀中葉の資料と考えられる。46は産地不明のすり鉢である。すり目が金属工具で施されていることから、近代の資料と考えられる。

75は唯一、覆土から出土した平瓦である。74は暗渠の袖石に咬ませていた丸瓦である。45・46・70～73は暗渠の周辺から出土した遺物である。70は軒桟瓦である。71～73は輪違いである。

帰属時期　出土遺物に乏しく、時期については判然としない。明確なのは6号溝より古く、集水枡、7号溝より新しいということである。他の遺構との関係性から、江戸時代と推定している。

集水枡（第14・15図）

調査2－2区の南西側で確認された石積みの集水枡である。平面形は東西方向約1.6m、南北方向約1.2mの長方形を呈している。深さは後述する水路を含めて約1.1mである。石材は安山岩であり、積石には自然石と加工した切石の双方を使用している。積石は2段であり、布積みである。積石の間には詰石が確認され、全体的な印象としては野面積みに近い。積石は0.5～0.8m程が主体だが、控えも長く、全体的に大型の石材を多く使用している。積石には矢穴も確認されており、穴の幅は約5～6cmである。裏栗石も確認でき、かなり精緻に築造されている印象である。覆土は粘性の強いシルトが主体で、いわゆる砂層は6層を除いてほぼ確認できなかった。遺物が確認できたのは4・5層付近である。底は石敷などは確認できず、礫交じりの中粒砂が広がっている。

集水枡には3方向に石組みの水路があり、それぞれ北側水路、西側水路、南側水路と呼称する。地形や枡との接続部の高さから、北側水路が枡への引入口、西側水路、南側水路が吐水口と考えられる。北側水路、西側水路は両者とも枡を造ったのちに、それに付ける形で築かれている。袖石は安山岩の切石であり、長さ0.3～0.8mの石材を使用している。枡の積石よりもやや小型の石材を使用しており、控えもあまりない場合が多い。矢穴の確認できる石材もあり、穴の幅は枡と同様に約5～6cmである。袖石は最低でも2段が積まれているが、上層はかく乱を受けており、何段であったかは判然としない。裏栗層が確認できることから、2段以上であった可能性も考えられる。枡は上部が開口しており、地上へ出ていたと考えられているが、板などで蓋がされていた可能性は否定できない。北側水路は長さ約2m伸びており、それより北側は暗渠によって失われている。西側水路は長さ約2.6m伸びており、調査区外へ続いている。その先には「二の堀」があり、そちらに水を流していたと推測される。南側水路は他の2条の水路と違い、枡の積石を一石抜くような形で造られている。すぐに調査区外になってしまうため、水路として続いていくのかは不明だが、かく乱を受けていないこと、一石だけ積石が抜けているのは不自然なことから、水路であると判断した。他の2条の水路と違い、覆土に割石を多く含んでいる。もう一方の吐水口と考えられる西側水路と同時に存在したのか、付け替えがあったのかは判然としない。

西側水路が「二の堀」の方向へ向かっているため、排水が目的の一つとしてあったと考えられるが、大型の集水

枡を作った理由は判然としない。

出土遺物（第 19 図 43・44）

集水枡からも接続する水路からも、遺物はほとんど出土しなかった。43・44 は集水枡の覆土から出土した在地窯産と考えられる土鍋の蓋である。両者は同規格の製品である。赤みを帯びた胎土で、緑色の釉薬を施している。明治期の資料と考えられる。

帰属時期　時期については判然としないが、西側石垣、暗渠よりも古いことは明確である。積み方や矢穴などを考慮すると、江戸時代が想定されるが、明確には断言できない。枡の覆土から明治期の資料が出土したことから、近代まで開口していた可能性も考えられる。

7 号溝（第 16 図）

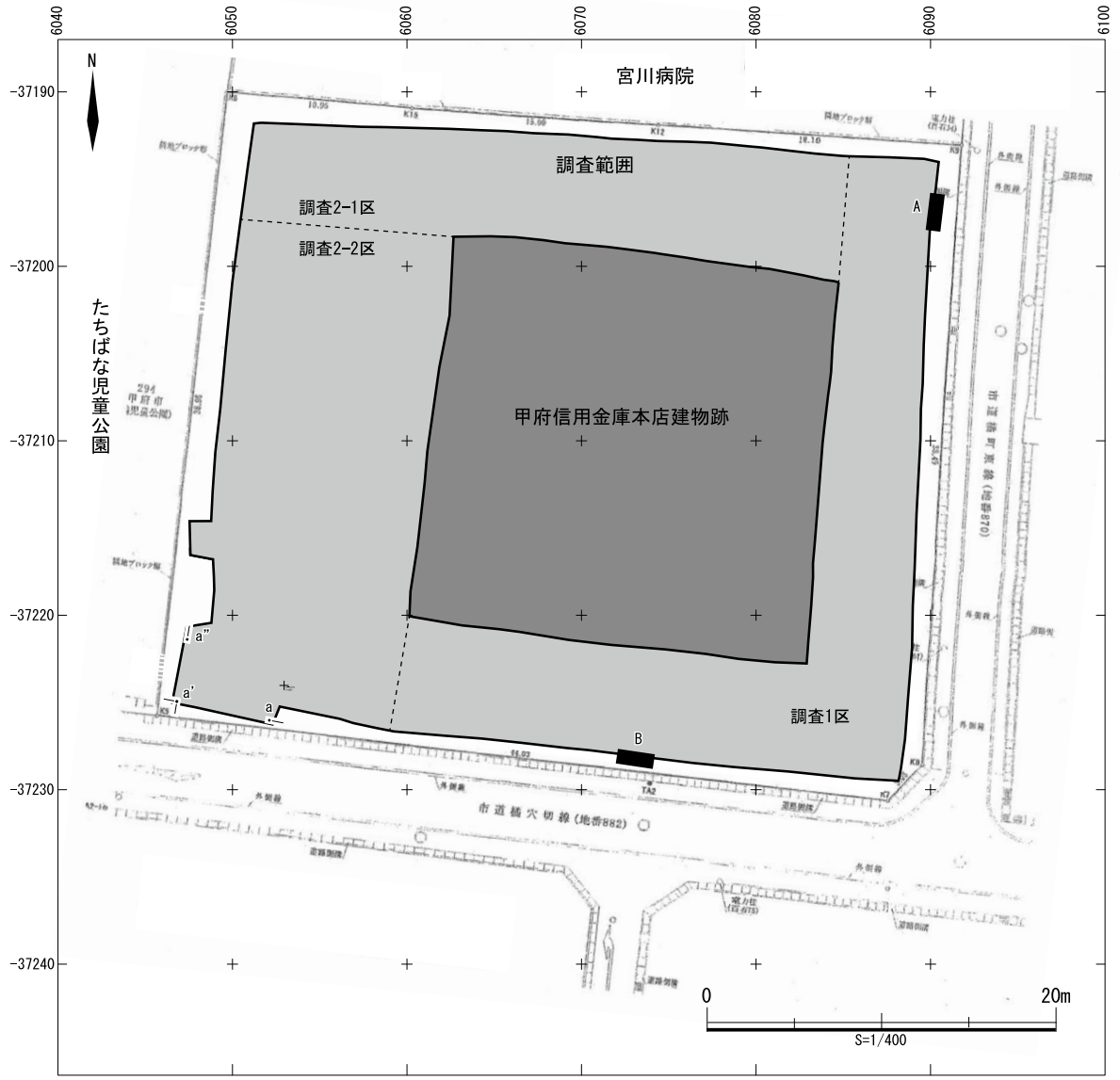
調査 2 － 2 区の南西側で確認された。南北方向へ約 3.4m伸びる溝である。深さ約 0.25mの覆土に、10cm程度の礫を多く含んでいることから、調査時は礫敷溝と呼んでいた。集水枡の北側水路と同方向へ伸びているが、やや軸がずれており繋がらない。造られた目的については判然としない。遺物は出土しなかった。帰属時期については判然としないが、暗渠よりは古い。

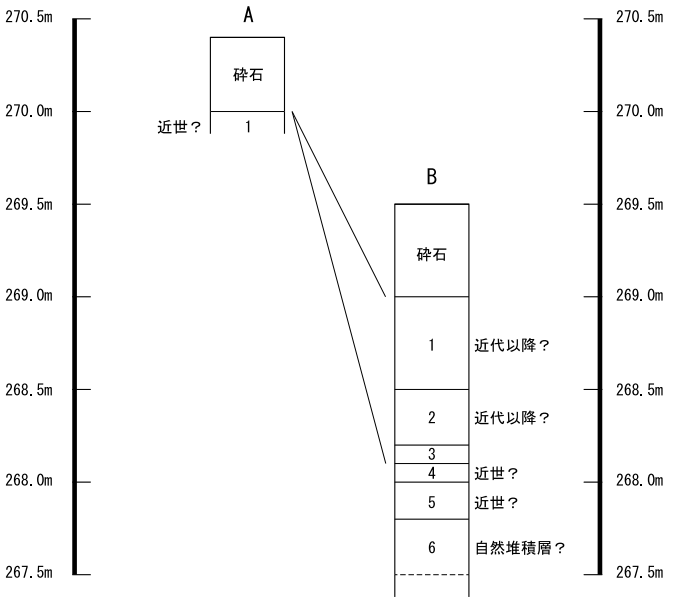
（3）表土・かく乱からの出土遺物（第 20 図 48 ～ 50 、第 24 図 76 ～ 79 、第 28 図 129 ）

表土やかく乱で確認された遺物のうち、特徴のある資料を図示する。48 は瀬戸・美濃産の碗である。みこみ部には「獄」の字の染付がある。明治時代に設置された甲府監獄署に伴う資料と考えられる。49 は瀬戸・美濃産のすり鉢である。すり目の間隔が広く、17 世紀以前の資料と考えられる。50 は羽口である。東側石垣の周辺で金属（青銅）が付着した土器（かわらけ）が出土しているが、関係は不明である（第 4 章第 2 節参照）。48・50 は調査 2 － 1 区から出土した。

76 は桟瓦である。77 は寛永通宝である。78 は大正 12 年に発行された十銭硬貨である。79 は記念メダルである。裏面に「大正十年十月十一十二日」「山梨縣醫師會主催第十一回関東東北醫師大會」と書かれており、大正期～昭和初期にかけて、調査区周辺に建っていた私立山梨病院に伴う資料と考えられる。

129 は木製の横槌である。表土から出土した。





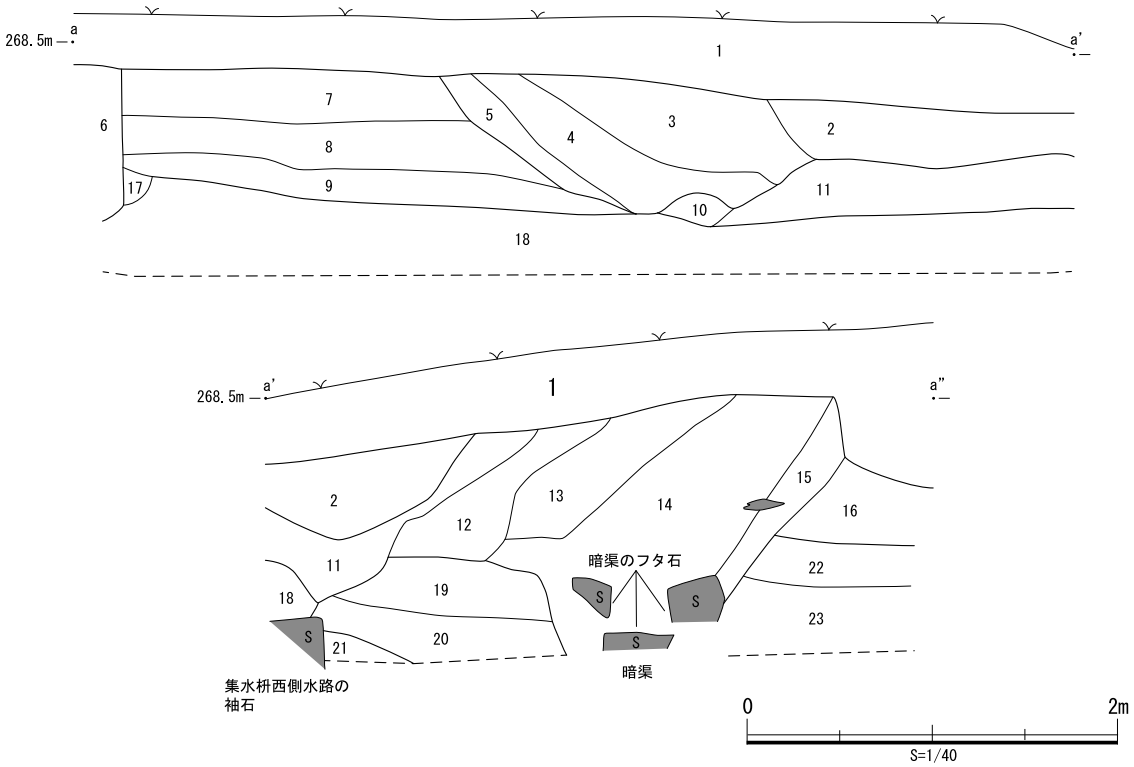
A

1　黄褐色のシルト質細粒砂
　しまり、粘性強い
　灰黄褐色のシルト塊を含む
　近世の造成層か？

B

1　暗褐色の細粒砂
　しまりあり、粘性ややあり
　近代以降の層か？
2　黒褐色のシルト質細粒砂
　しまり、粘性強い
　近代以降の造成層か？
3　黒褐色のシルト質細粒砂
　しまり、粘性強い
　2層と似ているが、より砂質である
4　灰褐色のシルト質細粒砂
　しまりあり、粘性強い
　拳大の礫を含む
　近世の造成層か？
5　灰色のシルト
　しまり、粘性強い
　4層と似ているが、よりグライ化している
　近世の造成層か？
6　灰黄褐色のシルト質細粒砂
　しまりややあり、粘性強い
　均質な中粒砂を含む
　自然堆積層か？

第３図　発掘調査区・土層模式図



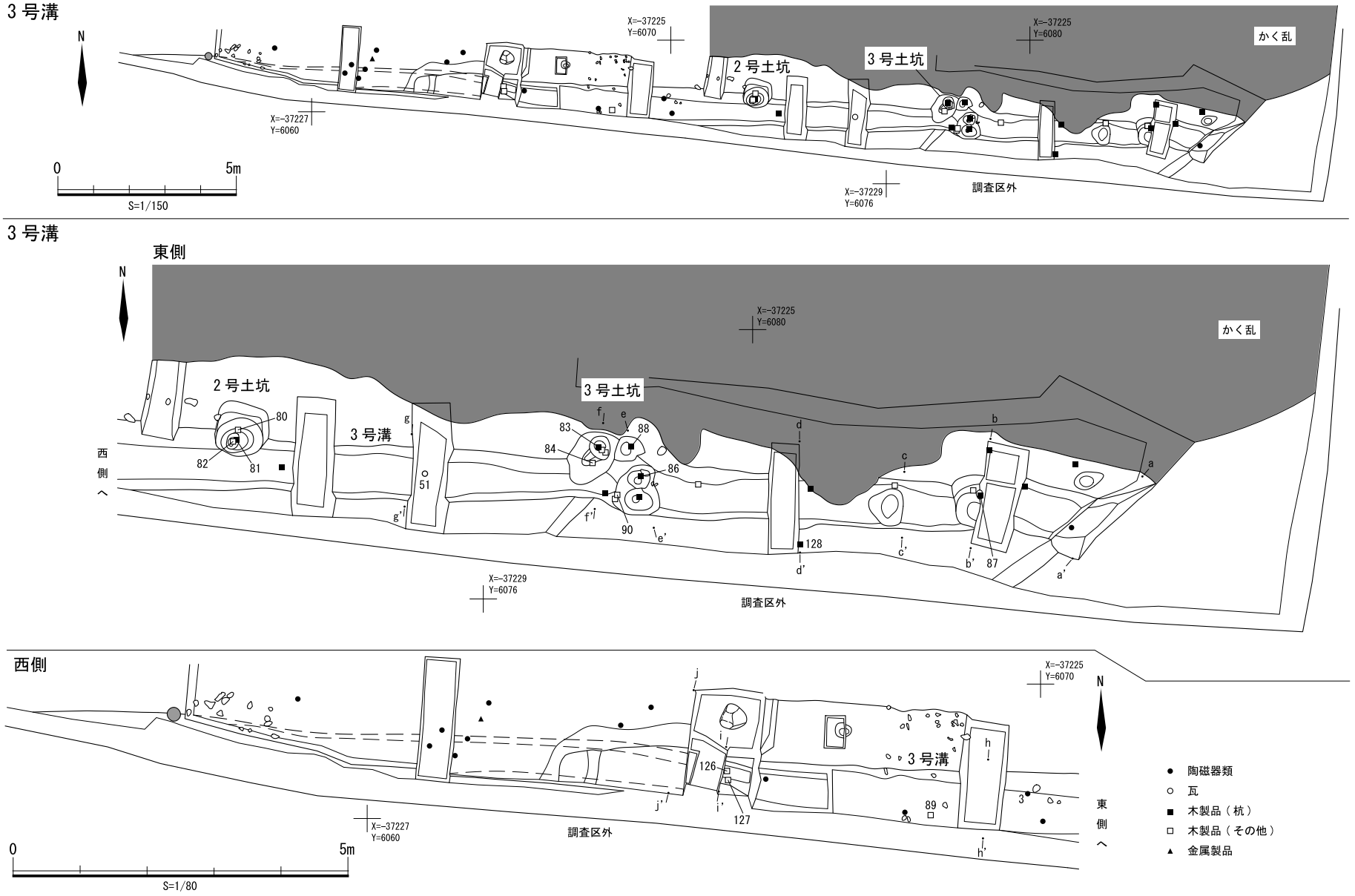
1　砕石・表土（かく乱）
2　暗褐色の細粒砂
　しまりあり、粘性弱い
　φ50～100㎜程の礫を多く含む
　黄褐色の中粒砂を多く含む
3　暗褐色のシルト質細粒砂
　しまり、粘性あり
　φ50㎜程の礫を含む
　黄褐色の中粒砂を含む
4　黒褐色のシルト質細粒砂
　しまり、粘性強い
　φ50㎜程の礫を含む
　黄褐色の中粒砂を多く含む
5　暗褐色の細粒砂
　しまり、粘性弱い
　下層は色調が黒い
6　暗褐色の中粒砂
　しまりあり、粘性弱い
　φ30～50㎜程の礫を含む
　灰色の粗粒砂を多く含む
7　暗褐色の細粒砂
　しまりあり、粘性弱い
　φ50～100㎜程の礫を多く含む
　灰色の中粒砂を多く含む
8　暗褐色の細粒砂
　しまりあり、粘性弱い
　7層と似ているが、礫・中粒砂の量が少ない
9　黒色のシルト質細粒砂
　しまり、粘性弱い
　グライ化して、やや青みを帯びている
10　黒褐色のシルト質細粒砂
　しまり、粘性弱い
　φ50㎜程の礫を含む
11　黒色のシルト質細粒砂
　しまり強く、粘性あり
　φ50㎜程の礫を少量含む
12　黒色のシルト質細粒砂
　しまり、粘性強い
　φ50～200㎜程の礫を多く含む
　灰色の粗粒砂を少量含む
　遺物包含層（瓦）
13　黒色の細粒砂
　しまり、粘性あり
　φ30～50㎜程の礫を少量含む
　灰色の粗粒砂を少量含む
　遺物包含層（瓦）
14　黒色のシルト質細粒砂
　しまり、粘性強い
　φ50～100㎜程の礫を多く含む
　割石を多く含む上層と少ない下層に分かれる
15　黒色のシルト質細粒砂
　しまりあり、粘性強い
　14層と比べて、礫が非常に少ない
16　黒色の細粒砂
　しまり弱く、粘性あり
　14・15層と似ているが、礫がさらに少ない
17　黒色のシルト質細粒砂
　しまり、粘性弱い
　ややグライ化している
18　黒色の細粒砂（上層）・シルト質細粒砂（下層）
　しまり、粘性あり
　φ50～100㎜程の礫を多く含む
　φ10～30㎜程の礫を含む
　近世の整地層か？
19　暗褐色のシルト質細粒砂
　しまり弱く、粘性あり
　φ50～100㎜程の礫を含む
　近世以降のかく乱層か？
20　黒褐色のシルト質細粒砂
　しまり弱く、粘性あり
　19層と比較して礫が少ない
　近世以降のかく乱層か？
21　暗褐色のシルト質細粒砂
　しまり、粘性あり
　集水桝西側水路の覆土
22　暗褐色の細粒砂
　しまり弱く、粘性あり
23　暗褐色のシルト質細粒砂
　しまり弱く、粘性強い
　22層より色調が淡い

※7～9層は埋め土か？
　11～13層は盛土状遺構の構成層か？
　18層は整地層か？
　19・20層は近世以降のかく乱層か？
　22・23層は自然堆積層か？

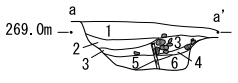
第４図　調査区南西部の土層堆積状況

6050
6060
6070
6080
6090
-37190
-37200
-37210
-37220
-37230
N
6 号溝
7 号溝
暗渠
西側石垣
集水枡
東側石垣
4 号溝
2 号土坑
3 号土坑
3 号溝
0
5m
S=1/250
：かく乱

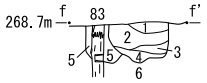
第 5 図　遺構全体図



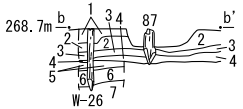
第６図　３号溝・２号土坑・３号土坑平面図



1　かく乱
2　黄褐色のシルト質細粒砂と1層の混土
　かく乱
3　暗褐色の細粒砂
　しまり、粘性あり
　φ200㎜程の礫を多く含む
4　暗褐色の細粒砂
　しまり、粘性あり
　3層に似ているが礫を含まない
5　黒褐色のシルト質細粒砂
　しまりややあり、粘性強い
　グライ化して青みを帯びている
6　暗褐色のシルト質細粒砂
　しまり、粘性強い
　黄褐色の粒子を多く含む

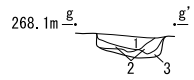


1　褐色の細粒砂
　しまり弱く、粘性ややあり
　φ100㎜以下の礫を多く含む
　酸化鉄が付着して赤みを帯びている
2　暗褐色のシルト質細粒砂
　しまり弱く、粘性強い
　下層にφ50㎜程の礫を少量含む
3　暗褐色の細粒砂
　しまり、粘性あり
　φ50㎜程の礫を含む
4　暗褐色の細粒砂
　しまり、粘性あり
　φ50㎜程の礫を含む
　3層に似ているが、グライ化して青み
を帯びている
5　青灰色のシルト質細粒砂
　しまりあり、粘性強い
　φ100㎜程の礫を含む
　グライ化して青みを帯びている
6　暗褐色の細粒砂
　しまり強い、粘性ややあり
　φ50㎜程の礫を含む
　白色の粗粒砂を多く含む
　グライ化して青みを帯びている
　地山か？

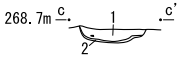


1　褐色のシルト質細粒砂
　しまり、粘性強い
2　明赤褐色の細粒砂
　しまりあり、粘性弱い
　φ50㎜以下の礫を含む
　中粒砂を多く含む
　酸化鉄が付着して赤みを帯びている
3　褐色のシルト質細粒砂
　しまり、粘性あり
　1層に似ているが、より砂質である
4　暗褐色のシルト質細粒砂
　しまり、粘性強い
　φ50㎜以下の礫を含む
　中粒砂を含む
5　褐色のシルト質細粒砂
　しまり、粘性強い
　φ50㎜以下の礫を含む
6　褐色のシルト
　しまり、粘性強い
　φ50㎜以下の礫を含む
　5層に似ているが、より粘性が強い
7　褐色のシルト質細粒砂と中粒砂の混土
　しまり強く、粘性あり
　φ100㎜以下の礫を含む

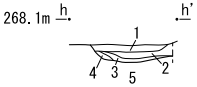
※W-3・26周辺は、グライ化して青みを
帯びている
※1～7層まで地山か？



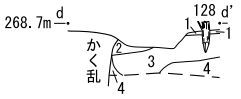
1　暗褐色のシルト質細粒砂
　しまり弱く、粘性あり
　φ10㎜以下の礫を含む
　焼土粒を含む
2　青灰色の中粒砂
　しまり、粘性弱い
　φ10㎜以下の礫を多く含む
　白色の粗粒砂を多く含む
　グライ化して青みを帯びている
3　黒褐色の細粒砂
　しまり弱く、粘性あり
　φ10㎜以下の礫を少量含む
　グライ化して青みを帯びている



1　黒褐色のシルト質細粒砂
　しまりややあり、粘性強い
　φ100㎜程の礫を含む
2　暗褐色の中粒砂
　しまりあり、粘性弱い
　酸化鉄が付着して赤みを帯びて
いる

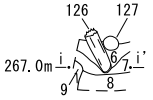


1　暗褐色のシルト質細粒砂
　しまりややあり、粘性強い
　φ100㎜程の礫を含む
　グライ化して青みを帯びている
2　暗褐色の中粒砂
　しまり、粘性弱い
　酸化鉄が付着して赤みを帯びて
いる
3　褐色の中粒砂
　しまり、粘性弱い
　酸化鉄が付着して赤みを帯びて
いる
4　暗褐色のシルト質細粒砂
　しまりややあり、粘性強い
　グライ化して青みを帯びている
5　暗褐色の細粒砂
　しまり強い、粘性ややあり
　φ100㎜程の礫を含む
　白色の粗粒砂を多く含む
　グライ化して青みを帯びている
　地山か？

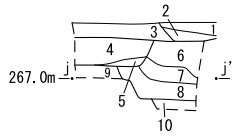


1　暗褐色のシルト質細粒砂
　しまり、粘性あり
2　暗褐色の細粒砂
　しまりあり、粘性弱い
　φ50㎜以下の礫を多く含む
　灰色の中粒砂を多く含む
　グライ化して青みを帯びている
3　灰褐色のシルト質細粒砂
　しまり、粘性強い
　白色の粗粒砂を含む
　グライ化して青みを帯びている
4　灰黄褐色のシルト
　しまり、粘性強い（3層よりも強い）
　白色の粗粒砂を少量含む

※1～4層まで地山か？

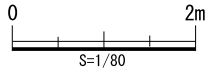


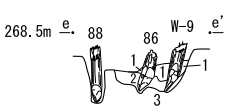
1　にぶい黄褐色(10YR4/3)の細粒砂
　しまり、粘性あり
　白色の粗粒砂を多く含む
　灰色のシルトをブロック状に含む
2　褐色(10YR4/4)のシルト質細粒砂
　しまり、粘性強い
　1層に比べて粗粒砂が少ない
3　暗褐色(10YR3/4)の細粒砂
　しまり、粘性あり
　白色の粗粒砂を少量含む
4　暗褐色(10YR3/4)の細粒砂
　しまり、粘性あり
　3層と似ているが、しまり・粘性が
強く、色調が濃い
5　暗褐色(10YR3/3)のシルト質細粒砂
　しまり、粘性強い
　灰色のシルトをブロック状に含む
6　黒褐色(10YR2/3)のシルト質細粒砂
　しまり、粘性強い
　グライ化して青みを帯びている
7　黒褐色(10YR2/2)のシルト質細粒砂
　しまり、粘性強い



8　暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)のシルト
　しまり、粘性とても強い
　白色の粗粒砂を少量含む
　細粒砂を含む
　グライ化して青みを帯びている
9　暗褐色(10YR3/3)の細粒砂
　しまり、粘性あり
　グライ化して青みを帯びている
　下層に向かって徐々にシルトに
近くなる
10　黒色(10YR2/1)のシルト質細粒砂
　しまりあり、粘性強い
　灰色の中粒砂を含む

※1・2層は3号溝の流れを組む流路か？
　3層は整地層か？
　4・5層は埋め土か？
　6・7層は自然堆積層か？
　9層は東側石垣の整地層
　10層は地山か？

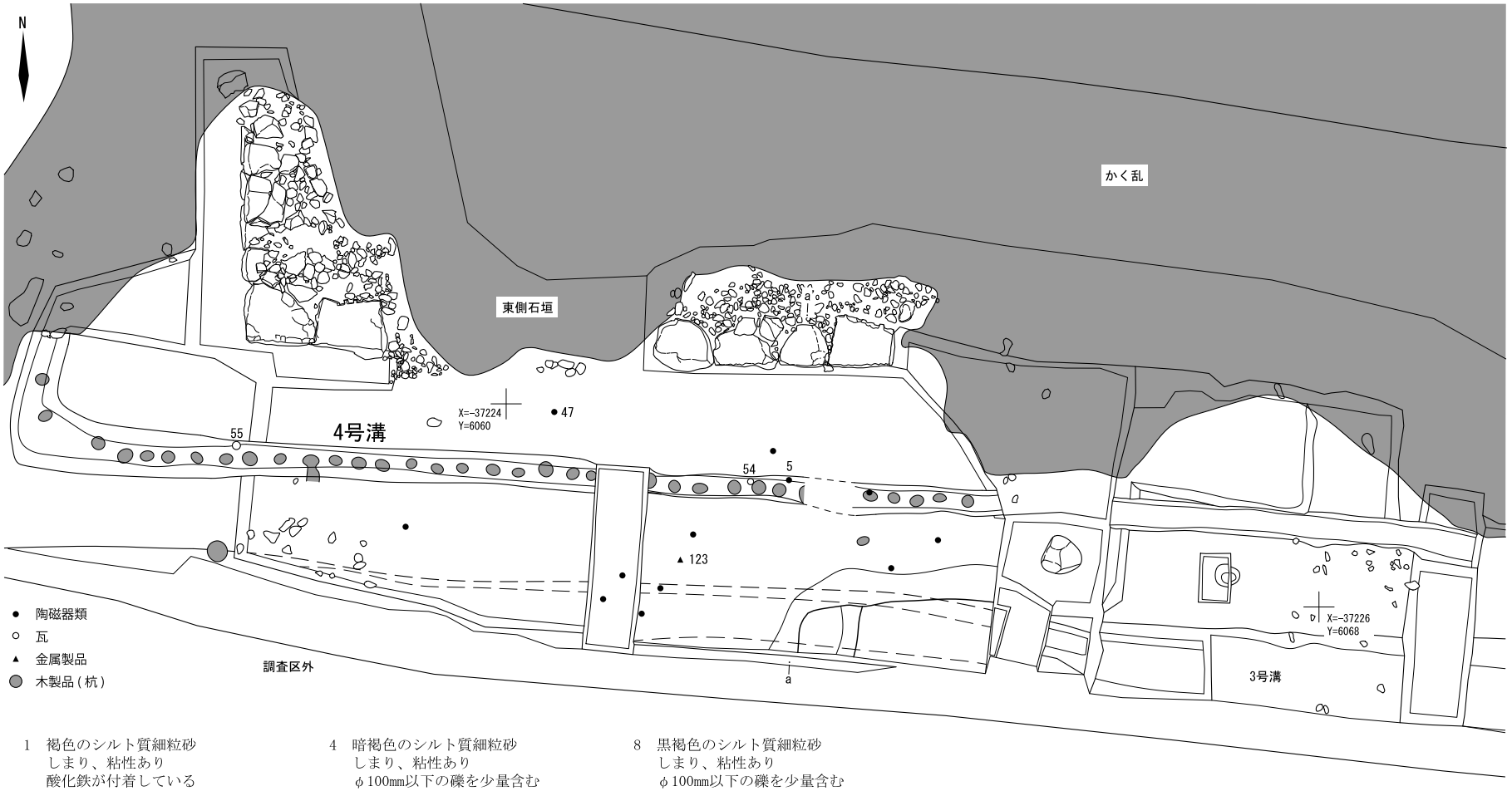




1　暗褐色のシルト質細粒砂
　しまりあり、粘性強い
　φ50㎜以下の礫を多く含む
2　灰褐色の中粒砂
　しまりあり、粘性弱い
　φ50㎜以下の礫を多く含む
　グライ化して青みを帯びている
3　褐色のシルト質細粒砂
　しまりあり、粘性弱い
　酸化鉄が付着して赤みを帯びている

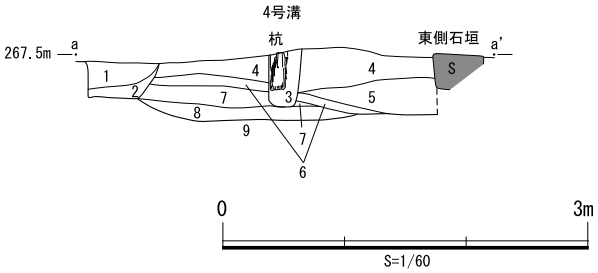
※1・2層は3号溝覆土、3層は地山か？

第７図　３号溝断面図

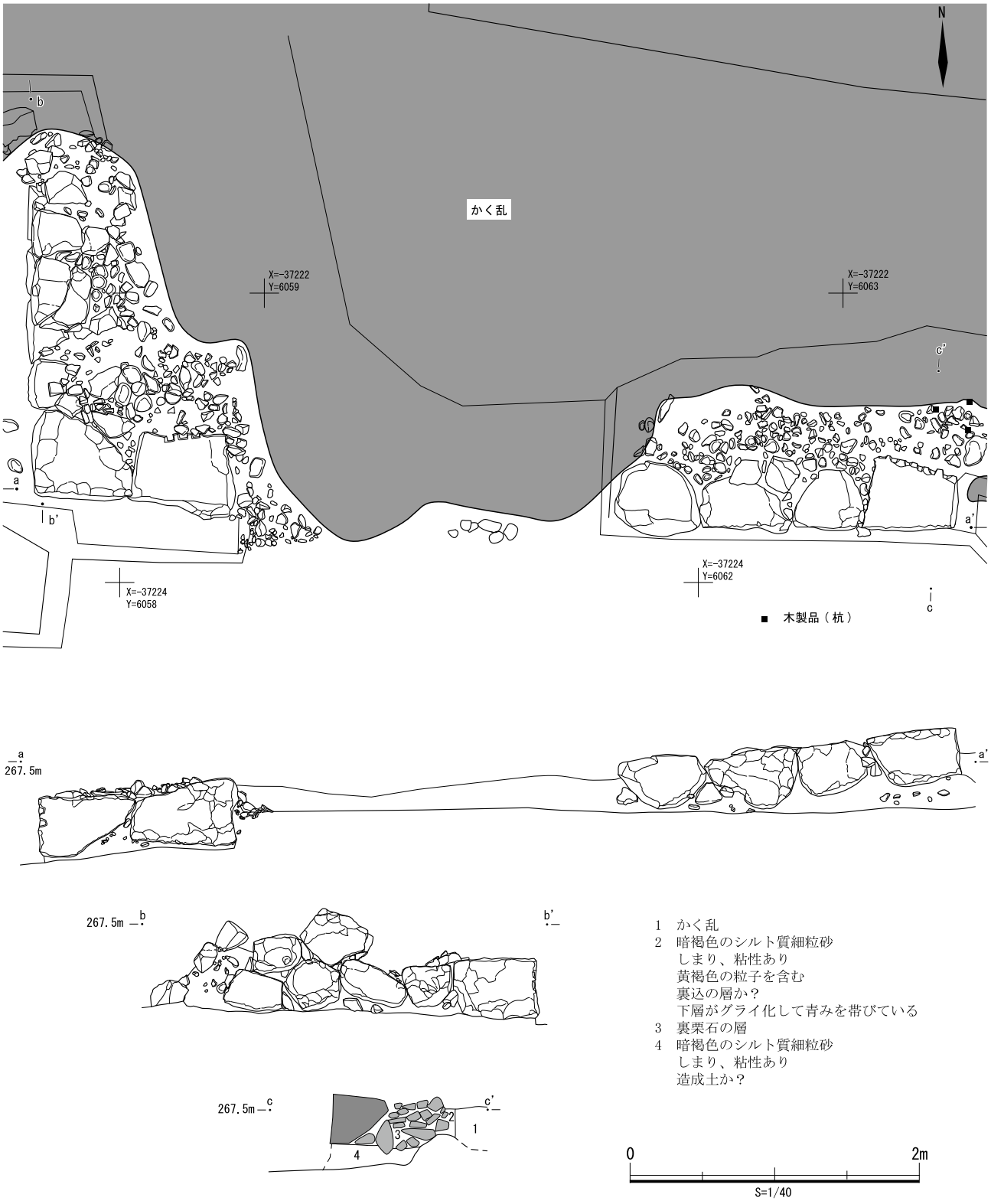


1　褐色のシルト質細粒砂
　しまり、粘性あり
　酸化鉄が付着している
2　暗褐色のシルト質細粒砂
　しまりあり、粘性強い
　ややグライ化している
3　暗褐色の細粒砂
　しまりややあり、粘性弱い
　φ100㎜以下の礫を少量含む
　瓦を含む
　底が平坦な木杭が等間隔で埋め込まれている
4　暗褐色のシルト質細粒砂
　しまり、粘性あり
　φ100㎜以下の礫を少量含む
　黄褐色のシルトをブロック状に含む
5　黒褐色の細粒砂
　しまり弱く、粘性あり
6　暗褐色のシルト質細粒砂
　しまり、粘性あり
　礫をほとんど含まない
7　暗褐色のシルト質細粒砂
　しまり、粘性あり
　φ100㎜程の礫を少量含む
　4層と似ているが、シルトブロックの量が多い
8　黒褐色のシルト質細粒砂
　しまり、粘性あり
　φ100㎜以下の礫を少量含む
9　暗褐色のシルト質細粒砂
　しまり、粘性強い
　φ50㎜以下の礫を含む

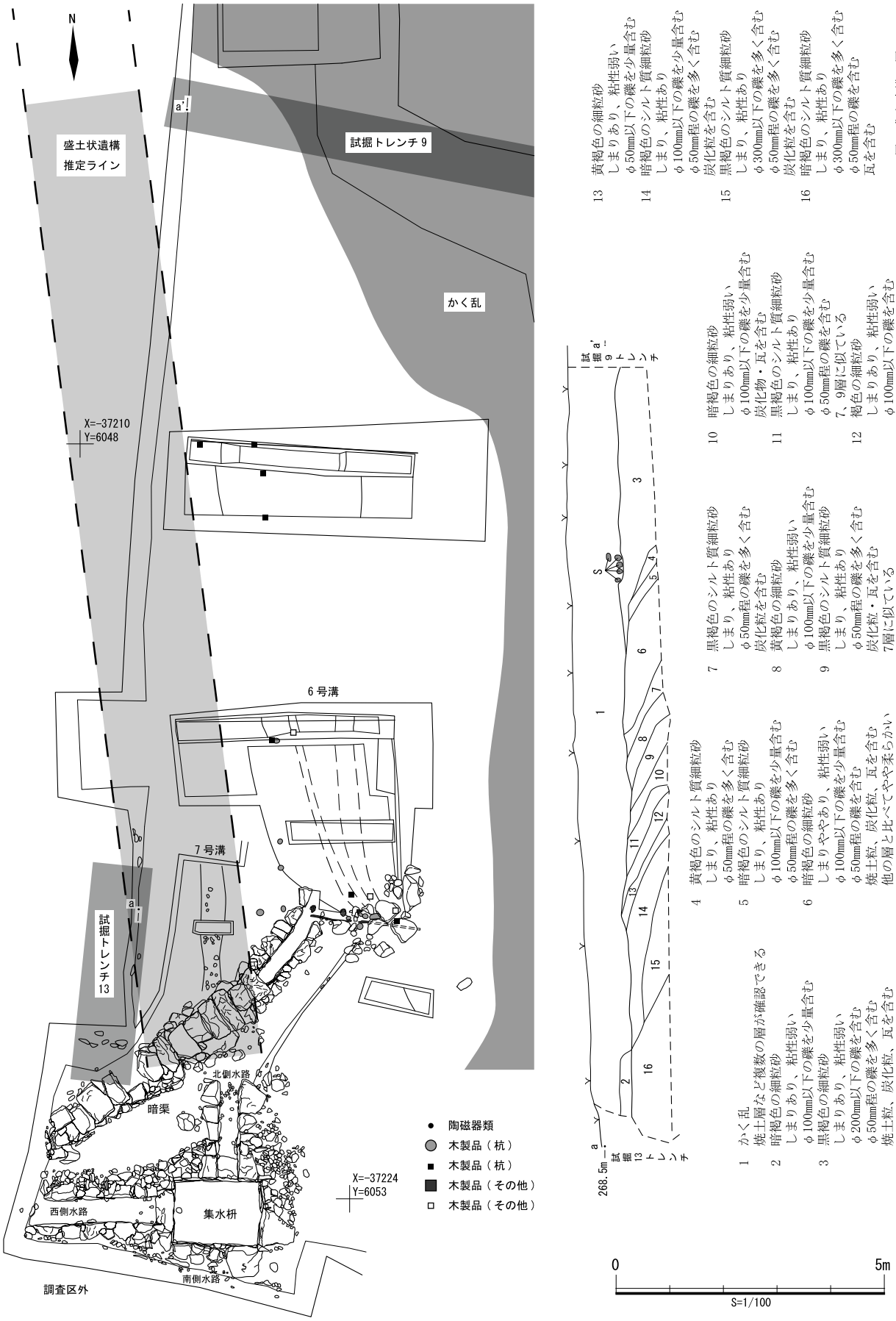
※1・2層は流路に伴う層か？
　3層は4号溝の覆土
　4～8層は東側石垣の整地層か？
　9層は地山か？



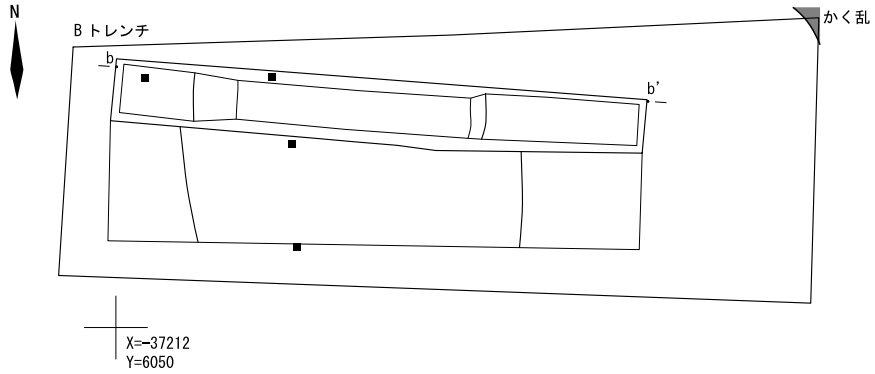
第８図　４号溝平面図・断面図



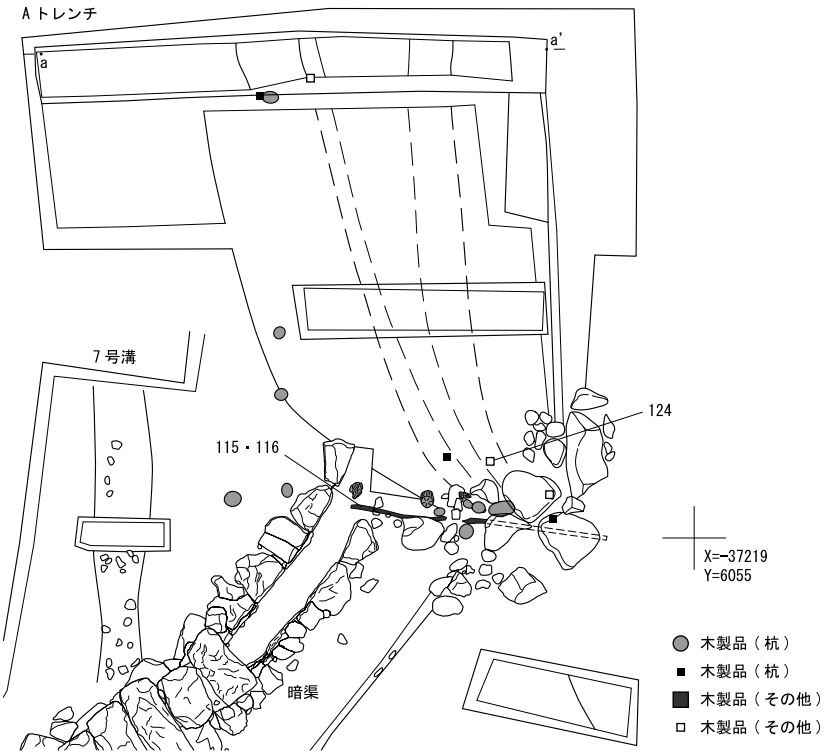
第９図　東側石垣平面図・立面図・断面図



第 10 図　調査区南西部拡大図・盛土状遺構断面図

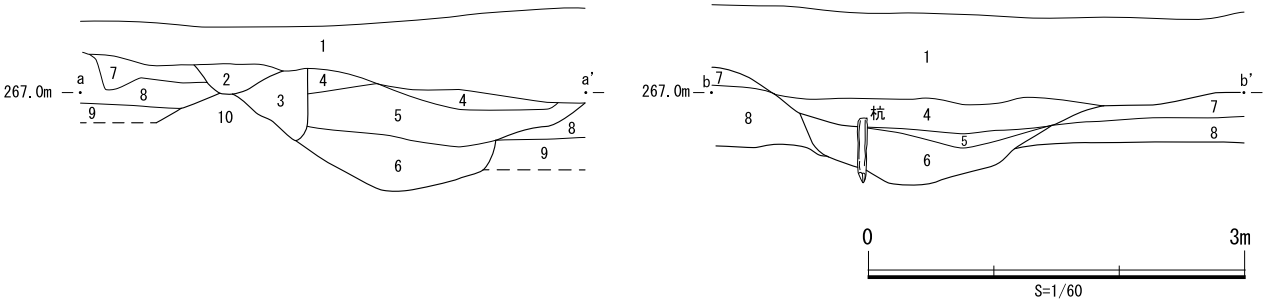


6号溝

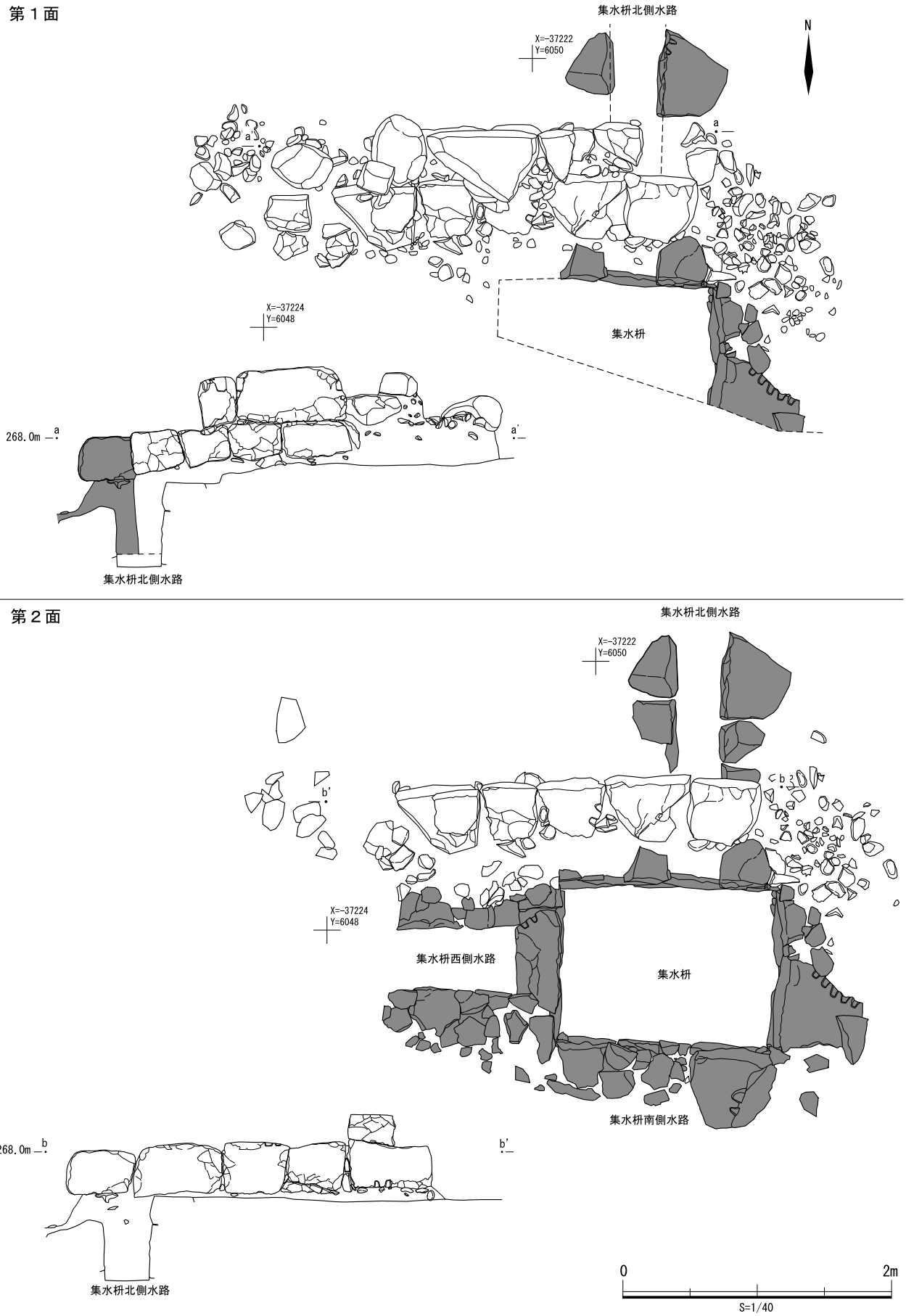


1　暗褐色の細粒砂
　しまり弱く、粘性あり
　φ100mm程の礫を多く含む
　下層はグライ化して青みを帯びている
　埋め土か？
2　暗褐色のシルト質細粒砂
　しまり、粘性あり
　φ100mm程の礫を少量含む
　白色の粗粒砂を含む
　部分的にグライ化して青みを帯びている
3　青灰色のシルト質細粒砂
　しまりややあり、粘性あり
　φ100mm程の礫を横木と埋めている
4　青灰色のシルト質細粒砂
　しまり、粘性あり
　φ100mm程の礫を少量含む
5　青灰色の細粒砂
　しまり、粘性ややあり
　φ100mm程の礫をわずかに含む
　下層に中粒砂が帯状に堆積している
6　青灰色のシルト
　しまり、粘性強い
　4・5層と比べて、礫をほとんど含まない
7　暗褐色のシルト質細粒砂
　しまり、粘性あり
　φ100mm程の礫を少量含む
　部分的にグライ化して青みを帯びている
8　褐色のシルト質細粒砂
　しまり、粘性強い
　7層と似ているが、粒子が細かく、礫が含まれない
9　灰黄褐色のシルト質細粒砂
　しまり、粘性やや強い
　8層と似ている
　グライ化して青みを帯びている
10　灰黄褐色のシルト
　しまり、粘性とても強い
　9層と似ている
　グライ化して青みを帯びている

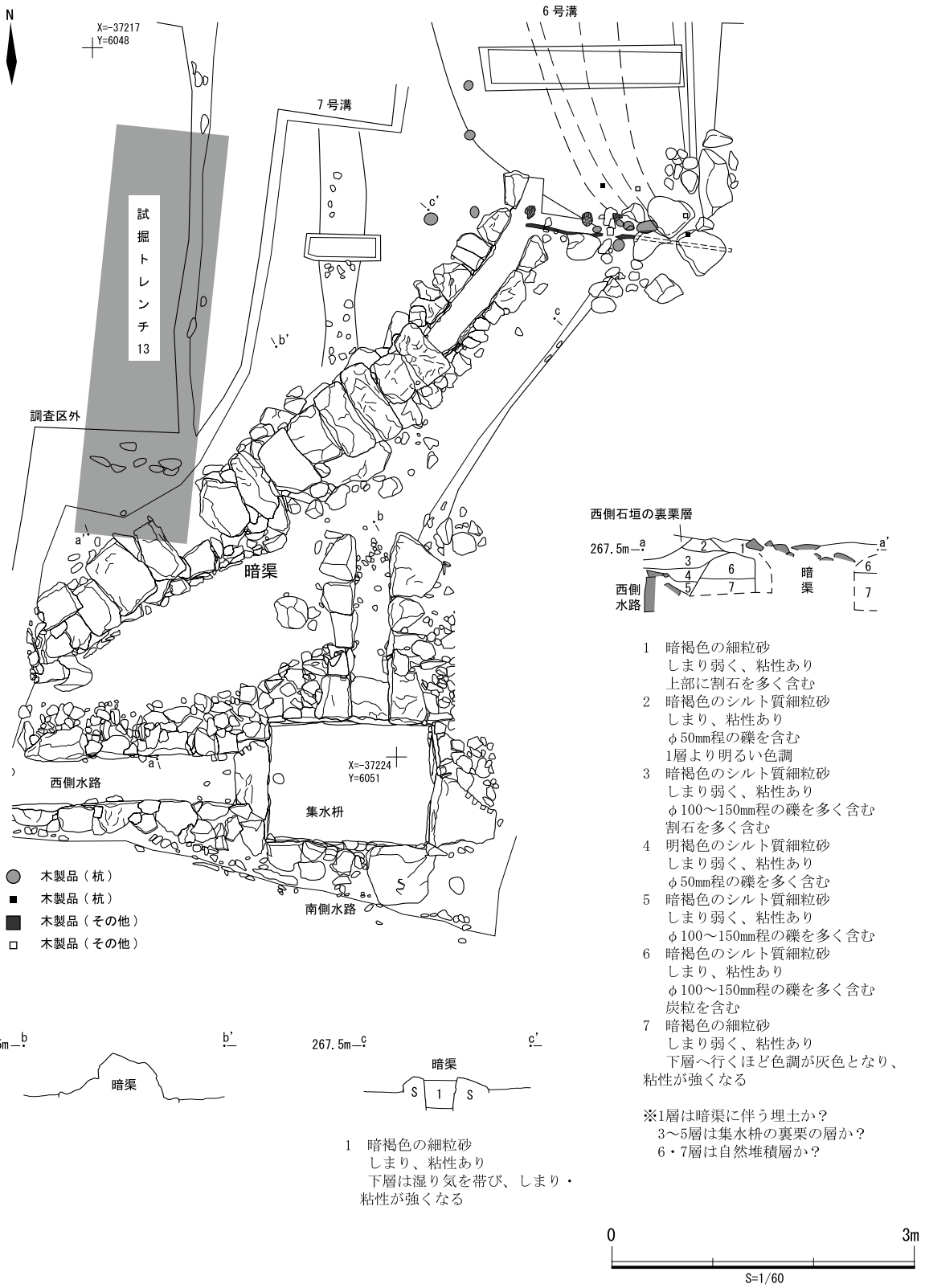
※4～6層は6号溝覆土、7～10層は地山か？



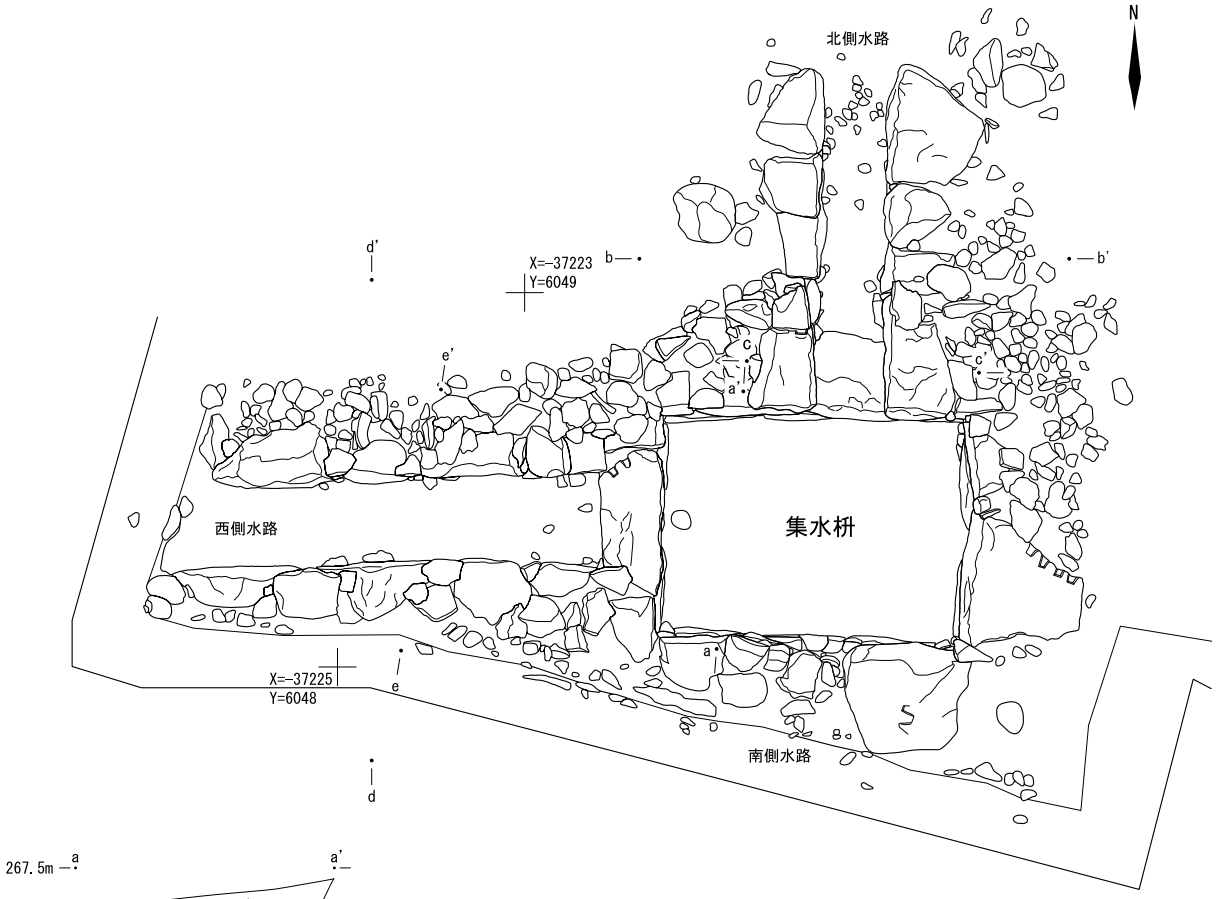
第11図　6号溝平面図・断面図

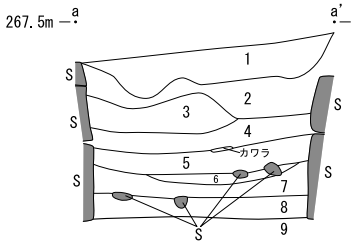


第 12 図　西側石垣平面図・立面図



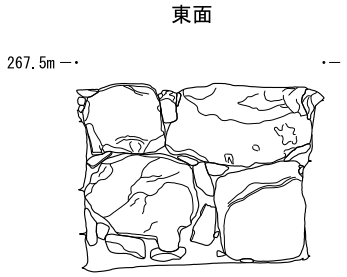
第 13 図　暗渠平面図・断面図

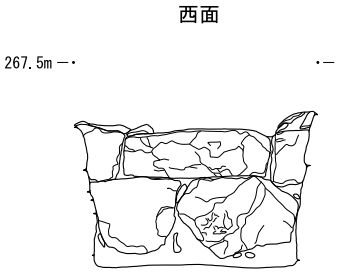


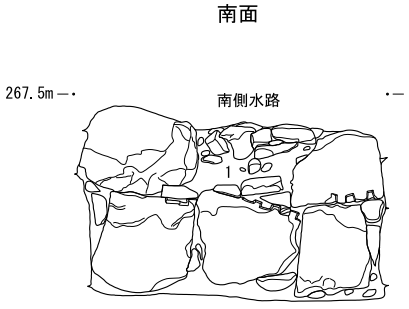


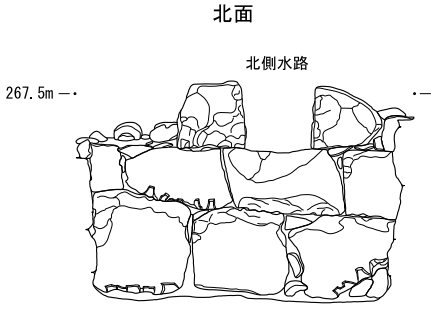
1　暗褐色(10YR3/3)の細粒砂
　しまりあり、粘性弱い
　上部に割石を多く含む
　φ30～100㎜程の礫を多く含む
　西側石垣の裏栗層
2　暗褐色(10YR3/4)のシルト
　しまり、粘性強い
3　暗褐色(10YR3/4)のシルト質細粒砂
　しまり、粘性あり
　2層よりも色調が濃い
4　暗褐色(10YR3/4)のシルト質細粒砂
　しまり、粘性あり
　3層よりもやや砂質で、しまりやや弱い
5　暗褐色(10YR3/3)のシルト質細粒砂
　しまり、粘性あり
　3層と4層の中間のようなしまり、粘性
6　暗褐色(10YR3/4)の細粒砂
　しまり、粘性弱い
　いわゆる砂層
7　暗褐色(10YR3/4)のシルト質細粒砂
　しまり強く、粘性あり
8　褐色(10YR4/4)の細粒砂
　しまり強く、粘性あり
　φ100㎜程の礫を含む
9　褐色(10YR4/4)の中粒砂
　しまり強く、粘性弱い
　φ50～100㎜程の礫を多く含む
　集水桝の底土か？

※2～8層が集水桝の覆土





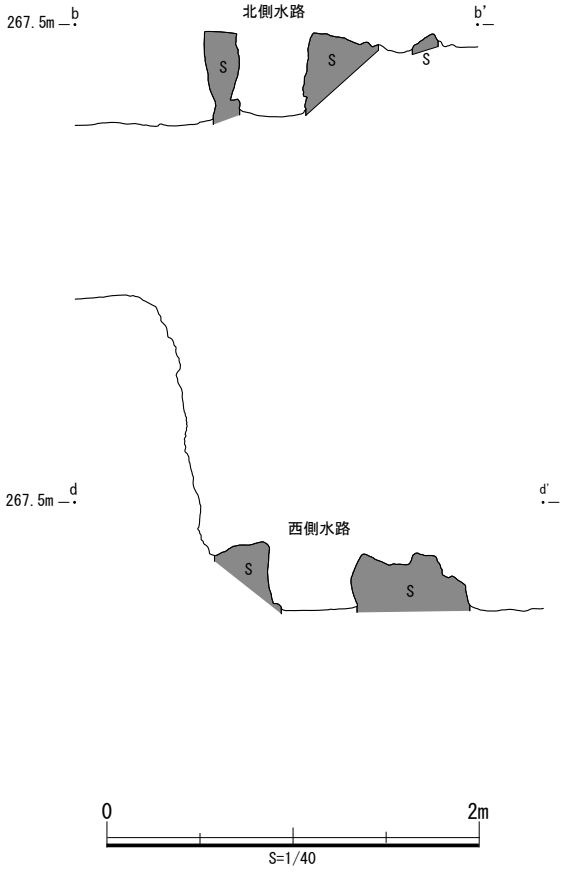




1　黒褐色の細粒砂
　しまり、粘性あり
　上層に割石を多く含む

0　2m
S=1/40

第 14 図　集水枡平面図・立面図・断面図



1　暗褐色の細粒砂
　しまり、粘性ややあり
　炭化物を含む
2　暗褐色の細粒砂
　しまり、粘性ややあり
　φ100㎜以下の礫を含む
　1層よりも、やや淡い色調
3　暗褐色のシルト質細粒砂
　しまり、粘性あり
　φ100㎜以下の礫を少量含む

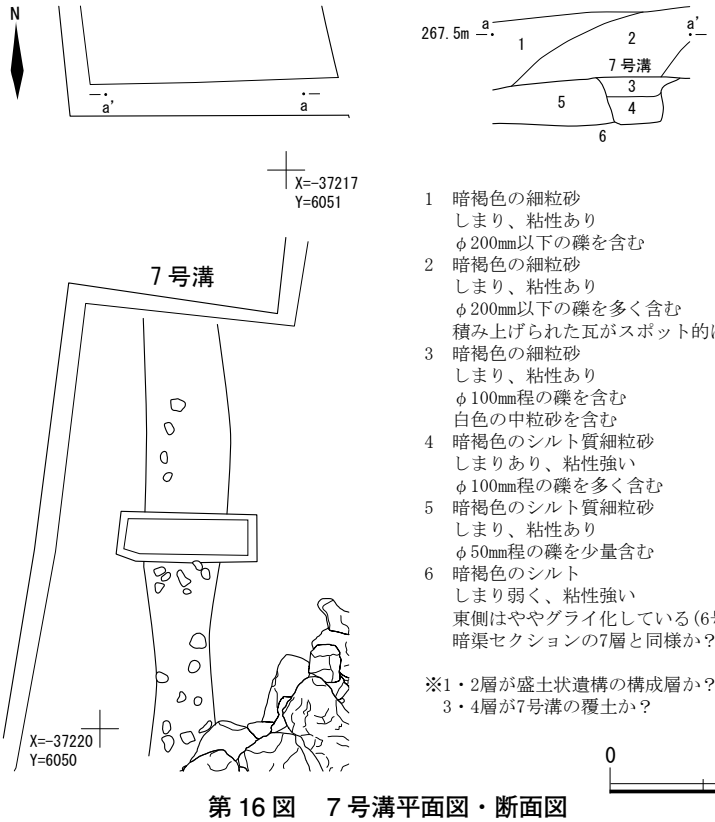
1　かく乱(砕石含む)
2　暗褐色の細粒砂
　しまりあり、粘性弱い
　φ100㎜程の礫を含む
3　暗褐色の細粒砂
　しまり、粘性あり
　φ100㎜程の礫を含む
　西側石垣の裏込の層か（第1面段階）？
4　暗褐色の細粒砂
　しまりややあり、粘性あり
5　黒褐色の細粒砂
　しまり、粘性あり
　φ200㎜を超える割石を多く含む
　φ100㎜以下の礫を多く含む
　西側石垣の裏込の層か（第2面段階）？

6　黒褐色の細粒砂
　しまり、粘性あり
　φ100㎜以下の礫を含む
　西側石垣の裏込の層か（第2面段階）？
7　黒褐色の細粒砂
　しまり、粘性あり
　φ50㎜以下の礫を少量含む

8　暗褐色のシルト質細粒砂
　しまりあり、粘性やや強い
9　黒褐色の細粒砂
　しまり、粘性あり
　φ100㎜以下の礫を多く含む
　中粒砂を含む
　西側水路の底土か？

※3・5・6層が西側石垣の裏込の層、8・9層が集水枡西側水路の覆土か？

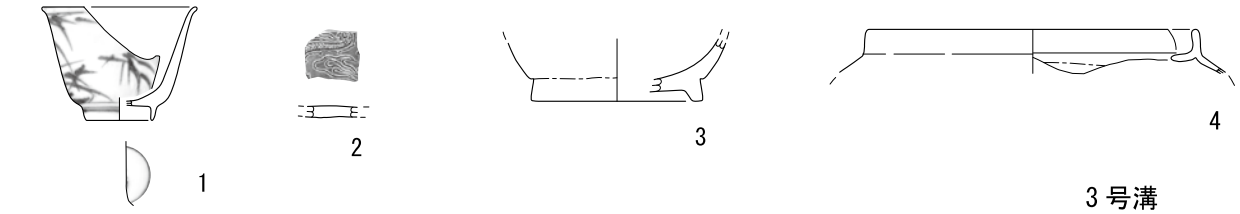
第 15 図　集水枡立面図・断面図



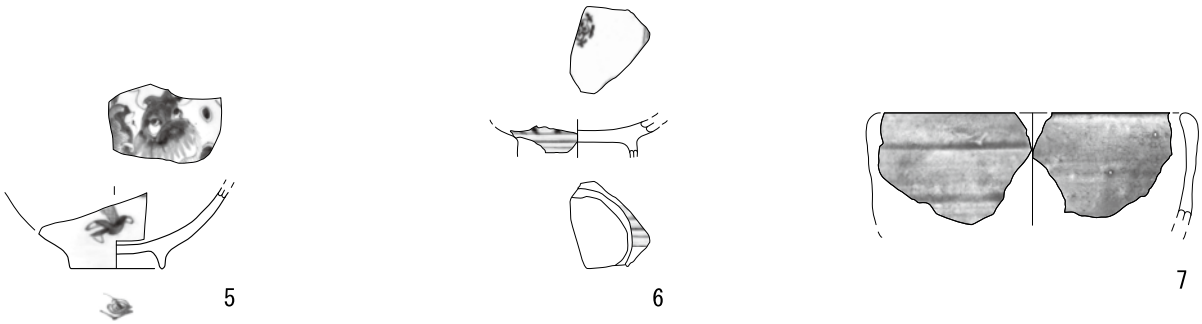
1　暗褐色の細粒砂
　しまり、粘性あり
　φ200㎜以下の礫を含む
2　暗褐色の細粒砂
　しまり、粘性あり
　φ200㎜以下の礫を多く含む
　積み上げられた瓦がスポット的に混入している
3　暗褐色の細粒砂
　しまり、粘性あり
　φ100㎜程の礫を含む
　白色の中粒砂を含む
4　暗褐色のシルト質細粒砂
　しまりあり、粘性強い
　φ100㎜程の礫を多く含む
5　暗褐色のシルト質細粒砂
　しまり、粘性あり
　φ50㎜程の礫を少量含む
6　暗褐色のシルト
　しまり弱く、粘性強い
　東側はややグライ化している(6号溝の影響か？)
　暗渠セクションの7層と同様か？

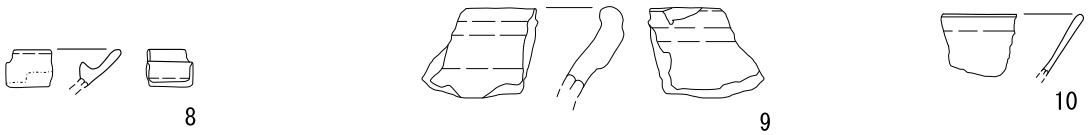
※1・2層が盛土状遺構の構成層か？
　3・4層が7号溝の覆土か？

第 16 図　7 号溝平面図・断面図



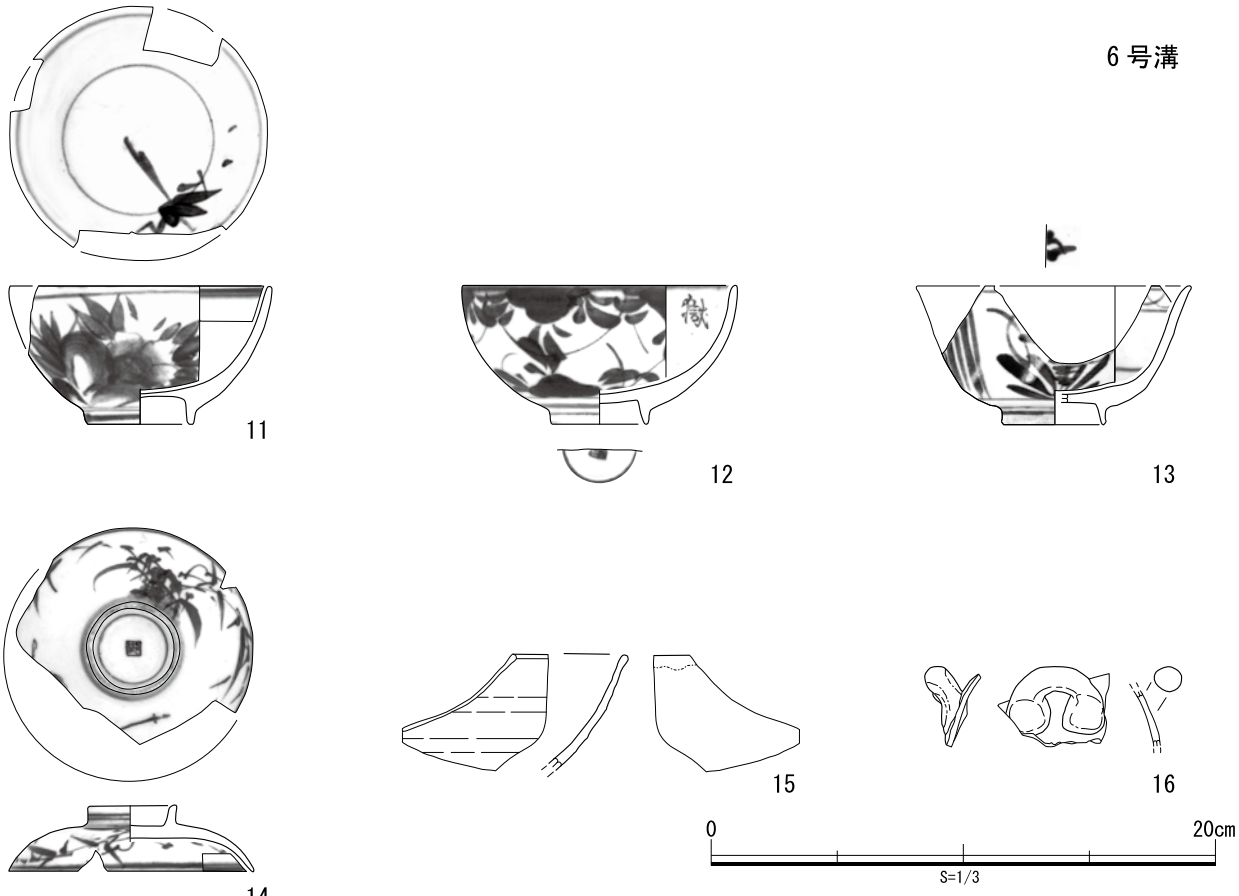
3 号溝



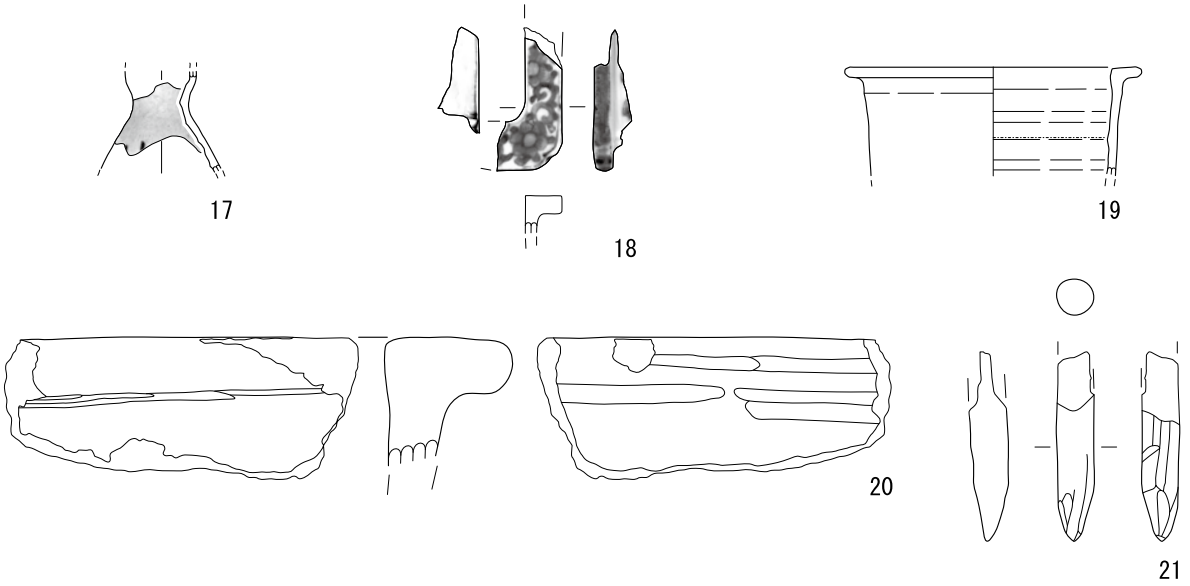


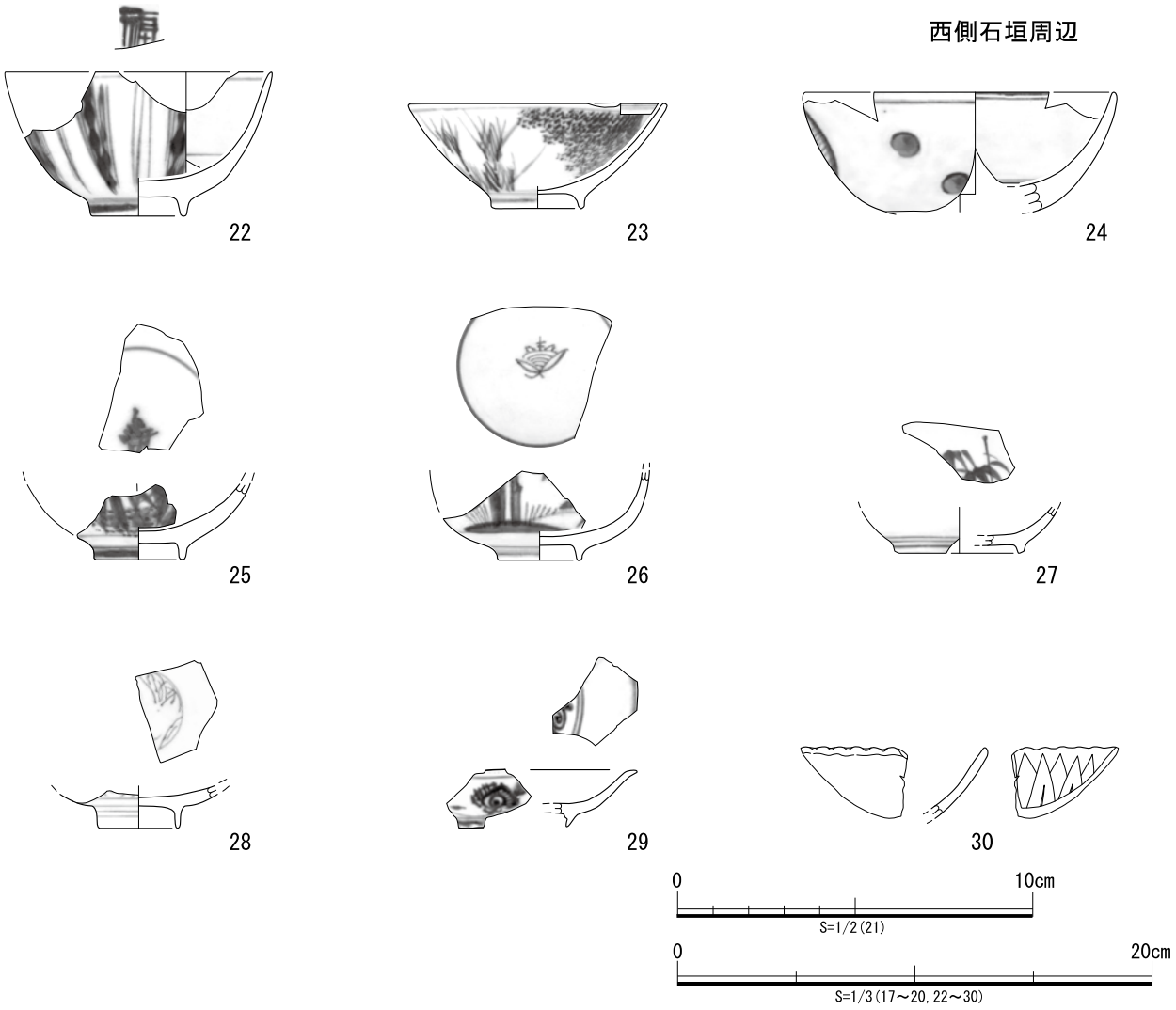
4 号溝

6 号溝

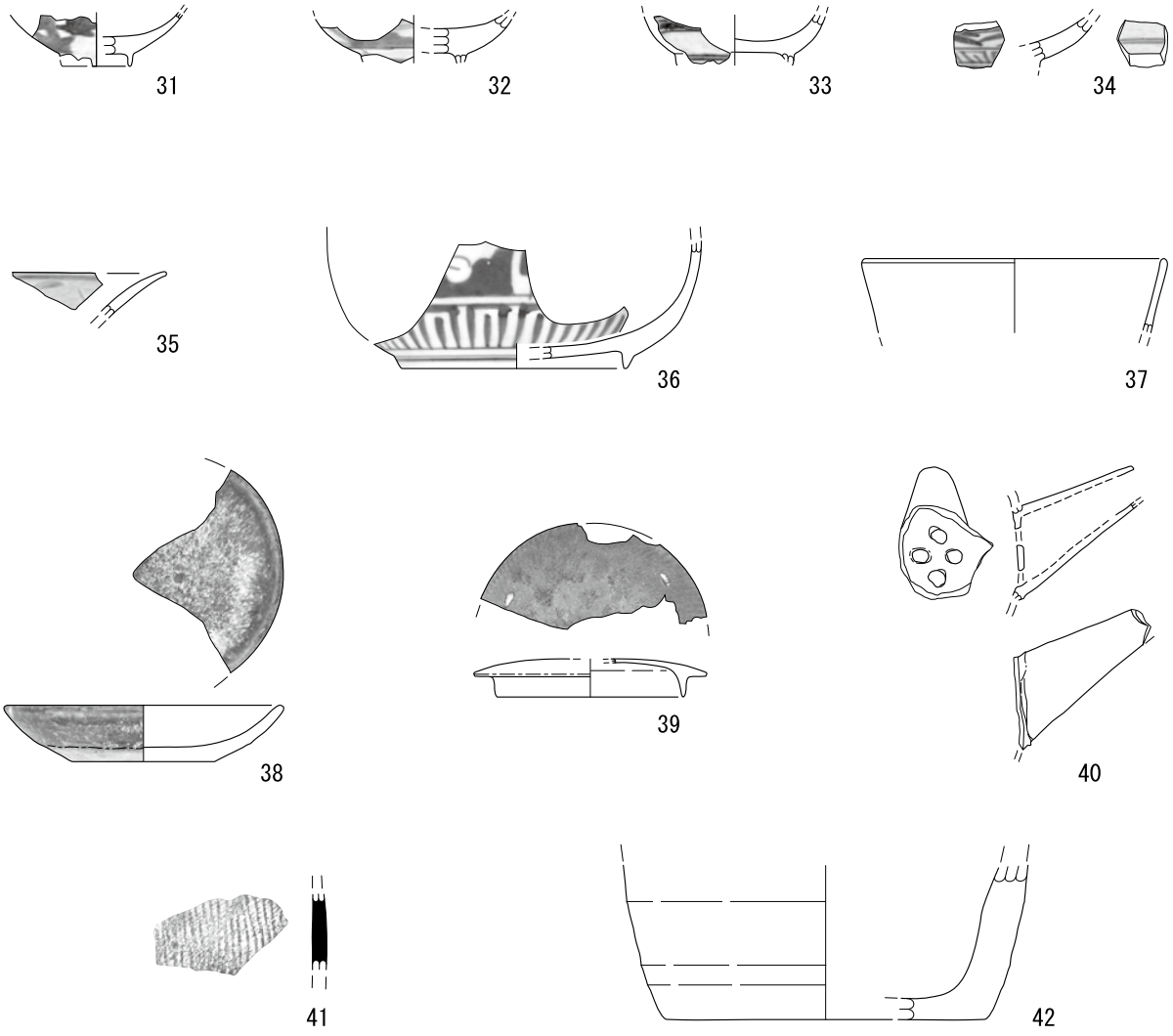


第 17 図　出土遺物（陶磁器・土器 1）（3 号・4 号・6 号溝）

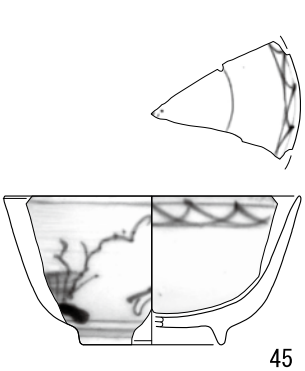




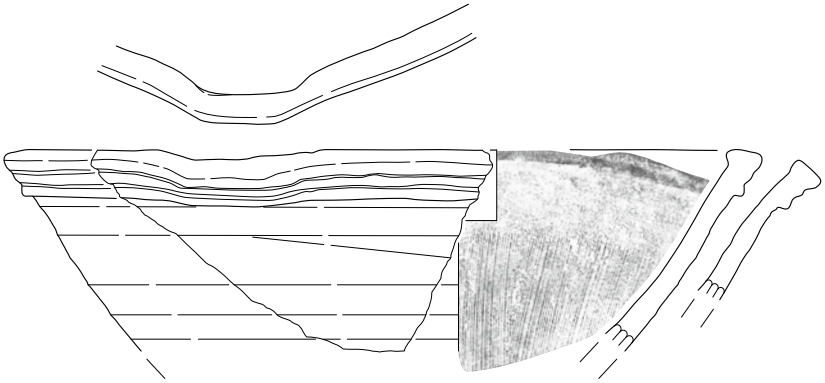
第 18 図　出土遺物（陶磁器・土器 2・石製品）（6 号溝・西側石垣周辺）



第 19 図　出土遺物（陶磁器・土器３）（西側石垣周辺・集水枡）

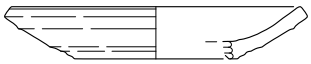


45



46

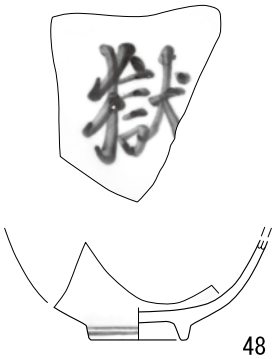
暗渠北側



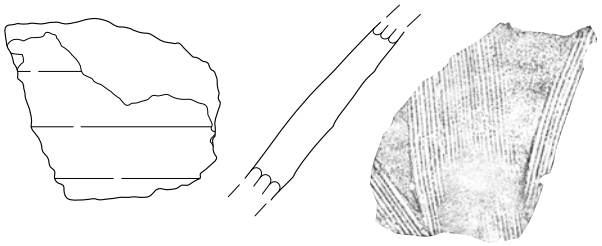
47

東側石垣周辺

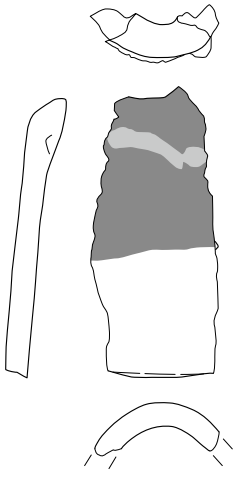
かく乱



48



49

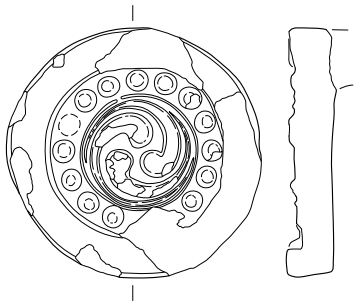


50

0 20cm

S=1/3

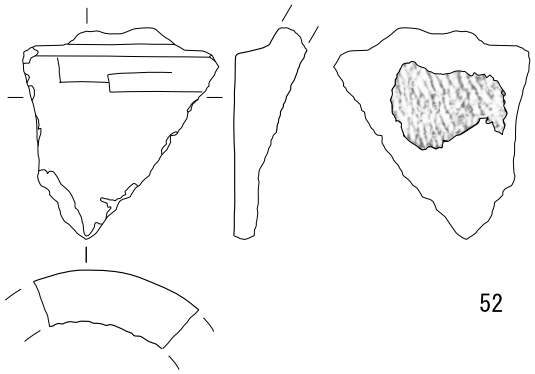
第 20 図　出土遺物（陶磁器・土器 4・羽口）（暗渠北側・東側石垣周辺・かく乱）



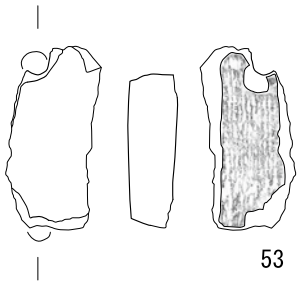
51

3 号溝

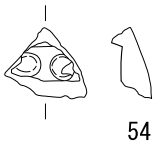
4 号溝



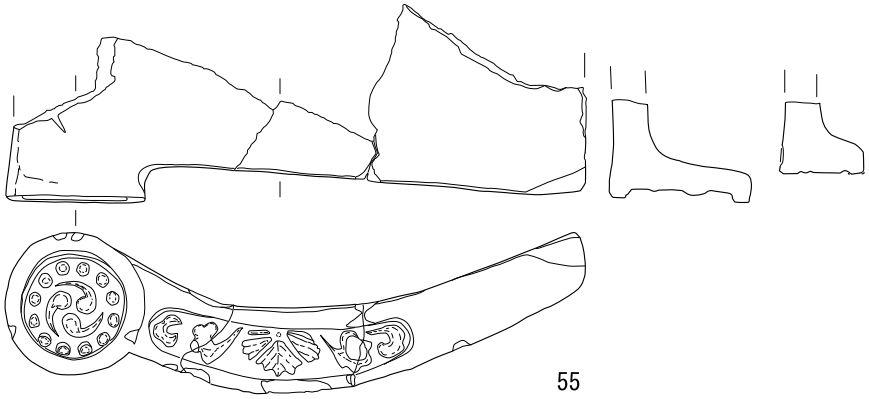
52



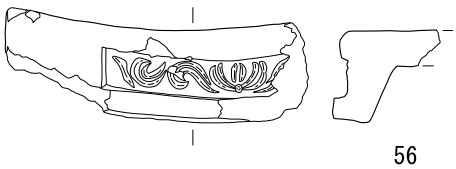
53



54

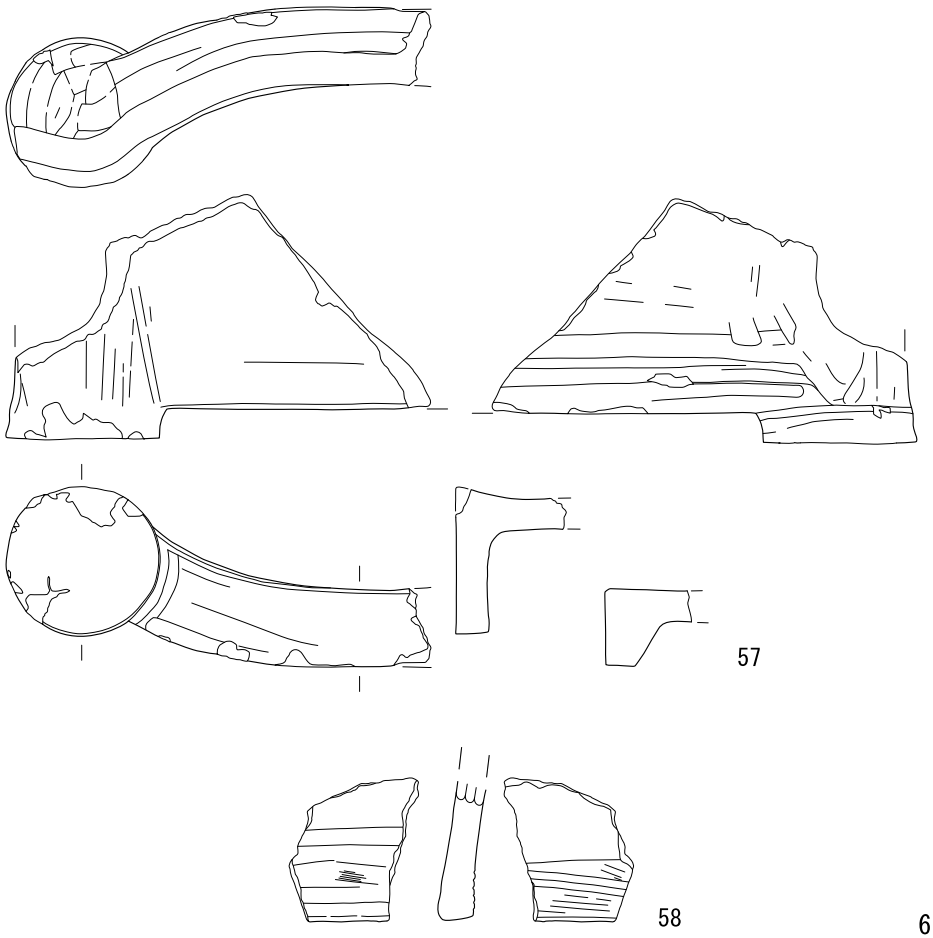


55

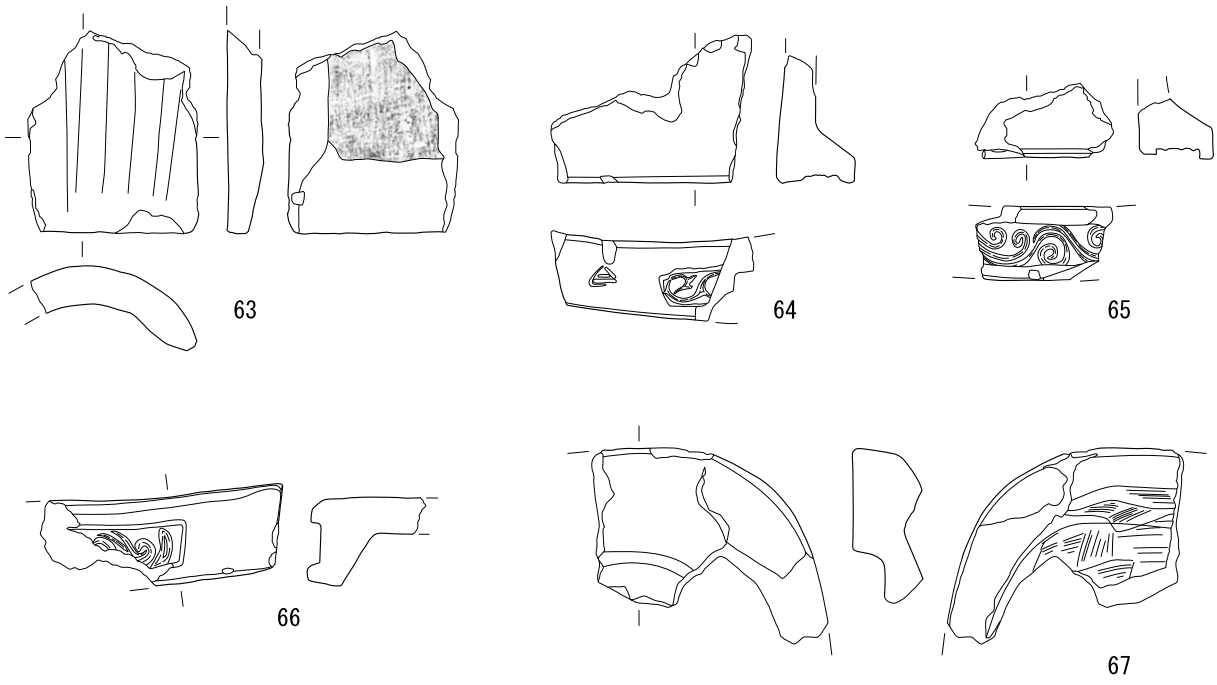


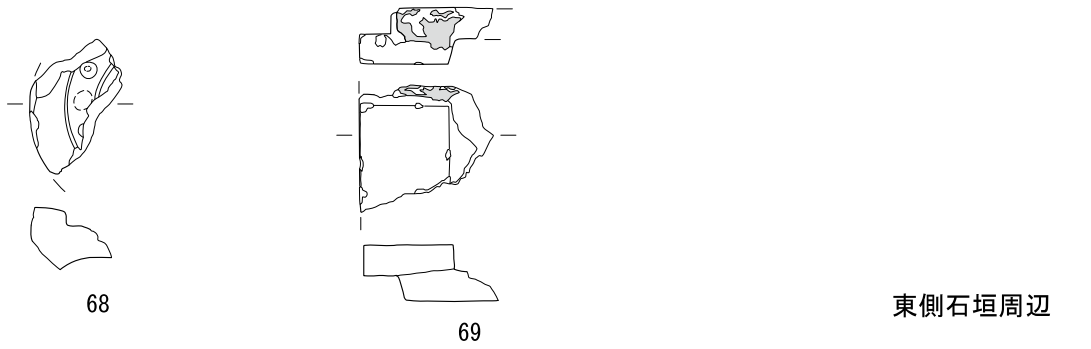
56

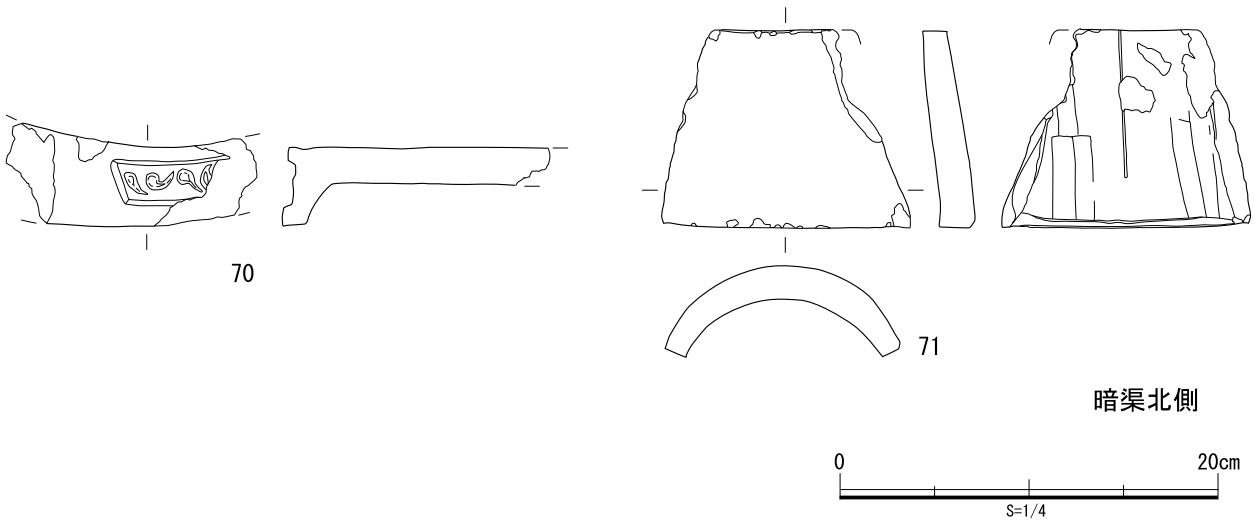
第 21 図　出土遺物（瓦 1）（3 号・4 号溝）



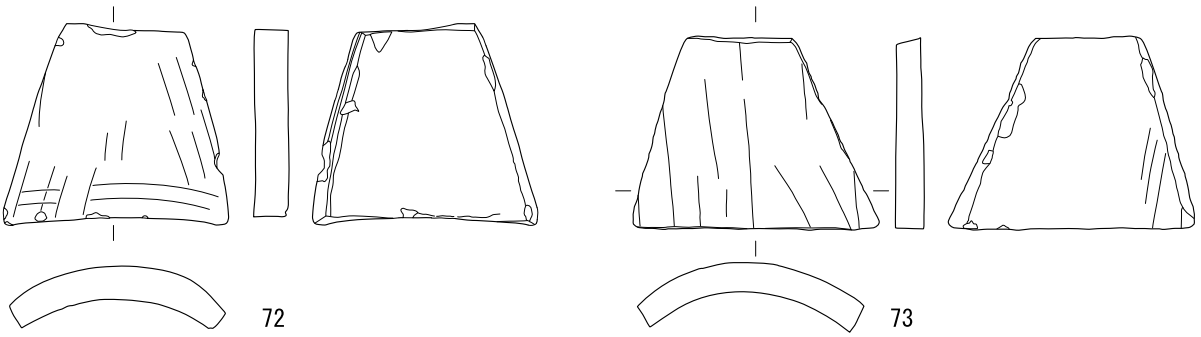
第 22 図　出土遺物（瓦 2）（6 号溝・西側石垣周辺）

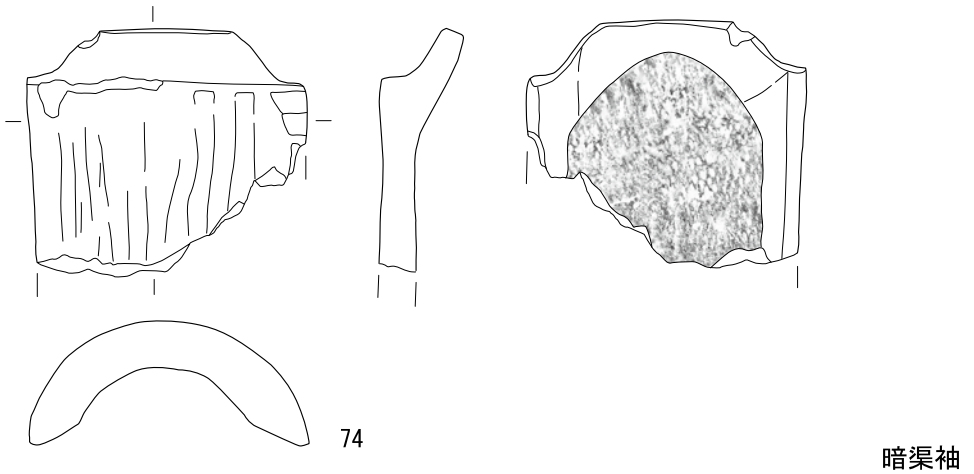


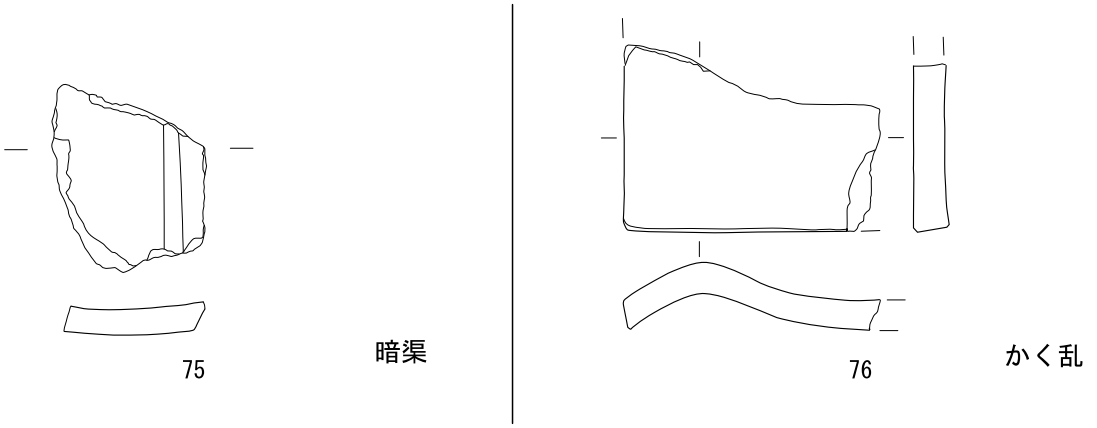


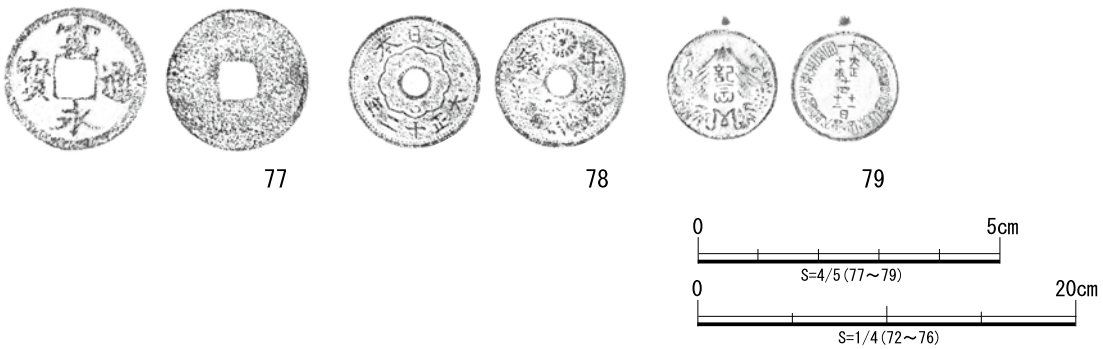


第 23 図　出土遺物（瓦 3）(西側石垣周辺・東側石垣周辺・暗渠北側)

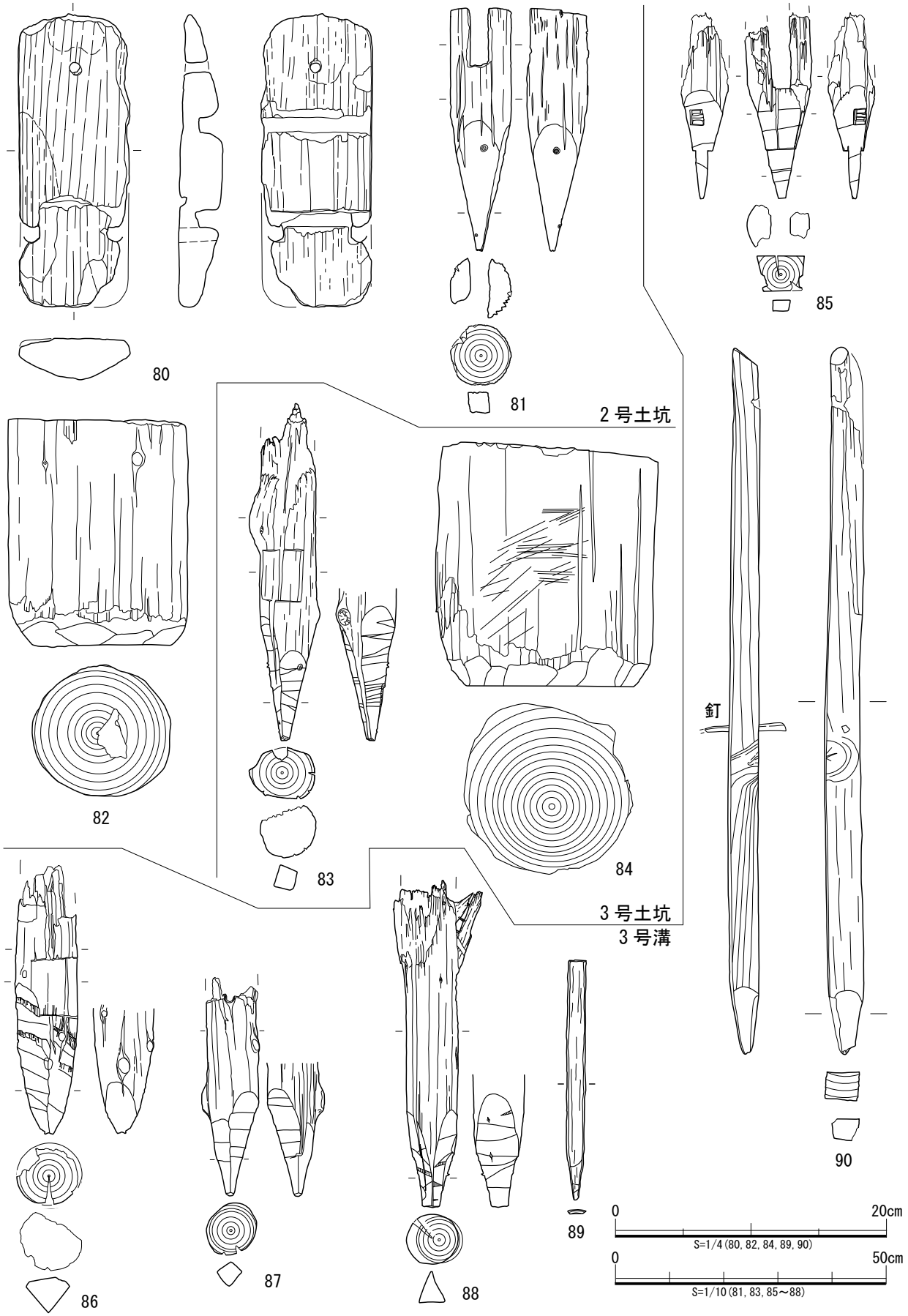




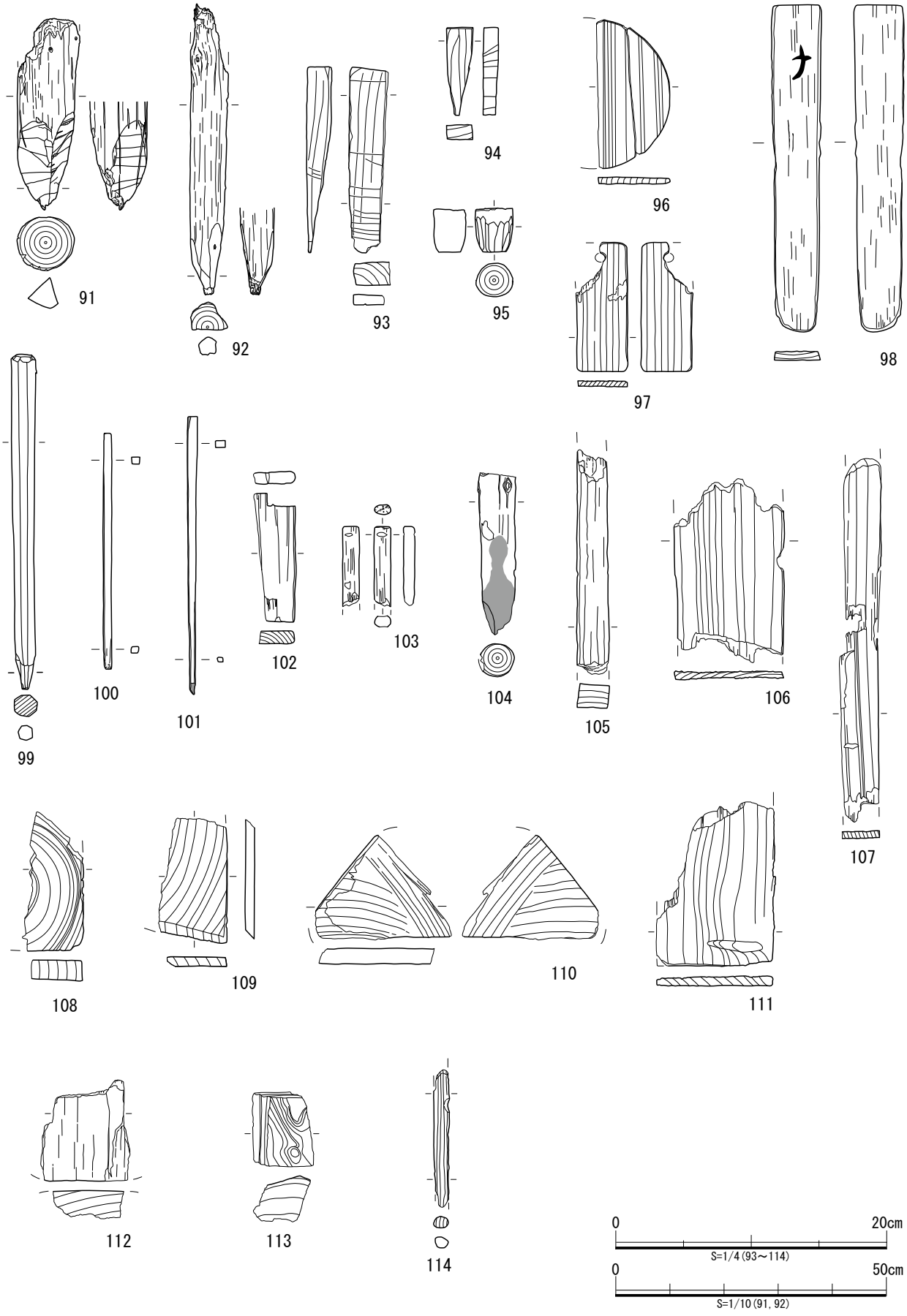




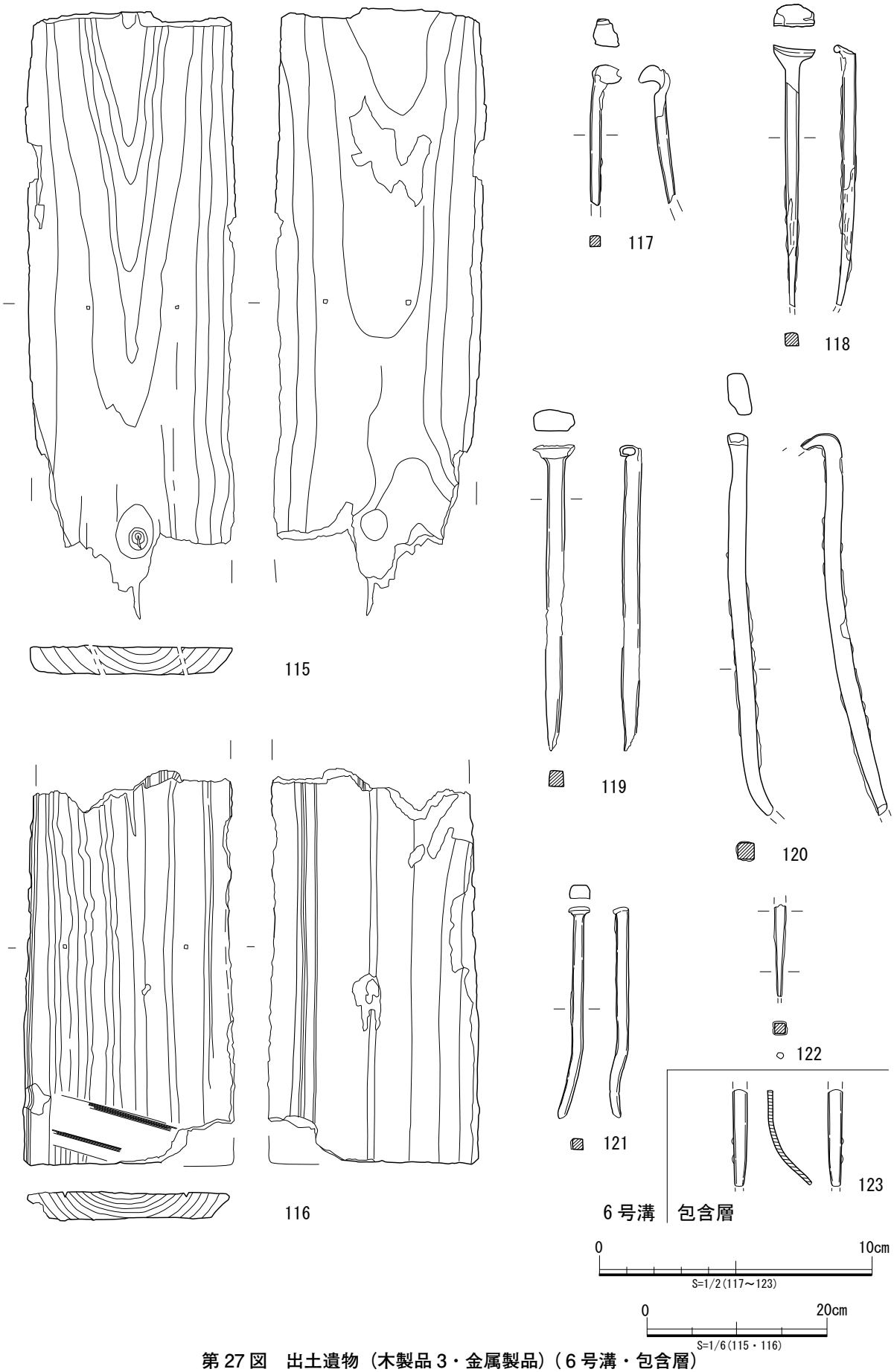
第 24 図　出土遺物（瓦 4・銭貨など）（暗渠北側・暗渠袖・暗渠・かく乱）



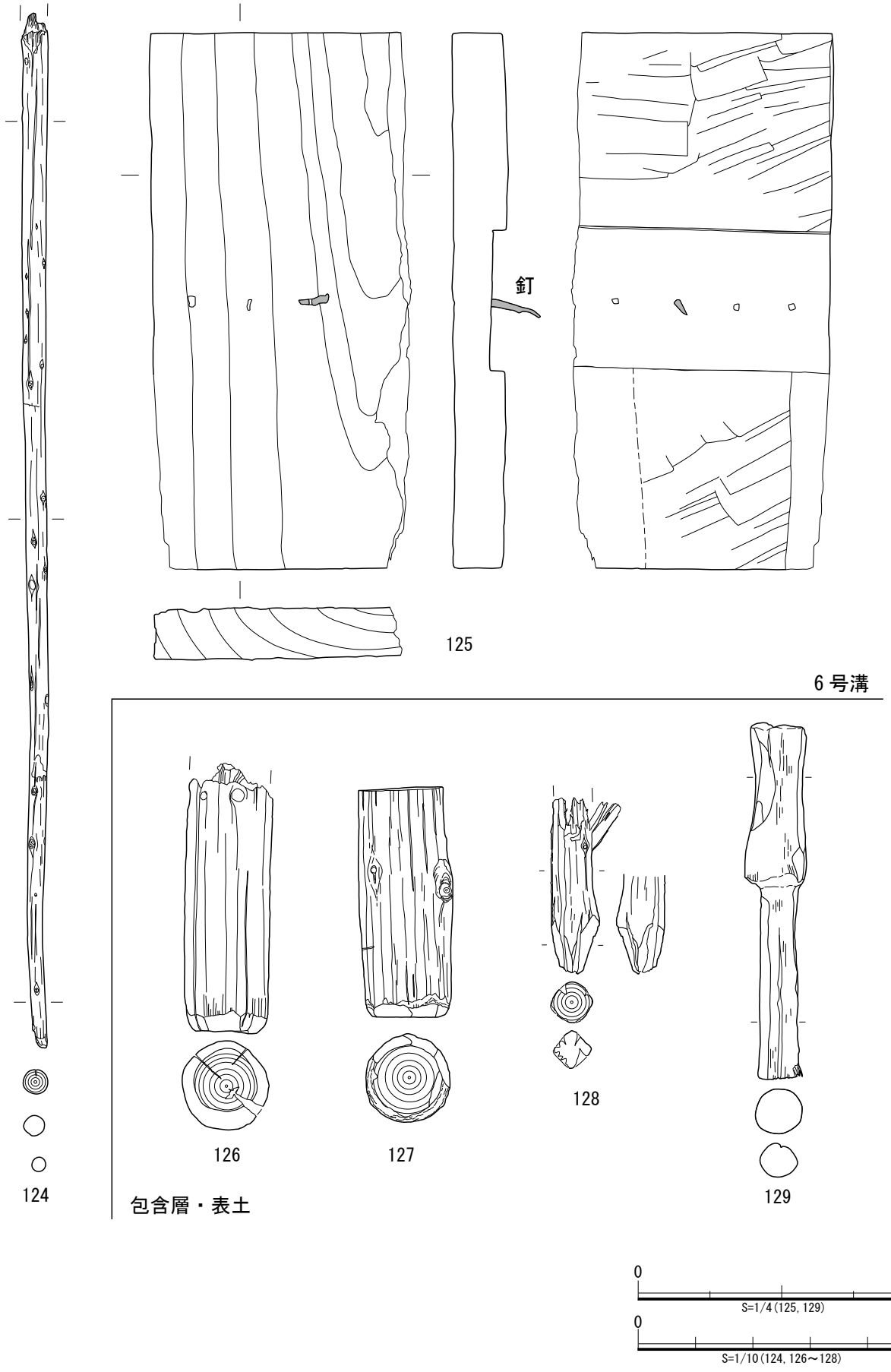
第 25 図　出土遺物（木製品 1）（2 号・3 号土杭・3 号溝）



第 26 図　出土遺物（木製品 2）（6 号溝）



第 27 図　出土遺物（木製品 3・金属製品）（6 号溝・包含層）



第 28 図　出土遺物（木製品 4）（6 号溝・包含層・表土）

第３表　陶磁器・土器観察表

報告番号	挿図番号	図版番号	遺物番号	出土遺構	種類	種別	器種	口径（cm）	底径（cm）	高さ（cm）	外面	内面	底面	胎土色調	胎土	焼成	残存率	産地	時代	備考
1	第 17 図	PL.4	一括	3 号溝	磁器	染付	猪口	（6.0）	（2.6）	4.5	透明釉、染付	透明釉	染付	白色	密	良好	30 %	瀬戸美濃	明治前半	
2	第 17 図	PL.4	一括	3 号溝	磁器		小判皿	－	－		緑釉	緑釉・陰刻（龍の絵）		乳白色	密	良好	5 %	珉平	19 世紀後葉	
3	第 17 図	PL.4	P4	3 号溝	陶器		碗	－	（6.8）	（2.5）	鉄釉	鉄釉、ロクロナデ		10YR8/2 灰白色	密	良好	10 %	瀬戸美濃	17 世紀末葉～ 18 世紀前葉	
4	第 17 図	PL.4	P2	3 号溝	陶器		土瓶	（13.0）	－	（1.8）	緑釉	鉄釉、ロクロナデ		10YR7/4 にぶい黄褐色	密	良好	5 %	在地窯か？	明治	
5	第 17 図	PL.5	P12	4 号溝	磁器	染付	碗	－	3.8	（3.2）	透明釉、染付	透明釉、染付	染付	白色	密	良好	40 %	肥前	19 世紀前葉	
6	第 17 図	PL.5	一括	4 号溝	磁器	染付	碗	－	－	（1.5）	透明釉、染付	透明釉、染付		白色	密	良好	10 %	肥前	18 世紀後葉～ 19 世紀初頭	
7	第 17 図	PL.5	一括	4 号溝	陶器		碗	（11.6）	－	（4.7）	黄褐色の釉	黄褐色の釉		10YR8/3 浅黄橙色	密	良好	5 %	瀬戸美濃	18 世紀前葉～中葉	
8	第 17 図	PL.5	一括	4 号溝	陶器		灯明皿	－	－	（1.5）	灰白色の釉	灰白色の釉		10YR8/2 灰白色	密	良好	5 %	瀬戸美濃	19 世紀（明治）	
9	第 17 図	PL.5	一括	4 号溝	陶器		鉢	－	－	（3.6）	鉄釉、ロクロナデ	鉄釉、ロクロナデ		5Y8/2 灰白色	密	良好	5 %	瀬戸美濃	18 世紀前葉	
10	第 17 図	PL.5	一括	4 号溝	土器		坏	（9.2）	－	（2.4）				7.5YR7/6 橙色	密	良好	5 %		古代か？	かわらけというよりは、古代の坏に見える
11	第 17 図	PL.5	一括	6 号溝	磁器	染付	碗	10.3	3.9	5.4	透明釉、染付	透明釉、染付		白色	密	良好	80 %	瀬戸美濃	明治前半	
12	第 17 図	PL.5	一括	6 号溝	磁器	染付	碗	（10.7）	（3.6）	5.5	透明釉、染付	透明釉、染付、黒色で「獄」	染付	白色	密	良好	45 %	瀬戸美濃	明治前半	
13	第 17 図	PL.5	一括	6 号溝	磁器	染付	碗	（10.6）	（3.9）	5.6	透明釉、染付	透明釉、染付		白色	密	良好	40 %	瀬戸美濃	明治前半	
14	第 17 図	PL.5	一括	6 号溝	磁器		碗（蓋）	（9.7）	3.1	2.6	透明釉、染付	透明釉、染付	染付	白色	密	良好	80 %	瀬戸美濃	明治前半	
15	第 17 図	PL.5	一括	6 号溝	陶器		鉢	－	－	（3.7）	緑釉	緑灰色の釉、緑釉		10YR8/2 灰白色	密	良好	10 %	肥前	17 世紀後葉～ 18 世紀初頭	
16	第 17 図	PL.5	一括	6 号溝	陶器		鍋			（3.2）	緑釉	鉄釉、ロクロナデ		2.5Y3/2 黒褐色	密	良好	5 %	在地窯か？	明治	
17	第 18 図	PL.5	一括	6 号溝	陶器		銚子	－	－	（4.0）	透明釉、鉄釉による絵か？	無釉、ロクロナデ		10YR8/1 灰白色	密	良好	10 %	京都信楽	19 世紀後葉	
18	第 18 図	PL.5	一括	6 号溝（Ａトレンチ）	磁器	染付	植木鉢	－	－	（1.5）	透明釉、染付	透明釉、染付		白色	密	良好	5 %	瀬戸美濃	19 世紀中葉	
19	第 18 図	PL.5	一括	6 号溝	陶器		植木鉢	（11.8）	－	（4.4）	灰色の釉	灰色の釉、ロクロナデ		10YR7/4 にぶい黄褐色	密	良好	5 %	不明	明治以降	
20	第 18 図	PL.5	一括	6 号溝	陶器		鉢	－	－	（5.1）	無釉、ロクロナデ	無釉、ロクロナデ		5YR5/4 にぶい赤褐色	やや密	やや不良	5 %	不明	不明	
22	第 18 図	PL.7	一括	西側石垣周辺	磁器	染付	碗	（11.0）	4.0	6.0	透明釉、染付	透明釉、染付		白色	密	良好	50 %	瀬戸美濃	明治前半	
23	第 18 図	PL.7	一括	西側石垣周辺	磁器	染付	碗	（10.7）	3.5	4.3	透明釉、染付	透明釉、染付		白色	密	良好	50 %	瀬戸美濃	明治前半	
24	第 18 図	PL.7	一括	西側石垣周辺	磁器		碗	（13.0）	－	（5.1）	透明釉、鉄釉	透明釉、鉄釉・青色の釉による絵		2.5Y8/1 灰白色	密	良好	20 %	肥前	19 世紀前半	
25	第 18 図	PL.7	一括	西側石垣周辺	磁器	染付	碗	（9.4）	3.8	（3.2）	透明釉、染付	透明釉、染付		白色	密	良好	20 %	瀬戸美濃	明治前半	
26	第 18 図	PL.7	一括	西側石垣周辺	磁器	染付	碗	－	3.4	（4.0）	透明釉、染付	透明釉		白色	密	良好	30 %	肥前	18 世紀後葉	
27	第 18 図	PL.7	一括	西側石垣周辺	磁器	染付	碗	－	（5.0）	（1.9）	透明釉、染付	透明釉、染付		白色	密	良好	5 %	瀬戸美濃	明治前半	
28	第 18 図	PL.7	一括	西側石垣周辺	磁器	染付	碗	－	（3.2）	（1.8）	透明釉、染付	透明釉、染付		白色	密	良好	10 %	肥前	19 世紀中葉	
29	第 18 図	PL.7	一括	西側石垣周辺	磁器	染付	皿	－	－	（2.4）	透明釉、染付	透明釉、染付		白色	密	良好	5 %	不明	不明	
30	第 18 図	PL.7	一括	西側石垣周辺	磁器	染付	皿	－	－	（2.4）	透明釉、釉の濃淡で絵	透明釉		白色	密	良好	5 %	瀬戸美濃	大正～戦前	
31	第 19 図	PL.7	一括	西側石垣周辺	磁器	染付	碗	－	（2.9）	（2.2）	透明釉、染付	透明釉		白色	密	良好	5 %	肥前	18 世紀後葉	
32	第 19 図	PL.7	一括	西側石垣周辺	磁器	染付	碗	－	－	（1.9）	透明釉、染付	透明釉		白色	密	良好	5 %	肥前	18 世紀中葉～後葉	
33	第 19 図	PL.7	一括	西側石垣周辺	磁器	染付	碗	－	－	（2.0）	透明釉、染付	透明釉		白色	密	良好	5 %	肥前	18 世紀	被熱有り
34	第 19 図	PL.7	一括	西側石垣周辺	磁器	染付	碗	－	－	（2.0）	透明釉、染付	透明釉、染付		白色	密	良好	5 %	肥前	18 世紀後半	
35	第 19 図	PL.7	一括	西側石垣周辺	磁器	染付	皿	－	－	（1.8）	透明釉	透明釉、染付		白色	密	良好	5 %	肥前	17 世紀末～ 18 世紀前葉	
36	第 19 図	PL.7	一括	西側石垣周辺	磁器	染付	鉢	－	（9.2）	（5.2）	透明釉、染付	透明釉		白色	密	良好	10 %	肥前	18 世紀後葉	蓋が付く器種
37	第 19 図	PL.7	一括	西側石垣周辺	陶器		碗	（12.4）	－	（3.1）	透明釉	透明釉		2.5Y8/2 灰白色	密	良好	5 %	京都信楽	18 世紀中葉～後葉	
38	第 19 図	PL.7	一括	西側石垣周辺	陶器		灯明皿	（11.2）	（6.0）	2.3	黄褐色の釉、ロクロナデ	黄褐色の釉	回転糸切り痕	2.5Y8/2 灰白色	密	良好	30 %	瀬戸美濃	18 世紀前葉	
39	第 19 図	PL.7	一括	西側石垣周辺	陶器		急須（蓋）	－	（7.4）	（1.7）	鉄釉	無釉、ロクロナデ		2.5Y7/4 浅黄色	密	良好	30 %	在地窯か？	明治	
40	第 19 図	PL.7	一括	西側石垣周辺	陶器		急須	－	－	（5.3）	鉄釉	鉄釉		5YR7/4 にぶい橙色	密	良好	5 %	在地窯か？	明治	
41	第 19 図	PL.7	一括	西側石垣周辺	須恵器		甕	－	－	（3.1）	タタキ			N5/　灰色	密	良好	5 %	不明	不明	
42	第 19 図	PL.7	一括	西側石垣周辺	陶器		鉢	－	（12.8）	（6.3）	無釉、ロクロナデ	無釉	回転糸切り痕		やや密	やや不良	10 %	不明	不明	
43	第 19 図	PL.8	一括	集水枡	陶器		土瓶（蓋）	2.3	10.1	2.2	緑釉	無釉		2.5Y7/3 浅黄色	密	密	完形	在地窯か？	明治	
44	第 19 図	PL.8	一括	集水枡	陶器		土瓶（蓋）	2.3	10.6	2.1	緑釉	無釉		2.5Y7/3 浅黄色	密	密	70 %	在地窯か？	明治	
45	第 20 図	PL.8	一括	暗渠北側	磁器	染付	碗	（11.8）	（5.5）	5.9	透明釉、染付	透明釉、染付		白色	密	良好	20 %	瀬戸美濃	19 世紀中葉	
46	第 20 図	PL.8	一括	暗渠北側	陶器		擂鉢	（30.0）	－	（8.0）	緑釉	緑釉、スリ目		5Y4/3 オリーブ（釉薬）	密	良好	5 %	在地窯か？	近代	スリ目が金属工具で施される
47	第 20 図	PL.5	P17	包含層	陶器		皿	（12.0）	（6.2）	2.1	無釉、ロクロナデ	無釉		7.5YR5/6 明褐色	密	良好	5 %	瀬戸美濃	17 世紀後葉	
48	第 20 図	PL.8		かく乱	磁器		碗	－	3.5	（3.9）	透明釉、染付	透明釉、染付で「獄」		白色	密	良好	30 %	瀬戸美濃	近代（明治）	
49	第 20 図	PL.8		かく乱	陶器		擂鉢	－	－	（7.0）	鉄釉、ロクロナデ	鉄釉、スリ目		7.5YR8/3 浅黄橙色	やや密	良好	5 %	瀬戸美濃	17 世紀以前	

報告番号	挿図番号	図版番号	遺物番号	出土遺構	器種	長さ（cm）	外径（cm）	内径（cm）				胎土　色調	胎土	残存率			備考
50	第 20 図	PL.8		かく乱	羽口	11.6	－	－				5YR7/4 にぶい橙色	白色粒子、金雲母	40 %			

第４表　瓦観察表

報告番号	挿図番号	図版番号	遺物番号	遺構名	種類	法量（cm）			文様・装飾	備考
						長さ	幅	厚さ		
51	第 21 図	PL.4	KW1	3 号溝	軒丸瓦	（2.6）	13.5	2.7	左巴	
52	第 21 図	PL.5	一括	4 号溝	丸瓦	（11.1）	（10.4）	3.8		
53	第 21 図	PL.5	一括	4 号溝	丸瓦	（9.7）	（5.0）	2.6		釘孔
54	第 21 図	PL.5	KW3	4 号溝	軒丸瓦	（4.3）	（3.8）	（2.1）		
55	第 21 図	PL.5	一括	4 号溝	軒桟瓦	（10.4）	30.5	1.8	左巴	押しずれ
56	第 21 図	PL.5	一括	4 号溝	軒桟瓦	（5.7）	（16.0）	1.9	上向き五葉	
57	第 22 図	PL.5	一括	6 号溝	軒桟瓦	（12.9）	（22.5）	1.6		
58	第 22 図	PL.5	一括	6 号溝	？	（7.4）	（5.6）	1.9		
59	第 22 図	PL.7	一括	西側石垣周辺	軒丸瓦	（16.8）	（13.2）	1.9	左巴	
60	第 22 図	PL.7	一括	西側石垣周辺	軒丸瓦	（5.0）	（11.7）	2.3	左巴	
61	第 22 図	PL.7	一括	西側石垣周辺	軒丸瓦	－	（7.5）	2.0	左巴	
62	第 22 図	PL.7	一括	西側石垣周辺	軒丸瓦	－	（6.2）	3.5		
63	第 23 図	PL.7	一括	西側石垣周辺	丸瓦	（10.6）	（9.1）	2.0		コビキ痕・布目
64	第 23 図	PL.7	一括	西側石垣周辺	軒平瓦	（7.8）	（10.6）	1.8		刻印
65	第 23 図	PL.7	一括	西側石垣周辺	軒平瓦	（3.0）	（7.3）	－		
66	第 23 図	PL.7	一括	西側石垣周辺	軒平瓦	（6.3）	（12.8）	1.9		上向き五葉
67	第 23 図	PL.7	一括	西側石垣周辺	鬼瓦？	（10.3）	（12.5）	3.7		
68	第 23 図	PL.5	一括	東側石垣前 4・5 層	軒丸瓦	－	（4.9）	－		
69	第 23 図	PL.5	一括	東側石垣前 4・5 層	角桟切り落とし板塀瓦	（6.3）	（7.1）	3.0		
70	第 23 図	PL.7	一括	暗渠北側	軒桟瓦	（14.2）	（13.3）	1.9		
71	第 23 図	PL.8	一括	暗渠北側	輪ちがい	10.5	13.2	1.9		
72	第 24 図	PL.8	一括	暗渠北側	輪ちがい	10.6	11.9	1.9		
73	第 24 図	PL.8	一括	暗渠北側	輪ちがい	10.2	13.0	1.5		
74	第 24 図	PL.8		暗渠袖	丸瓦	（13.1）	15.0	1.9		キラ粉・袖石に噛ませていた
75	第 24 図	PL.8	一括	暗渠	平瓦	（9.6）	（8.2）	1.4		
76	第 24 図	PL.8	一括	撹乱	桟瓦	（9.9）	（13.6）	1.9		

第５表　木製品観察表

報告番号	挿図番号	図版番号	遺物番号	遺構名	種類	法量（cm）			木取り	その他
						長さ	幅	厚さ		
80	第 25 図	PL.4	W22	2 号土坑	差歯下駄	21.6	8.2	3.1		一部焦げている・女性用か？
81	第 25 図	PL.4	W15	2 号土坑	杭	44.8	11.2	11.1	芯持ち丸木	ホゾ穴あり、建築部材を転用したものか？
82	第 25 図	PL.4	W16	2 号土坑	丸太状木製品	16.5	13.3	13.3	芯持ち丸木	柱材を切断したものか？
83	第 25 図	PL.4	W12	3 号土坑	杭	（62.1）	11.2	9.6	芯持ち丸木	ホゾ穴あり、建築部材を転用したものか？
84	第 25 図	PL.4	W13	3 号土坑	丸太状木製品	17.9	16.4	16.4	芯持ち丸木	柱材を切断したものか？
85	第 25 図	PL.4	一括	3 号溝	杭	（34.3）	（12.0）	8.5	芯持ち丸木	ホゾ穴あり、建築部材を転用したものか？
86	第 25 図	PL.4	W10	3 号溝	杭	（49.5）	11.3	（10.6）	芯持ち丸木	ホゾ穴あり、建築部材を転用したものか？
87	第 25 図	PL.4	W3	3 号溝	杭	（40.3）	10.5	9.5	芯持ち丸木	
88	第 25 図	PL.4	W25	3 号溝	杭	（60.2）	9.5	9.2	芯持ち丸木	
89	第 25 図	PL.4	W17	3 号溝	ヘラ状木製品	17.6	1.5	0.3		
90	第 25 図	PL.4	W11	3 号溝	杭	52.1	2.7	2.2		和釘あり
91	第 26 図	PL.6	一括	6 号溝（Aトレンチ）	杭	（35.4）	10.6	9.9	芯持ち丸木	
92	第 26 図	PL.6	一括	6 号溝（Aトレンチ）	杭	（53.6）	6.9	5.1	芯持ち丸木	
93	第 26 図	PL.6	一括	6 号溝（シルト層下層）	楔	13.6	3.0	1.7		
94	第 26 図	PL.6	一括	6 号溝（Aトレンチ）	楔？	6.5	2.0	1.1		
95	第 26 図	PL.6	一括	6 号溝（シルト層下層）	栓？	3.2	2.8	2.4	芯持ち丸木	
96	第 26 図	PL.6	一括	6 号溝（シルト層下層）	曲物底板	（10.9）	（5.3）	0.5		
97	第 26 図	PL.6	一括	6 号溝	札？	9.5	3.8	0.4		
98	第 26 図	PL.6	一括	6 号溝	板状木製品	24.2	3.7	0.6		墨書か？
99	第 26 図	PL.6	一括	6 号溝	鉛筆状木製品	24.5	1.8	1.6		
100	第 26 図	PL.6	一括	6 号溝	箸	17.5	0.6	0.6		
101	第 26 図	PL.6	一括	6 号溝	箸	20.6	0.7	0.5		両端が焦げている
102	第 26 図	PL.6	一括	6 号溝	板状木製品	（9.4）	（3.2）	0.9		楔のような平面形
103	第 26 図	PL.6	一括	6 号溝	棒状木製品	（5.9）	1.2	0.8		表裏両面の上部に凹みを作っている
104	第 26 図	PL.6	一括	6 号溝	棒状木製品	11.8	2.8	2.8	芯持ち丸木	先端が焦げている
105	第 26 図	PL.6	一括	6 号溝	加工木片	（16.6）	2.4	1.8		
106	第 26 図	PL.6	一括	6 号溝	加工木片	（13.6）	8.1	0.7		
107	第 26 図	PL.6	一括	6 号溝	板状木製品	（26.7）	2.8	0.5		
108	第 26 図	PL.6	一括	6 号溝	加工木片	（10.2）	（4.5）	1.5		
109	第 26 図	PL.6	一括	6 号溝	加工木片	（9.2）	（5.0）	0.6		
110	第 26 図	PL.6	一括	6 号溝	加工木片	（7.7）	（9.8）	1.2		
111	第 26 図	PL.6	一括	6 号溝（シルト層下層）	加工木片	（12.1）	8.5	0.8		
112	第 26 図	PL.6	一括	6 号溝	加工木片	（7.5）	（6.6）	（2.1）		
113	第 26 図	PL.6	一括	6 号溝	加工木片	（5.5）	（4.6）	（3.3）		
114	第 26 図	PL.6	一括	6 号溝	加工木片	（10.1）	（1.1）	0.8		
115	第 27 図	PL.7	W28	6 号溝	板材	（66.5）	23.1	3.2		土留め用の板、116 と同一個体か？
116	第 27 図	PL.7	W28	6 号溝	板材	（43.0）	22.9	3.1		土留め用の板、115 と同一個体か？
124	第 28 図	PL.6	W26	6 号溝	棒状木製品	（179.7）	4.3	4.2		巨石の下に入っており、折断して回収したため、全長は不明
125	第 28 図	PL.6	一括	6 号溝	板状木製品	37.3	18.3	3.9		和釘あり、複数の穴が確認でき、直線状に連続して釘を打っていた
126	第 28 図	PL.8	W19	包含層	丸太状木製品	（47.0）	15.0	15.0	芯持ち丸木	柱材か？
127	第 28 図	PL.8	W18	包含層	丸太状木製品	40.0	16.3	16.3	芯持ち丸木	柱材を切断したものか？
128	第 28 図	PL.8	W7	包含層	杭	（30.8）	8.5	7.0	芯持ち丸木	
129	第 28 図	PL.8		表土	横槌	24.8	4.3	3.1		

第６表　金属製品観察表

報告番号	挿図番号	図版番号	遺物番号	遺構名	材質	種類	法量（cm）			備考
							長さ	幅	厚さ	
117	第 27 図	PL.5	一括	6 号溝	鉄	和釘	（5.1）	（1.0）	0.4	
118	第 27 図	PL.5	一括	6 号溝	鉄	和釘	（9.6）	1.5	0.5	
119	第 27 図	PL.5	一括	6 号溝	鉄	和釘	11.2	0.7	0.6	
120	第 27 図	PL.5	一括	6 号溝	鉄	和釘	（14.0）	0.6	0.6	
121	第 27 図	PL.5	一括	6 号溝	鉄	和釘	7.7	0.4	0.4	
122	第 27 図	PL.5	一括	6 号溝	鉄	和釘？	（3.4）	0.5	0.3	
123	第 27 図	PL.5	M－1	包含層	青銅	不明	（3.1）	0.5	0.2	

第７表　銭貨等観察表

報告番号	挿図番号	図版番号	遺物番号	遺構名	種類	鋳造年	直径（cm）	備考
77	第 24 図	PL.8	一括	6 号溝（Bトレンチ）	銭貨		2.3	寛永通宝
78	第 24 図	PL.8		かく乱	銭貨	大正十二年	2.2	十銭
79	第 24 図	PL.8		かく乱	記念メダル	大正十年十月十一十二日	1.8	山梨縣醫師會主催第十一回 関東東北醫師大會

第８表　石製品観察表

報告番号	挿図番号	図版番号	遺物番号	遺構名	石質	種類	法量（cm）			重量（g）	備考
							長さ	幅	高さ		
21	第 18 図	PL.5	一括	6 号溝	結晶片岩	石墨？	（5.0）	1.0	1.0	6	

第９表　遺構一覧表

名称	挿図番号	図版番号	位置	時代	長さ（m）	幅（m）	深さ（m）	出土遺物	備考
暗渠	第 13 図	PL.3	2－2 区	江戸時代か？	（6.7）	0.3	0.3	45、46、 70 ～ 75	石組の水路（安山岩） 北東側は開渠か？
集水枡	第 14 図 第 15 図	PL.2 PL.3	2－2 区	江戸時代か？	1.6	1.2	1.1	43、44	石組の集水枡（安山岩） 積石は野面の布積み 積石に矢穴（約 5 ～ 6cm）あり
北側水路					（1.9）	0.4	（0.5）	－	石組の水路 引入口か？ 地形の高い北から伸びている
西側水路					（2.6）	0.5	（0.4）	－	石組の水路 吐水口か？ 二の堀のある西へ向かっている
南側水路					－	0.5	（0.4）	－	石組の水路か？ 吐水口か？ 他の 2 条の水路と違い、覆土に割石を多く含む
1 号溝	－	－	1 区（東側）	－	－	－	－	－	かく乱のため欠番
2 号溝	－	－	1 区（東側）	－	－	－	－	－	かく乱のため欠番（信金の柱跡か？）
3 号溝	第 6 図 第 7 図	PL.1	1 区（南側）	近代か？	（25.2）	0.2	（0.4）	1 ～ 4、51、 85 ～ 90	2・3 号土坑と重複 周囲に木杭が多数打ってある。
4 号溝	第 8 図	PL.2	1 区（南側） 2－2 区	江戸時代 （18 世紀以降か？）	東西方向			5 ～ 10、 52 ～ 56	杭が等間隔に埋められている。柵列か板塀の跡か？ 東側石垣と同様の区画の遺構か？
					（14.5）	0.4	（0.4）		
					南北方向				
					（1.3）	0.4	（0.4）		
5 号溝	－	－	2－1 区	－	－	－	－	－	かく乱のため欠番（私立山梨病院の関係か？）
6 号溝	第 11 図	PL.3	2－2 区	近代か？	（9.0）	（2.6）	（0.9）	11 ～ 21、 57・58、 91 ～ 122・ 124・125	木片が多く出土 明治時代の甲府監獄署に伴うものか？
7 号溝	第 16 図	PL.3	2－2 区	江戸時代か？	（3.4）	0.4	（0.3）	－	調査時は礫敷溝と呼んでいた
1 号土坑	－	－	1 区（南側）	－	－	－	－	－	かく乱のため欠番
2 号土坑	第 6 図	－	1 区（南側）	近代か？	0.8	0.8	0.4	80 ～ 82	3 号溝と重複
3 号土坑	第 6 図 第 7 図	－	1 区（南側）	近代か？	1.0	0.6	0.7	83、84	3 号溝と重複

名称	挿図番号	図版番号	位置	時代	長さ（m）	出土遺物	備考
東側石垣	第 9 図	PL.2	1 区（南側） 2－2 区	江戸時代 （18 世紀以降か？）	東西方向	48・68・69	野面の布積み（2 段） 築石（安山岩）に矢穴（約 5 ～ 6cm）あり 裏栗層の下に杭が複数あり
					（6.4）		
					南北方向		
					（2.1）		
西側石垣	第 12 図	PL.2	2－2 区	江戸時代～近代か？	第 1 面	22 ～ 42、 59 ～ 67	野面の石積み（2 段） 2 層構造になっており、改修が行われたと推定される 第 1 面は築石が間知石のように角錐状に近い 第 2 面の築石に矢穴（約 6 ～ 7cm）あり
					（1.7）		
					第 2 面		
					（2.7）		

第４章　自然科学分析

第１節　土壌分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

甲府城下町遺跡は近世甲府城を中心として形成された、武家屋敷および町人地を含む城下町であり、甲府盆地北縁の山地より流下する荒川と相川の合流地点付近の、相川が形成した扇状地上に位置する。

平成 29 年に実施された発掘調査では、江戸時代のものと推定される石垣の他に、石組みの集水枡が検出された。本分析調査では集水枡の底面付近に認められた堆積物を対象とし、遺構内の水域環境、遺構の利用状況や周辺の古植生などに関する情報を得ることを目的として、寄生虫卵分析・花粉分析、珪藻分析、微細物分析を実施する。

１．試　料

分析対象とする遺構は石組みの集水枡であり、試料は取水する水路である北側水路の直下より１点（試料番号１）が採取されている。試料は灰褐色を呈する砂質シルトからなり、礫なども含まれる。試料番号１について、寄生虫卵分析・花粉分析、珪藻分析、微細物分析を実施する。

２．分析方法

（１）寄生虫卵分析・花粉分析

試料 10ccを正確に秤り取る。これについて水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛,比重 2.3）による有機物の分離の順に物理・化学的処理を施し、寄生虫卵および花粉・胞子を分離・濃集する。処理後の残渣を定容してから一部をとり、グリセリンで封入してプレパラートを作製し、400 倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査して出現する全ての寄生虫卵と花粉・胞子について同定・計数する。同定に際しては、当社保有の現生標本の他、寄生虫卵は佐伯ほか（1998）、斉藤・田中（2007）等を、花粉化石は島倉（1973）、中村（1980）、藤木・小澤（2007）、三好ほか（2011）等を参考にする。

結果は、寄生虫卵については 1ccあたりに含まれる寄生虫卵の個数として、花粉・胞子化石については同定および計数結果の一覧表として表示する。寄生虫卵の個数については有効数字を考慮し、10 の位を四捨五入して 100 単位に丸める。また、100 個体未満は「＜ 100 」で表示し、合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸める。なお、表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは種類間の区別が困難なものを示す。

（２）珪藻分析

湿重約 5gをビーカーに計り取り、過酸化水素水と塩酸を加えて試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。次に、分散剤を加えた後、蒸留水を満たし放置する。その後、上澄み液中に浮遊した粘土分を除去し、珪藻殻の濃縮を行う。この操作を４～５回繰り返す。次に、自然沈降法による砂質分の除去を行い、検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下して乾燥させる。乾燥した試料上に封入剤のプリュウラックスを滴下し、スライドガラスに貼り付け永久プレパラートを作製する。

検鏡は、油浸 600 倍または 1000 倍で行い、メカニカルステージを用い任意に出現する珪藻化石が 200 個体以上になるまで同定・計数する（化石の少ない場合は、この限りではない）。なお、原則として、珪藻殻が半分以上破損したものについては、誤同定を避けるため同定・計数は行わない。200 個体が検出できた後は、示準種などの重要な種類の見落としがないように、全体を精査し、含まれる種群すべてが把握できるように努める。

珪藻の同定と種の生態性については、Hustedt（1930 － 1966）、Krammer and Lange-Bertalot（1985 － 1991）、Desikachiary（1987）、Lange-Bertalot（2000）などを参考にする。群集解析にあたり個々の産出化石は、

まず塩分濃度に対する適応性により、海水生、海水～汽水生、汽水生、淡水生に生態分類し、さらにその中の淡水生種は、塩分、pH、水の流動性の3適応性についても生態分類し表に示す。

（3）微細物分析

堆積物から大型植物遺体などを分離・抽出するために、試料を水に浸し、粒径0.5mmの篩を通して水洗する。水洗後の篩内の試料を粒径別にシャーレに移して、粒径の大きな試料から順に双眼実体顕微鏡下で観察し、同定が可能な種実や葉などの大型植物遺体と、主に2mm以上の炭化材、昆虫遺体をピンセットで抽出する。

大型植物遺体の同定は、現生標本や石川（1994）、谷城（2007）、中山ほか（2010）、鈴木ほか（2012）、勝山（2015）等を参考に実施する。バラモミ節は、保存状態が良好な1個の葉横断面の切片を剃刀で採取し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入したプレパラートを双眼実体顕微鏡とマイクロスコープ（KEYENCE,VHX-1000）で観察し、岩田・草下（1959）等を参考に樹種を同定する。結果は、部位・状態別の個数を一覧表で示す。また、各分類群の写真を添付して同定根拠とする。炭化材は乾燥重量と最大径（最長）、分析残渣（砂礫）は乾燥重量を一覧表に併記する。

分析後は、大型植物遺体などを分類群別に容器に入れ、ハリモミ、バラモミ節、ヌカスゲ類は約70％のエタノール溶液で液浸保存する。その他は（不明種実、炭化材、砂礫）は容器に入れて保管する。

3．結　果

（1）寄生虫卵分析・花粉分析

結果を第10表に示す。集水枡の試料番号1からは、寄生虫卵は1個体も検出されなかった。花粉化石やシダ類胞子は検出されるものの極めて少なく、堆積物1㎥あたりに含まれる花粉・胞子数は100個未満であった。保存状態も、花粉外膜が破損、あるいは溶解しているなど、全体的に悪い。

わずかに検出された花粉化石についてみると、木本花粉ではマツ属、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属が、草本花粉ではクワ科、イチビ属、タンポポ亜科が、1～2個体産出した程度である。

第10表　寄生虫卵分析・花粉分析分析結果

種　類	集水枡 北側水路直下 1
寄生虫卵（個/cc）	0
花粉・胞子数（個/cc）	＜100
木本花粉	
マツ属単維管束亜属	1
マツ属複維管束亜属	2
マツ属（不明）	1
ハンノキ属	1
コナラ属コナラ亜属	1
エノキ属－ムクノキ属	1
草本花粉	
クワ科	1
イチビ属	1
タンポポ亜科	2
不明花粉	
不明花粉	4
シダ類胞子	
シダ類胞子	38
合　計	
木本花粉	7
草本花粉	4
不明花粉	4
シダ類胞子	38
合計（不明を除く）	49

1）寄生虫卵、花粉・胞子数については、10の位を四捨五入して100単位に丸めている。
2）＜100：100個体未満。

（2）珪藻分析

結果を第11表に示す。珪藻分析を行った集水枡の試料番号1では、検出された珪藻化石の個体数が少なく、32個体産出した程度である。保存状態は、壊れた殻が多いため、不良である。産出した分類群は、淡水生種のみで構成される。

本試料から低率ながら産出した種は、淡水生種で流水性種の*Reimeria sinuata*、止水性種の*Pinnularia lundii*、陸生珪藻の*Hantzschia amphioxys*、*Luticola mutica*等である。

（3）微細物分析

結果を第12表に示す。また、大型植物遺体各分類群の写真を第30図に示して同定根拠とする。

試料ほぼ全量800cc（1557g）を洗い出した結果、葉が2個、種実が2個、炭化材が0.02g（最長5.51㎜）抽出された。分析残渣は砂礫を主体とし、290.08gを量る。

葉は、2個とも針葉樹のトウヒ属バラモミ節で、うち1個の横断面切片作製観察の結果、ハリモミに同定された。種実は、1個が草本のヌカスゲ類の果実に同定された。1個は微細片のため不明であるが、断面が柵状でブドウ属の種子に似る。

なお検出された最も状態の良い炭化材はブナ属に同定された。その他の炭化材については微細であり状態も不良なため、種類は不明である。

4．考　察

（1）集水枡内の堆積環境

低率ながら産出した珪藻化石種は、淡水生種で流水性種の*Reimeria sinuata*、止水性種の*Pinnularia lundii*、陸生珪藻の*Hantzschia amphioxys*、*Luticola mutica*等であった。本試料から産出した珪藻化石は低率であったため、詳細な検討を行うことは差し控えたいが、若干の考察を行うと次のように考えられる。

少ないながらも本試料からは、流水性種、止水性種、流水不明種および陸生珪藻が産出し、分類群の生態性にはばらつきがあることから、いわゆる混合群集に近い組成である。淡水生種群の混合群集とは、基本的に生育環境を異にする種群で構成され、堆積物中からの産出率は低い割に構成種数が多く、流れ込み等による二次化石種群を多く含む、などの特徴を持つ群集とされる（堀内ほか，1996）。混合群集は、一般には低地部の氾濫堆積物などの一過性堆積物で認められる場合が多い。

以上の点を踏まえると、集水枡内には遺跡が立地する扇状地を構成する氾濫堆積物が混入している可能性があり、珪藻化石の保存状態や陸生珪藻などの割合が高いことも踏まえると、集水枡内はしばしば乾燥する好気的環境であった可能性が高い。

（2）遺構の利用状況と古植生

集水枡の利用状況を検討するため、寄生虫卵分析を実施した。寄生虫は、それに感染した中間宿主、あるいは寄生虫卵に汚染されたものなどを摂取することで、終宿主（ヒト）

第 11 表　珪藻分析結果

種　　類	生態性			環　境 指標種	集水枡 北側水路直下 1
	塩分	pH	流水		
Caloneis aerophila Bock	Ogh-ind	al-il	ind	RA	1
Cymbella spp.	Ogh-unk	unk	unk		1
Fragilaria spp.	Ogh-unk	unk	unk		2
Hantzschia amphioxys (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	10
Hantzschia spp.	Ogh-unk	unk	unk	O,U	4
Luticola mutica (Kuetz.) D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	3
Neidium alpinum Hustedt	Ogh-unk	unk	ind	RA	2
Nitzschia spp.	Ogh-unk	unk	unk		2
Pinnularia lundii Hustedt	Ogh-ind	ind	l-ph	O	2
Pinnularia subcapitata Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB,S	1
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk		2
Reimeria sinuata (Greg.) Kociolek et Stoermer	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	2
海水生種					0
海水～汽水生種					0
汽水生種					0
淡水～汽水生種					0
淡水生種					32
珪藻化石総数					32

凡例

塩分：塩分濃度に対する適応性
- Euh　：海水生種
- Euh-Meh：海水生種－汽水生種
- Meh　：汽水生種
- Ogh-Meh：淡水生種-汽水生種
- Ogh-hil　：貧塩好塩性種
- Ogh-ind　：貧塩不定性種
- Ogh-hob　：貧塩嫌塩性種
- Ogh-unk　：貧塩不明種

pH：水素イオン濃度に対する適応性
- al-bi　：真アルカリ性種
- al-il　：好アルカリ性種
- ind　：pH不定性種
- ac-il　：好酸性種
- ac-bi：真酸性種
- unk　：pH不明種

流水：流水に対する適応性
- l-bi　：真止水性種
- l-ph　：好止水性種
- ind　：流水不定性種
- r-ph：好流水性種
- r-bi　：真流水性種
- unk：流水不明種

環境指標種
A：外洋指標種　B：内湾指標種　C1：海水藻場指標種　C2：汽水藻場指標種
D1：海水砂質干潟指標種　D2：汽水砂質干潟指標種
E1：海水泥質干潟指標種　E2：汽水泥質干潟指標種　F：淡水底生種群（以上は小杉,1988）
G：淡水浮遊生種群　H：河口浮遊性種群　J：上流性河川指標種　K：中～下流性河川指標種
L：最下流性河川指標種群　M：湖沼浮遊性種　N：湖沼沼沢湿地指標種　O：沼沢湿地付着生種
P：高層湿原指標種群　Q：陸域指標種群（以上は安藤,1990）
S：好汚濁性種　U：広適応性種　T：好清水性種（以上はAsai and Watanabe, 1995）
R：陸生珪藻（RA：A群，RB：B群，RI：未区分、伊藤・堀内，1991）

第 12 表　微細物分析結果

分類群	部位・状態	集水枡 北側水路直下 1	備考
葉			
ハリモミ	葉　完形未満	1	残存長 19.50mm，先端欠損,横断面切片作製観察
バラモミ節	葉　破片（先端部）	1	残存長 3.03mm
種実			
ヌカスゲ類	果実　完形	1	
不明	破片	1	残存径 1.40mm，断面柵状，ブドウ属に似る
炭化材		0.02	乾燥重量（g），最長 5.51mm
砂礫主体	＞4mm	177.34	乾燥重量（g）
	4 － 2mm	41.62	乾燥重量（g）
	2 － 1mm	28.03	乾燥重量（g）
	1 － 0.5mm	43.10	乾燥重量（g）
分析量		800	容積（cc）
		1557	湿重（g）

に感染する。寄生虫卵は普通の土壌中にも含まれるが、糞便などの堆積物で多産する調査事例も報告されている（例えば金原・金原，1992，1993；金原ほか，1995；パリノ・サーヴェイ株式会社，2011 など）。水路内に糞便などの混入があったとすれば、集水枡内に寄生虫卵が蓄積されていることが想定された。しかしながら、分析の結果、寄生虫卵は 1 個体も検出されなかった。なお、寄生虫卵の分解に対する抵抗性は、花粉化石と同程度とされている（黒崎ほか，1993）。その花粉化石についてみると、集水枡の北側水路直下からはわずかに検出されるものの、その保存状態は悪く、花粉外膜が破損・溶解している状況が認められた。一般的に花粉やシダ類胞子の堆積した場所が、常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壌微生物によって分解・消失するとされている（中村，1967；徳永・山内，1971；三宅・中越，1998 など）。珪藻分析からも、集水枡内が好気的環境に曝されていた可能性が指摘されることから、寄生虫卵や花粉化石、シダ類胞子は、堆積後の経年変化で分解・消失したと推測される。以上の結果から、遺構の利用状況については、今回の結果から言及に至らない。

なお、微細物分析で検出された不明種実遺体は、ブドウ属に似ていた。甲府城下町遺跡（北口県有地）で検出された 1 号埋桶からは、栽培種のブドウの種子が多産しており、遺跡周辺での栽培の可能性が示唆されている（パリノ・サーヴェイ株式会社、2008）。

一方、周辺植生についてみると、花粉分析からは、マツ属などの針葉樹、ハンノキ属やコナラ属コナラ亜属、エノキ属－ムクノキ属などの落葉広葉樹、クワ科、イチビ属、タンポポ亜科などの草本類が確認された。微細物分析からは、常緑高木のトウヒ属バラモミ節ハリモミの葉と、草本のヌカスゲ類の果実やブナ属の炭化材が確認された。ハリモミは、標高を基準とする垂直分布では、日本産トウヒ属の中で最も下位に分布する種である。葉が検出されたことから、遺構周辺あるいは水路沿いなどに生育していた可能性がある。マツ属は、二次林の代表的な種類であり、有用材や観賞用として植林されてきた種類でもある。ハンノキ属やコナラ亜属、エノキ属－ムクノキ属などは、渓谷沿いや河畔などに生育する種を含む。

草本類では、クワ科、ヌカスゲ類、タンポポ亜科などが認められる。これらは周辺の明るく開けた草地環境に生育していたと考えられる。また、イチビ属は、渡来種であり、平安時代にはすでに栽培されていたことが知られていることから、当時の遺跡周辺にも生育していたと考えられる。

引用文献

安藤一男, 1990, 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42, 73-88.

Asai, K. and Watanabe, T., 1995, Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom, 10, 35-47.

Desikachiary, T. V., 1987, Atlas of Diatoms. Marine Diatoms of the Indian Ocean. Madras science foundation, Madras, Printed at TT. Maps and Publications Private Limited, 328, G. S. T. Road, Chromepet, Madras-600044. 1-13, Plates : 401-621.

藤木利之・小澤智生, 2007, 琉球列島産植物花粉図鑑. アクアコーラル企画, 155p.

堀内誠示・高橋 敦・橋本真紀夫, 1996, 珪藻化石群集による低地堆積物の古環境推定について－混合群集の認定と堆積環境の解釈－. 日本文化財科学会 第 13 回大会研究発表要旨集, 62-63.

Hustedt, F., 1930, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. under Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part 1, 920p.

Hustedt, F., 1937-1938, Systematische unt okologische Untersuchungen mit die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra. Ⅰ～Ⅱ. Arch. Hydrobiol. Suppl., 15, 131-809, 1-155, 274-349.

Hustedt, F., 1959, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. under Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part 2, 845p.

Hustedt, F. , 1961-1966, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. under Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeres-gebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part 3, 816p.

石川茂雄, 1994, 原色日本植物種子写真図鑑. 石川茂雄図鑑刊行委員会, 328p.

伊藤良永・堀内誠示, 1991, 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 日本珪藻学誌, 6, 23-44.

岩田利治・草下正夫, 1959, 増訂邦産松柏図説, 産業図書, 247p.

金原正明・金原正子, 1992, 花粉分析および寄生虫. 藤原京跡の便所遺構－右京七条一坊西北坪－, 奈良国立文化財研究所, 12-15.

金原正明・金原正子, 1993, 史跡松江城二ノ丸番所跡SK-04 内堆積土の分析. 史跡松江城発掘調査報告書, 松江市教委区委員会, 51-56.

金原正明・金原正子・中村亮仁, 1995, 大宮坊跡（厠跡）における自然科学的分析. 史跡石動山環境整備事業報告Ⅱ, 石川県鹿島町教育委員会, 51-70.

勝山輝男, 2015, 日本のスゲ　増補改訂（ネイチャーガイド）. 文一総合出版, 392p.

小杉正人, 1988, 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 第四紀研究, 27, 1-20.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1985, Naviculaceae. Bibliothyca Diatomologica, 9, 250p.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1986, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa, 2 (1) : 876p.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1988, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2 (2) : 596p.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1990, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2 (3) : 576p.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1991, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2 (4) : 437p.

黒崎　直・松井　章・金原正明・金原正子, 1993, 糞便堆積物の分析－特に寄生虫卵分析について－. 日本文化財科学会第 10 回大会研究発表要旨集, 日本文化財科学会, 115-115.

Lange-Bertalot, H. , 2000, ICONOGRAPHIA DIATOMOLOGICA: Annotated diatom micrographs. Witkowski, A. , Horst Lange-Bertalot, Dittmer Metzeltin: Diatom Flora of Marine Coasts Volume 1. 219 plts. 4504 figs, 925 pgs.

三宅　尚・中越信和, 1998, 森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態. 植生史研究, 6, 15-30.

三好教夫・藤木利之・木村裕子, 2011, 日本産花粉図鑑. 北海道大学出版会, 824p.

中村　純, 1967, 花粉分析. 古今書院, 232p.

中村　純, 1980, 日本産花粉の標徴　Ⅰ　Ⅱ（図版）. 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第 12, 13 集, 91p.

中山至大・井之口希秀・南谷忠志, 2010, 日本植物種子図鑑（ 2010 年改訂版）. 東北大学出版会, 678p.

パリノ・サーヴェイ株式会社, 2008, 自然科学分析. 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第 258 集　甲府城下町遺跡　北口県有地埋蔵文化財発掘調査報告書, 山梨県教育委員会, 245-263.

パリノ・サーヴェイ株式会社, 2011, 自然科学分析. 岩手県文化財調査報告書第 133 集　平泉遺跡群発掘調査報告書　柳之御所遺跡－第 70 次発掘調査概報－, 岩手県教育委員会生涯学習文化課. 50-74.

佐伯秀治・升　秀夫・早川典之, 1998, 臨床検査シリーズ 寄生虫鑑別アトラス－オールカラー版－. 株式会社メディカルサイエンス社, 162P.

斉藤崇人・田中義文, 2007, 寄生虫卵殻の形態分類. 徳永重元博士献呈論集, パリノ・サーヴェイ株式会社, 407-416.

島倉巳三郎, 1973, 日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第 5 集, 60p.

鈴木庸夫・高橋　冬・安延尚文, 2012, ネイチャーウォッチングガイドブック　草木の種子と果実－形態や大きさが一目でわかる植物の種子と果実 632 種－. 誠文堂新光社, 272p.

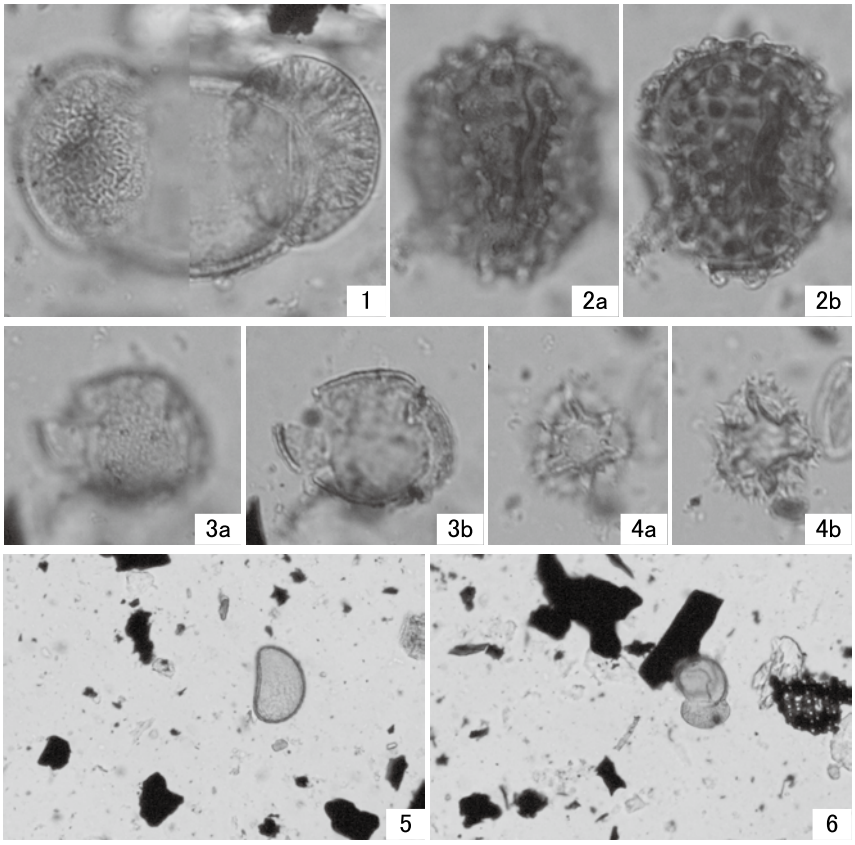
徳永重元・山内輝子, 1971, 花粉・胞子. 化石の研究法, 共立出版株式会社, 50-73.

谷城勝弘, 2007, カヤツリグサ科入門図鑑. 全国農村教育協会, 247p.

吉村　稔・平川一臣, 1984, Ⅰ　地形分類図. 土地分類基本調査　甲府, 山梨県企画管理局土地水対策課, 15-25.

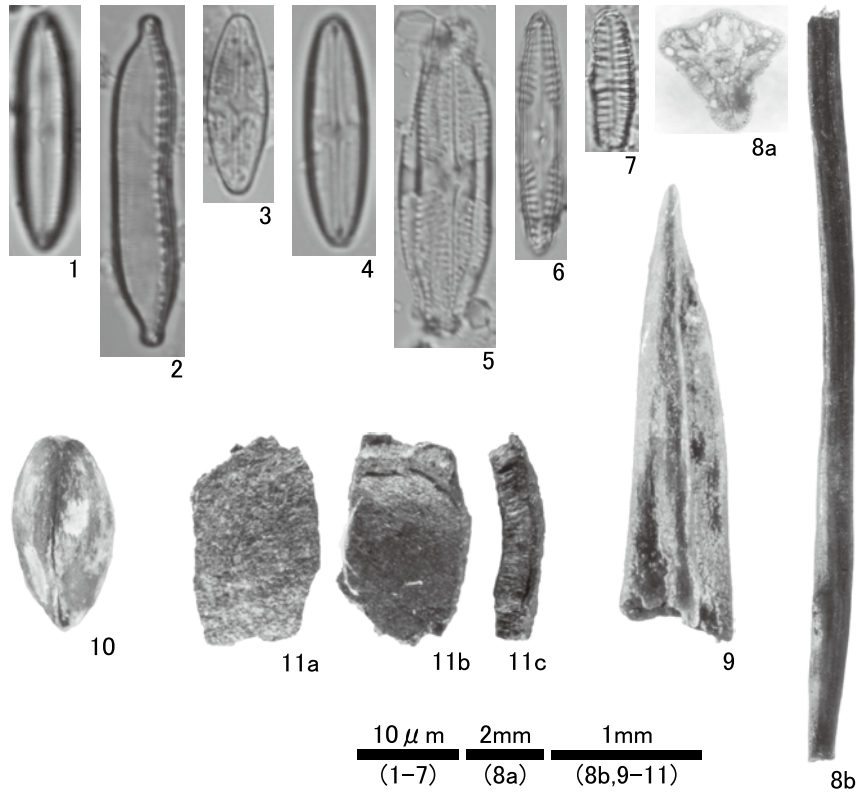
吉村　稔・平川一臣, 1985, Ⅰ　地形分類図. 土地分類基本調査　御岳昇仙峡, 山梨県企画管理局土地水対策課, 15-25.

第 29 図　花粉化石



1．マツ属複維管束亜属(集水枡;北側水路直下 1)
2．イチビ属(集水枡;北側水路直下 1)
3．コナラ属コナラ亜属(集水枡;北側水路直下 1)
4．タンポポ亜科(集水枡;北側水路直下 1)
5．分析プレパラート内の状況(集水枡;北側水路直下 1)
6．分析プレパラート内の状況(集水枡;北側水路直下 1)

第 30 図　珪藻化石・大型植物遺体



1．*Caloneis aerophila* Bock (集水枡;北側水路直下 1)
2．*Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow (集水枡;北側水路直下 1)
3．*Luticola mutica* (Kuetz.)D.G.Mann (集水枡;北側水路直下 1)
4．*Neidium alpinum* Hustedt (集水枡;北側水路直下 1)
5．*Pinnularia lundii* Hustedt (集水枡;北側水路直下 1)
6．*Pinnularia subcapitata* Gregory (集水枡;北側水路直下 1)
7．*Reimeria sinuata* (Greg.) Kociolek et Stoermer (集水枡;北側水路直下 1)
8．ハリモミ 葉(b:横断面) (集水枡;北側水路直下 1)
9．バラモミ節 葉(先端部) (集水枡;北側水路直下 1)
10．ヌカスゲ類 果実(集水枡;北側水路直下 1)
11．不明種実(集水枡;北側水路直下 1)

第２節　金属関連資料の科学分析

山梨県立博物館　学芸員　西願　麻以

１．はじめに

甲府城下町遺跡（公用車等駐車場）から出土した溶融金属が付着した土器片２点（同一個体）と、金属片（第27図123）１点の科学分析を行い、近世の甲府城下町での金属溶融や加工について考察を行う。

２．分析方法

資料の表面観察には実体顕微鏡（顕微鏡：OLYMPUS製SZ61、カメラ：Nikon製DIGITAL SIGHT DS-U1）を、金属種の判定のための元素分析と半定量分析には可搬型蛍光X線分析装置（Innov-XSystemsDELTAPREMIUMDP-4000）を使用した。分析モードは2BeamMiningPlusを使用し、Ta管球の電圧を自動で40kVと15kVに切り替えて測定することにより軽元素の検出も可能である。ファンダメンタルパラメーター法により簡易的に各元素の半定量値を算出することができる。分析時間は120secとし、X線の照射範囲は約φ10mmである。分析は非破壊・無洗浄の表面分析であり、遺物表面の土や錆などの影響があると考えられる。

３．分析結果

実体顕微鏡での表面観察結果を第31図に、蛍光X線分析での定性分析結果を第32図に、半定量分析結果を第13表に示す。

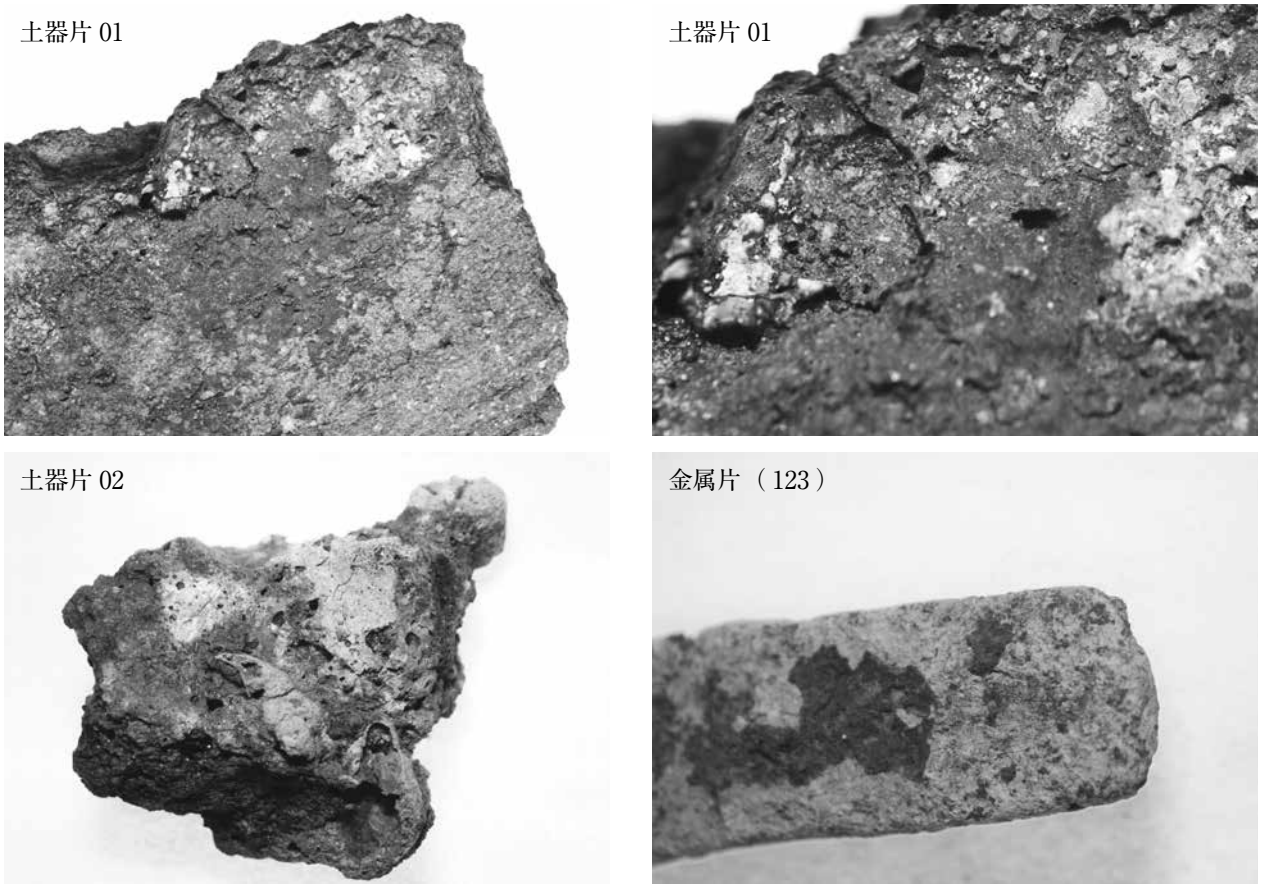
土器片01は実体顕微鏡結果では、金属質の茶、暗灰、緑、白色部位と、土器の胎土部位が見られ、定性分析結果より、金属質部位では、鉄（Fe）、銅（Cu）、亜鉛（Zn）、スズ（Sn）、鉛（Pb）の金属元素が、胎土部位より多く検出された。土器片02は、実体顕微鏡結果で、金属質の緑、白、暗灰色部位が確認され、銅（Cu）、亜鉛（Zn）、スズ（Sn）、鉛（Pb）などの金属元素が検出された。鉄も検出されたが、鉄は胎土や表面の砂等にも含まれる元素であり、付着金属として顕著に多い検出にまでいたらなかった。金属片（第27図123）は、実体顕微鏡結果では緑色の錆びが観察され、元素分析では銅（Cu）が多く、微量の鉛（Pb）と亜鉛（Zn）が検出された。鉄（Fe）も検出されたが、銅の割合が多く、銅と鉄の合金はあまりみられないことから、表面の砂や錆び等の影響であり、金属本体の元素である可能性は低いと考える。そこで、銅、亜鉛、鉛を100％とした割合を第14表に示す。銅の割合が99％以上であり、非常に純度の高い銅であることがわかった。

４．考　察

土器片に付着した溶融金属からは、鉄、銅、亜鉛、スズ、鉛が検出されたことから、鉄、銅、スズ、鉛、スズ鉛合金、青銅、真鍮等の金属が扱われていた可能性が考えられる。亜鉛とスズの割合が低いことから、これらの元素は、銅や鉛等の金属の不純物である可能性も考えられる。同一の場所から羽口（第20図50）も出土していることから、この場所で金属の溶融や加工が行われていたことが伺える。溶融金属は銅、鉄、鉛類の合金であると考えられ、金や銀の合金はみられなかった。

５．おわりに

本分析の結果、土器片に、銅、鉄、鉛類の合金の溶融物が付着していることがわかった。この場所で金属溶融や加工が行われていたことを示す資料であり、近世の甲府城下町における、金属溶融や加工の技術の存在を示す重要な資料である。



第 31 図　実体顕微鏡画像

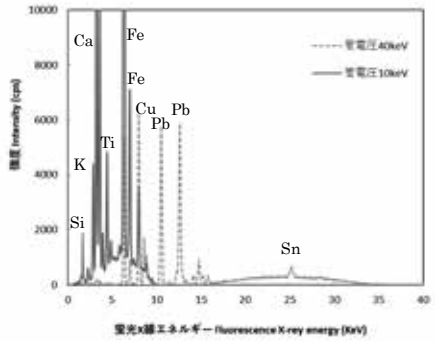
第 13 表　蛍光X線分析定性結果

分析番号		図版番号	分析部位	半定量結果（NSTD）Wt%													
				Mg	Al	Si	P	S	K	Ca	Ti	Mn	Fe	Cu	Zn	Sn	Pb
1	土器片 01	−	黒、緑、茶色部位	0.00	10.9	35.7	0.00	1.59	7.15	4.44	4.70	0.35	16.3	9.21	2.15	0.37	7.10
2			胎土部位	0.00	21.8	46.5	0.00	0.00	4.41	5.96	7.88	0.40	12.8	0.29	0.04	0.00	0.05
3			黒褐色、茶色部位	0.00	7.71	28.2	0.95	1.40	6.42	4.47	3.61	0.52	18.4	11.6	3.26	1.14	12.3
4			茶色緑部位	0.00	8.87	21.5	0.45	2.32	2.55	4.34	3.09	0.38	16.0	22.7	3.03	1.61	13.1
5	土器片 02	−	白、緑色部位	0.00	10.0	18.7	2.92	0.87	1.90	3.43	1.96	0.34	16.3	37.8	0.82	1.15	3.88
6			緑色部位	0.00	8.30	17.4	1.09	0.15	1.15	2.02	1.89	0.23	8.78	57.5	0.21	0.35	0.89
7			黒、白、緑色部位	0.00	9.24	20.4	1.60	0.78	1.51	5.13	1.89	0.31	13.0	38.9	1.34	1.37	4.55
8	金属片	第 27 図 123	表	6.01	3.56	8.22	0.00	0.06	0.18	0.53	0.34	0.05	0.91	79.6	0.26	0.03	0.19
9			表	0.00	2.18	6.72	0.00	0.00	0.25	0.67	0.58	0.00	1.17	87.3	0.00	0.00	0.19
10			裏	0.00	3.38	7.43	0.00	0.06	0.10	0.33	0.27	0.00	0.75	87.0	0.42	0.03	0.19

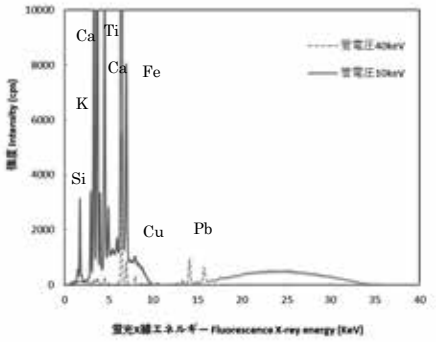
第 14 表　Cu-Zn-Pb割合

分析番号		図版番号	Cu-Zn-Pb　Wt%		
			Cu	Zn	Pb
8	金属片	第 27 図 123	99.43	0.33	0.24
9			99.78	0.00	0.22
10			99.31	0.48	0.22

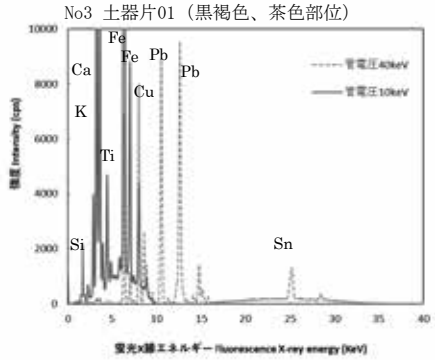
No1 土器片01（黒、緑、茶色部位）



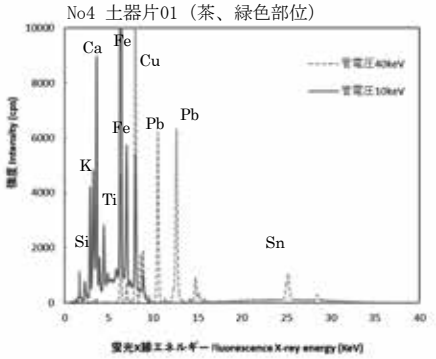
No2 土器片01（胎土部位）



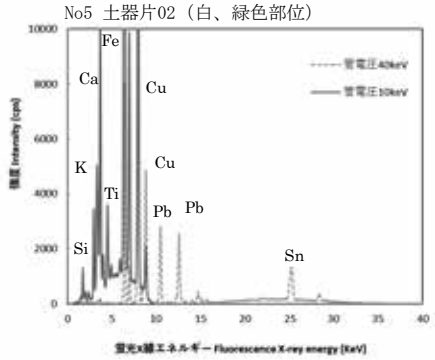
No3 土器片01（黒褐色、茶色部位）



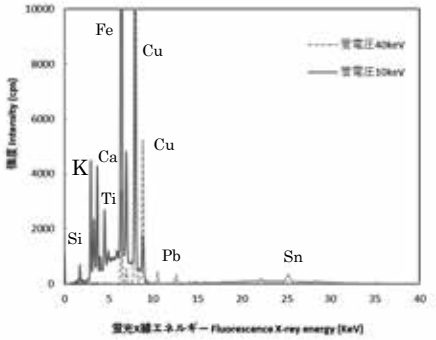
No4 土器片01（茶、緑色部位）



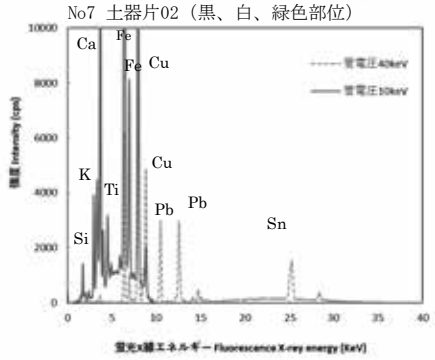
No5 土器片02（白、緑色部位）



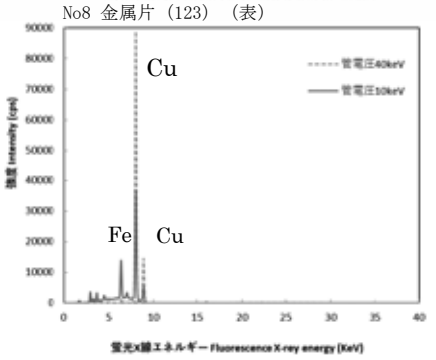
No6 土器片02（緑色部位）



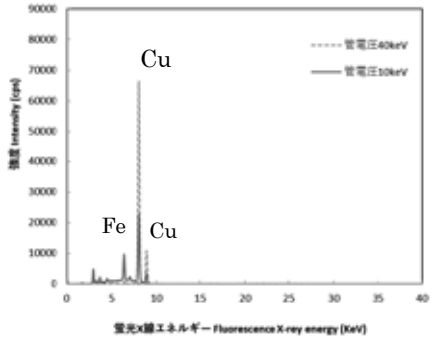
No7 土器片02（黒、白、緑色部位）



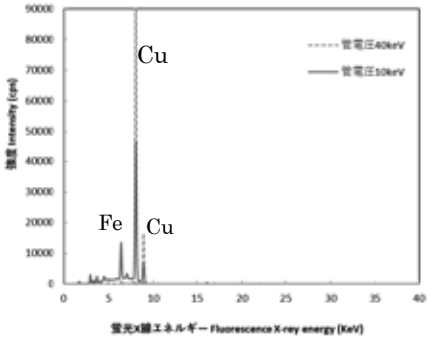
No8 金属片（123）（表）



No9 金属片（123）（表）



No10 金属片（123）（表）



第 32 図　蛍光X線分析定性結果

第5章　総　　括

第1節　調査区の変遷について

調査の結果、江戸時代から近代にかけて多くの遺構が確認された。調査区内の遺構の変遷を、簡単に考察したい。

（1）江戸時代

江戸時代に属する可能性が高いのは、古い方から東側石垣と7号溝、集水枡、4号溝、暗渠である。また、東側石垣と集水枡は、どちらも野面の布積みであり、石材に確認された矢穴の大きさ（約5～6cm）もほぼ同じであることから、造られた時期が近いことが推測される。また、4号溝（柵か、塀か）は東側石垣と並行するように90°屈曲していることから、同様の区画を意識していると考えられる。東側石垣よりも後に掘られているが、同時に存在した可能性は否定できない。

これらの遺構が、江戸時代のどの段階で築かれたかは判然としないが、出土している遺物から18世紀以降と推定している。すなわち柳沢吉保・吉里が城主であった時期（1704～1724）、甲府勤番期（甲府城代含む）（1724～1868）となる。18世紀初頭以降の絵図では、調査区周辺は「米蔵」「御米蔵」などと記載されており、今回確認された遺構は、周辺が蔵となっていた頃のものと推測される。柳沢吉保は甲府城拝領後、本城の大修復を行い、城下町の再整備に力を入れている。また、甲府勤番期においても修復が行われており、例えば天保4年（1833）に、柳門の外にある六番から十番までの米蔵を修復した記録が残っている（『山梨県史』資料編8七三六号文書）。今回確認された遺構は、これらの修復によって造られたものの可能性がある。

（2）近　代

近代に属する可能性が高いのは、古い方から6号溝と盛土状遺構、西側石垣、3号溝である。6号溝と盛土状遺構は第3節に記載したとおり、甲府監獄署に伴う可能性が高い。西側石垣は集水枡・暗渠よりも新しいことは明確で、築石に間知石のような角錐状の石材を使用していることから、明治時代以降の可能性が高い。ただし、改修を行っており、改修前は古い時期の可能性がある。3号溝は、覆土中の遺物から、明治時代以降の可能性が高い。

調査区は明治時代に甲府監獄署が、大正時代には私立山梨病院が置かれていた。当然、両者が始まる際には建物の建設や区画の整備が行われており、間には建替や改修があったと推測される。

第2節　調査区南西側の水に関わる遺構について

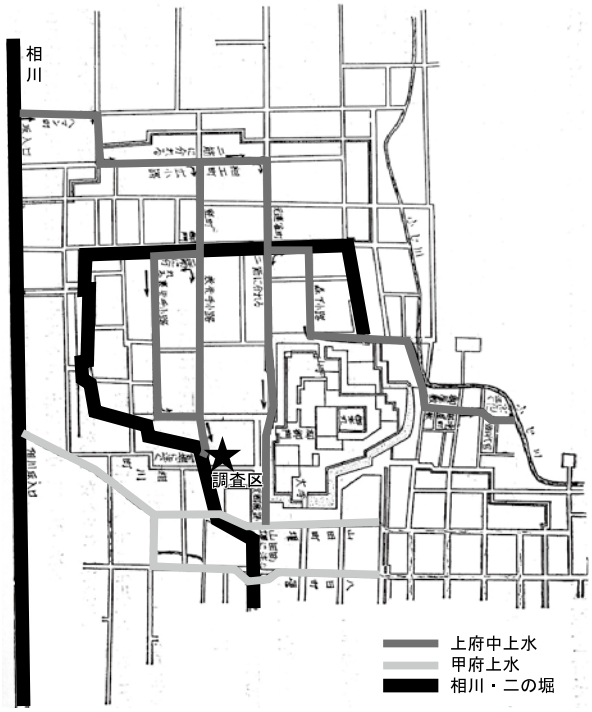
調査区は北東から南西へ向かって傾斜しており、調査区南西側は水が集まりやすい地形となっている。そのためか、集水枡、暗渠、6号溝と、水に関わる遺構が多く見つかった。江戸時代に限らず、多くの人が生活をする都市において、水の確保・処理は最重要事項である。また、甲府城下町遺跡は相川扇状地に立地していることから、都市の発展に水が大きく関わっている。そこを踏まえて、検出した遺構の考察を行いたい。

前述した3基の遺構を時期が古い順に並べると、集水枡、暗渠、6号溝となる。では、このうち集水枡は、どのような目的で造られたのであろうか。3条の水路が取り付けられており、地形などから考えて、北側水路から水を引き入れ、西側・南側水路から吐水していたことが窺える。南側と西側の水路が同時に使用されていたかは不明だが、西側水路は二の堀の方向へ伸びており、そちらに排水していたと考えられる。現在の二の堀（濁川）は改修が行われしまい、吐水口のようなものは確認できない。甲府城下町遺跡で石組の集水枡が発見された事例はなく、甲府城内でも数例しか確認されてない。また、調査区周辺は武家地であり、居住空間ではなかったため（絵図などでは、付近には御米蔵や普請方定小屋が書かれている）、生活排水などはあまりなかったと考えられる。そのため、一般家屋にあるような存在（例えば食膳具の洗浄用など）ではなく、公共インフラに伴うような施設であったと推測される。その中で、考えられる機能を3例類推してみた。

（1）上水施設

甲府城下町遺跡には甲府上水と上府中上水の二系統が見られ、調査区周辺は天保12年（1842）に開設された上

府中上水が敷設されている。相川（現在の朝日町付近）から引水し、甲府城の西側を通るルートと北側を通るルートに分岐している。このうち調査区周辺を通るのは西側のルートであり、城下町を北から南へ進みながら、最終的には甲府上水に合流している。幹線については、現在の平和通り西側を通っていたと考えられているが、今回の調査で確認された集水枡は、分水した上水施設であった可能性も考えられる。



第 33 図　上府中上水のルート「(上府中上水堰の図（著者原図))」(露木 1966 を改変)

江戸時代の上水は自然流下式であったため、増水時などに備えることはもちろん、通常時でも一定量を超えると排水する必要があった。そのため上水幹線が堀や下水などに交わる場所や、地形的な結節点で排水用の吐水口が設けられていた。例えば東京都の東京駅八重洲北口遺跡で見つかった玉川上水幹線の木製枡では、複数の木樋と接続し、引き入れた水の一方を利用のために方向を変えて流し、もう一方を堀へ排水している（後藤 2011)。今回の調査で確認された遺構も、同様の目的があった可能性が考えられる。その場合、今回確認された枡は分水のために設置され、一方を二の堀に排水して、一方を南側へ流していたことが想定される。天保 12 年に書かれた上府中上水の下渡書にも「二の堀え吐捨」の文言が見られる（蓬沢村古文書（露木 1966 より抜粋))。

ただし、調査区から木樋などの上水に関わる遺構・遺物は見つかっておらず、現状では推測の域を出ない。また、上府中上水は 19 世紀中頃に開設されているが、石の積み方などから、枡がそれよりも古い段階で造られた可能性を考えている。もちろん、石の積み方や石材の加工は時期の推定要素として弱いことは承知しており、今後の研究が必要である。

（2）下水施設

前述のとおり、集水枡付近は雨水などが集まりやすい地形である。そのため、排水を行う必要があり、二の堀に吐水する際に泥などが混じらないよう、沈砂のために枡を設けている可能性が考えられる。この場合、北側水路から引き入れた水を枡で沈砂したのち、西側水路で排水していたことが想定される。

ただし、この考えでは南側水路の説明が難しい。また、枡の覆土には泥や砂などはあまり確認できず、発掘調査時もいわゆるドブくささは感じられなかった。

（3）防火用の水溜

江戸時代の都市部において、もっとも恐れられていた災害の一つが火災である。甲府城・甲府城下町も数度の大火災の被害を受けており、享保 12 年（ 1727 ）の大火では藩主の居館である屋形御殿、本丸の銅門が失われ、元通りになることはなかった。そうした火災の対策として、水溜を作っていた可能性が考えられる。例えば、江戸城では玉川上水を引水して防火用の水溜としていたとの見解もある（野中 2012)。しかし、発掘調査では枡とそれに接続する水路の狭小の範囲しか見つかっておらず、現状では推測の域を出ない。

以上、3 つの仮説を考察した。どれも現状では決定打に欠けるため、現状では判然としない。筆者の管見の及ぶ範囲での想定であり、まったく異なった遺構である可能性も否定できない。今後の事例の増加や研究によって、新たな見解が得られるかもしれない。

上記の集水枡を壊して造られているのが暗渠である。北東から南西へ伸びており、おそらくは二の堀に排水して

いたと考えられる。しかし、集水枡との共通点はその1点のみである。枡にあった「溜める（沈砂含む）」という機能が失われており、「分岐」も見つかっていない。流れていた水がどのような類であったか、集水枡と同様の目的で造られたかについては判然としない。暗渠を塞ぐ形で造られた6号溝については、次節で考察を行う。

第3節　甲府監獄署とそれに伴う遺構について

調査区一帯は、明治8年から明治45年まで甲府監獄署が置かれていた。甲府監獄署は現在の甲府駅付近までを含めた非常に広い範囲であった。敷地内の一部は過去に発掘調査が行われており、建物跡や溝、埋桶、近代上水施設などの遺構などが確認されている（株式会社ダイタ他2006）。しかし、当時の詳細な建物配置図が見つかっておらず、その構造はよく分かっていなかったが、近年、監獄署の建物配置図が確認された（第34・35図）。配置図は2枚あり、建物の名称や井戸の数など、細部が異なっているが、基本的な建物配置は変わっていない。第34図の方が井戸の数が増えているため、新しい可能性があるが、明確には断言できない。配置図を見ると、調査区は敷地の中でも南端にあたる。工場などが多く立ち並び、服役者の作業場であったことが窺える。

残念ながら掲載した配置図は、時期が明記されていない。監獄署は37年間継続していたため、建て替えなどがあった可能性はあるが、それを承知の上で配置図と調査区との比較を行いたい（第36図）（註）。

（1）調査区西側

（ⅰ）配置図　調査区の西側には南北に伸びる水路があり、監獄の区画が分断されている。水路の両脇にはやや色の濃い線が書かれているが、ここには「堤」と書かれている。規模は不明だが、水路の両脇に盛り土を行い、自由な往来の制限や区画外を見えにくくしていたことが推測される。少し北へ行くと、水路の脇には「木工々場」が確認できる。

（ⅱ）調査区　調査区を見るとほぼ同じ場所に、6号溝が確認できる。6号溝からは様々な木製品が出土しており、特に加工痕のある小さな木片が多く見つかっている。これは木製品を作る際に生じた木端であると考えられる。このことから、6号溝は配置図に描かれている水路であった可能性が高い。また、6号溝の西側に、平行するような形で盛土状遺構が見つかっている。こちらも絵図に書かれている堤であった可能性が考えられる。

（2）調査区南側

（ⅰ）配置図　調査区の南側には鍛冶工場があり、その南側に細い水路が東西方向に伸びている。この水路が西側で北へ屈曲し、大きな水路に合流している。

（ⅱ）調査区　調査区の南側には4号溝と東側石垣があり、東西方向に伸びている。両遺構は西側で北へ屈曲している。両遺構、特に東側石垣は江戸時代の遺構と判断しており、水路も確認できなかったことから直接の関連は薄いと考えられるが、江戸時代から存在した区画が、監獄においても生かされている可能性が考えられる。

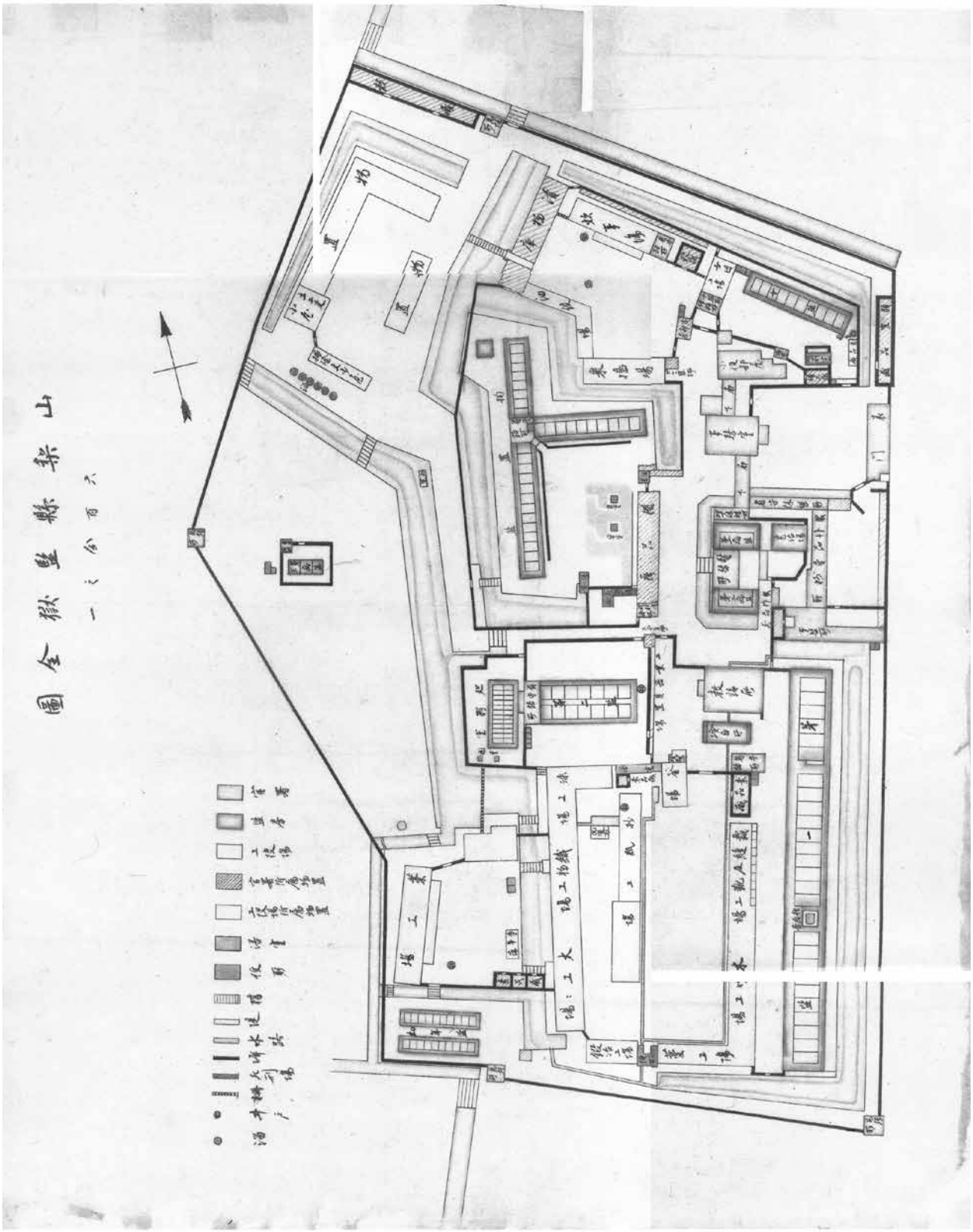
（3）終わりに

甲府市教育委員会が平成16年に行った調査では、「監」と書かれた碗をはじめとして多くの製品が見つかっているが、これは調査区が事務所や製品賣□所（□は判読不能）近辺に該当するためだろう。

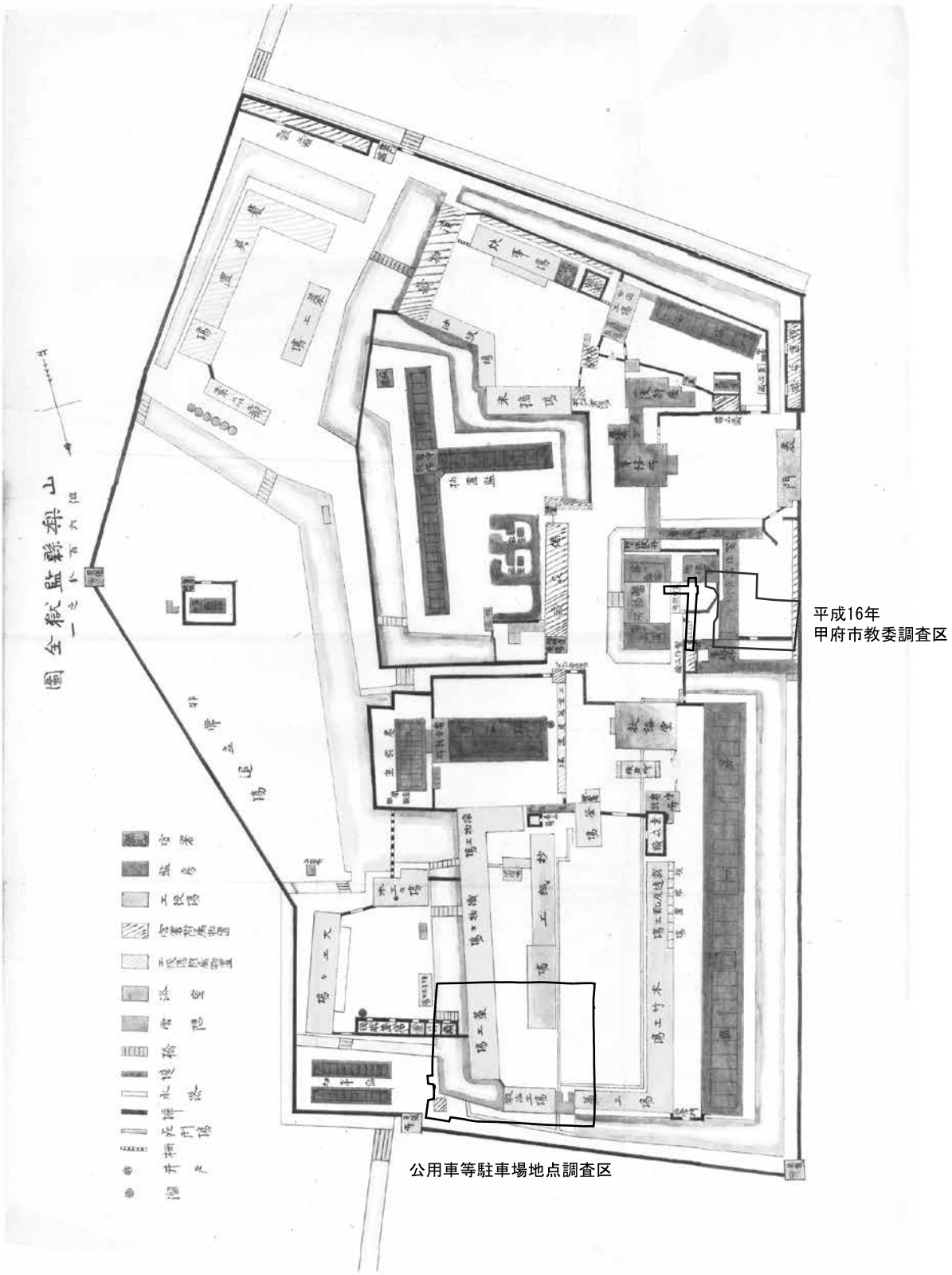
このように、絵図と調査成果を合わせることで、比較可能な遺構が確認できたことは重要な成果である。近世のみならず、近代の地図と合わせることで、甲府の街並みの変遷や都市計画の一端を窺うことができた。

一方で、水路（6号溝）の南端で東に曲がるクランクや東側の堤が確認できなかったなど、細部においては絵図と調査成果が異なる点も多い。これについては絵図がどの時期を描いているのか、どこまで正確に描いているかについて検討が必要だろう。

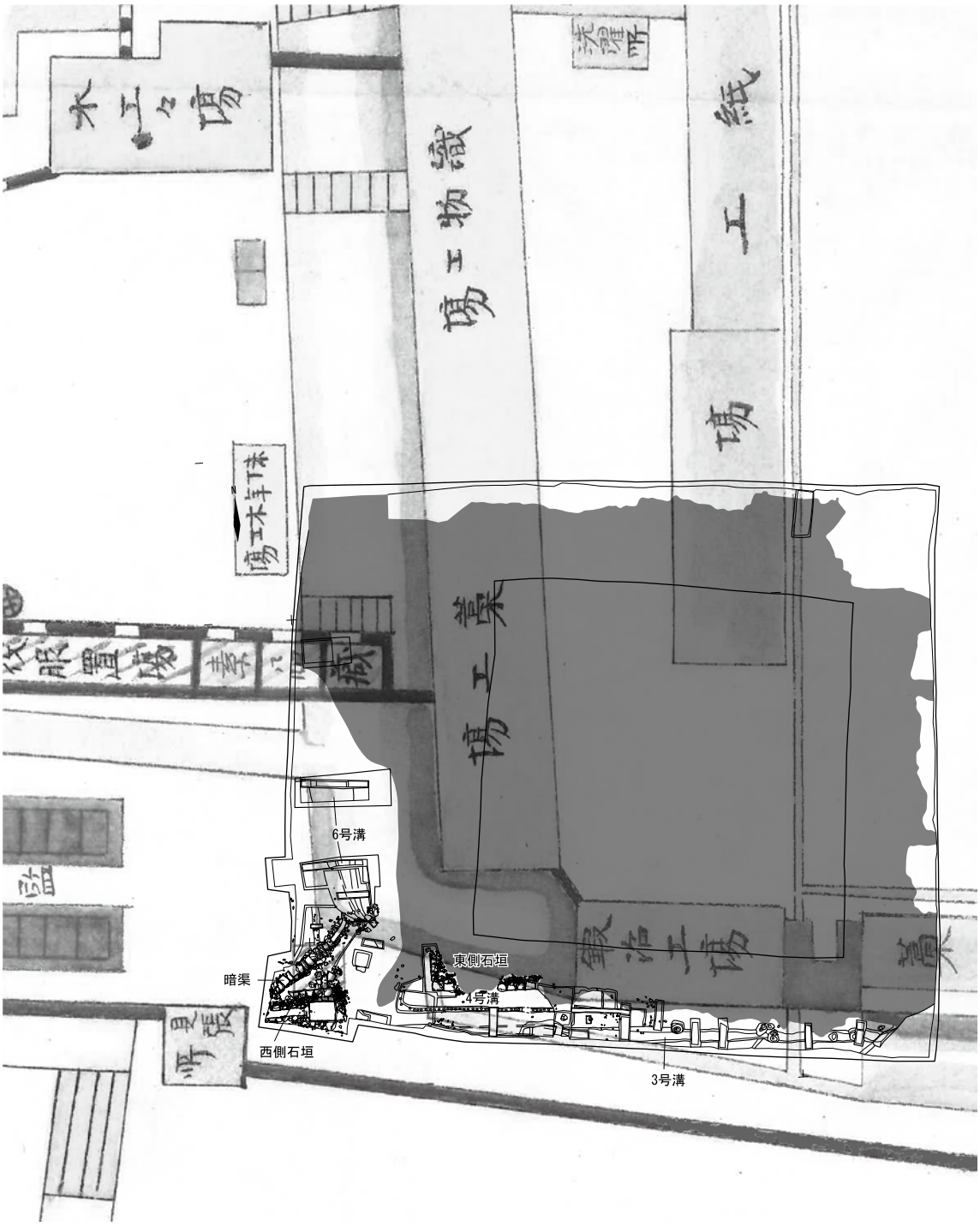
（註）第34・35図には縮尺が「但六百分之一」とあり、方位も書かれていた。そのため、縮尺を合わせ、現在の都市計画図に落とし込んでみたところ、縮尺・方位ともにやや誤差が出る結果となった。特に方位は誤差が大きいため、都市計画図に合わせて若干の修正を加えてある。



第 34 図　「山梨縣監獄全圖　六百分之一」（個人蔵）（原図を 40%に縮小して掲載）



第 35 図　「山梨縣監獄全圖　但六百分之一」（個人蔵）（原図を 40%に縮小して掲載）



第 36 図　「山梨縣監獄全圖　但六百分之一」（個人蔵）（拡大図（凡 1/400））

参考資料

大木丈夫　1998「江戸期における甲府城の普請について」『甲斐路』No.92 山梨郷土研究会

後藤宏樹　2011「江戸の上水道と堀－江戸城外郭を中心に－」『江戸の上水道と下水道』江戸遺跡研究会編　吉川弘文社

露木寛　1966『江戸時代の甲府上水』地方書院

野中和夫　2012「第五章　江戸城中枢部の上水・給水事情」『江戸の水道』野中和夫編　同成社

堀内秀樹　2012「第六章　発掘された水利施設」『江戸の水道』野中和夫編　同成社

株式会社ダイタ・甲府市教育委員会　2006『甲府城下町遺跡Ⅲ』

※当センター刊行の発掘調査報告書・『山梨県史』については記載を省略する。

調査区全景（合成写真）

3 号溝　検出状況（東より）

3 号溝　完掘状況（東より）

3 号溝・3 号土坑　遺物出土状況（北西より）

3 号溝より下層　木製品（126・127）出土状況（北西より）

写真図版 2

4 号溝検出状況（東より）

4 号溝杭列検出状況（東より）

東側石垣・4 号溝（西より）

東側石垣の東側（南より）

東側石垣の東側（北より）

西側石垣の第 1 面（南東より）

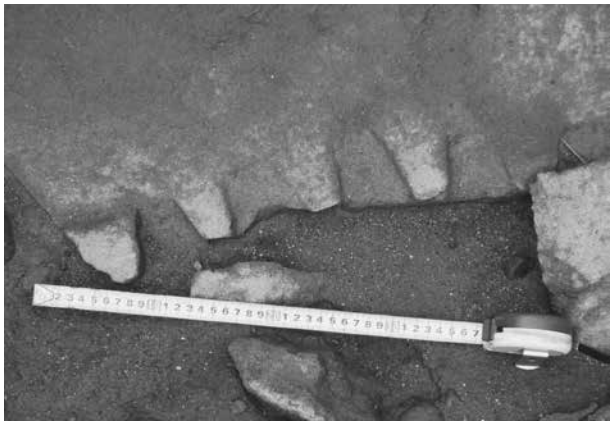
東側石垣の裏栗層より下層　杭検出状況（東より）

西側石垣の第 2 面（北西より）

集水枡北側水路（南より）

集水枡西側水路（西より）

集水枡南側水路（北より）



集水枡の積石の矢穴

暗渠検出状況（西より）

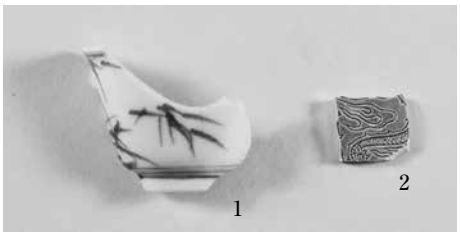
暗渠と 6 号溝接続部（北より）と柵板（ 115・116 ）拡大

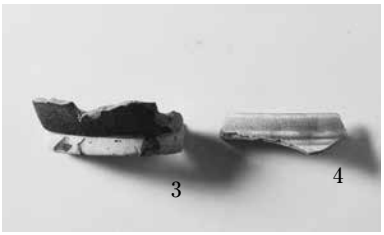
7 号溝検出状況（南より）

6 号溝完掘状況（南より）

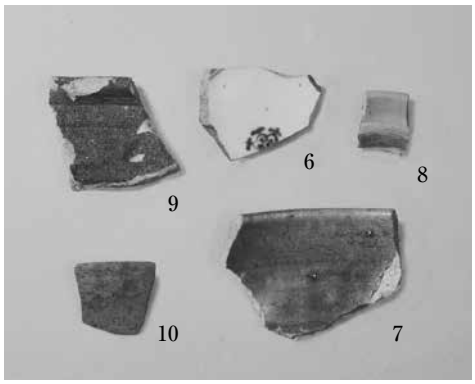
6 号溝セクション（Bトレンチ）（南より）

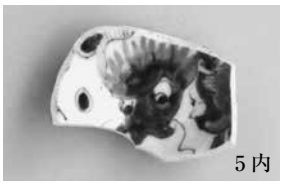
写真図版 4



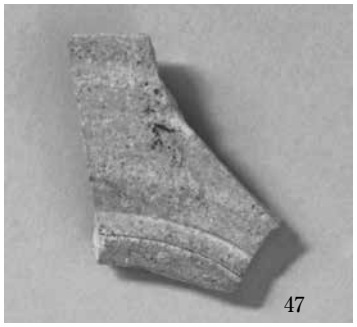


3 号溝・2 号土杭・3 号土杭出土遺物

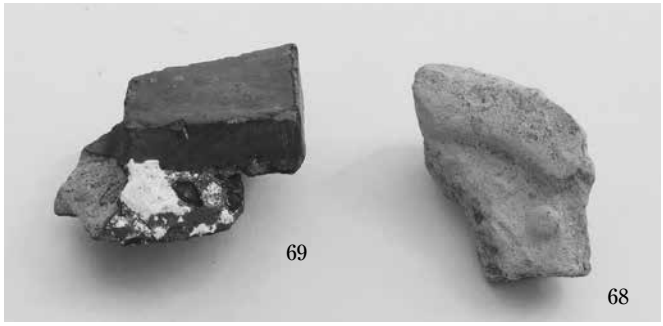




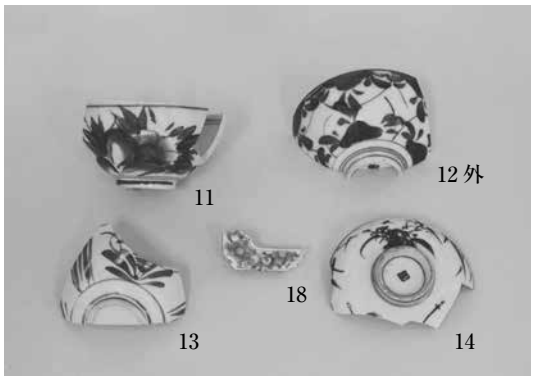
4 号溝出土遺物

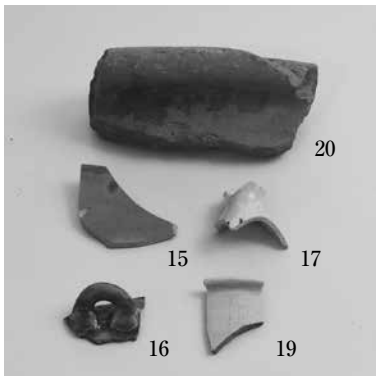


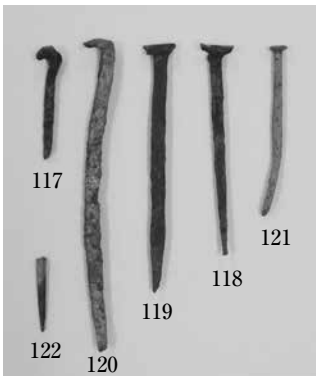
東石垣周辺出土遺物

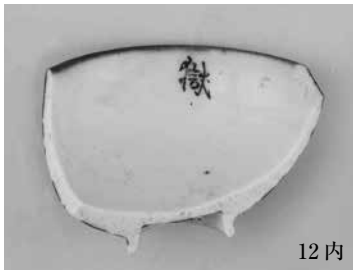


東石垣周辺出土遺物



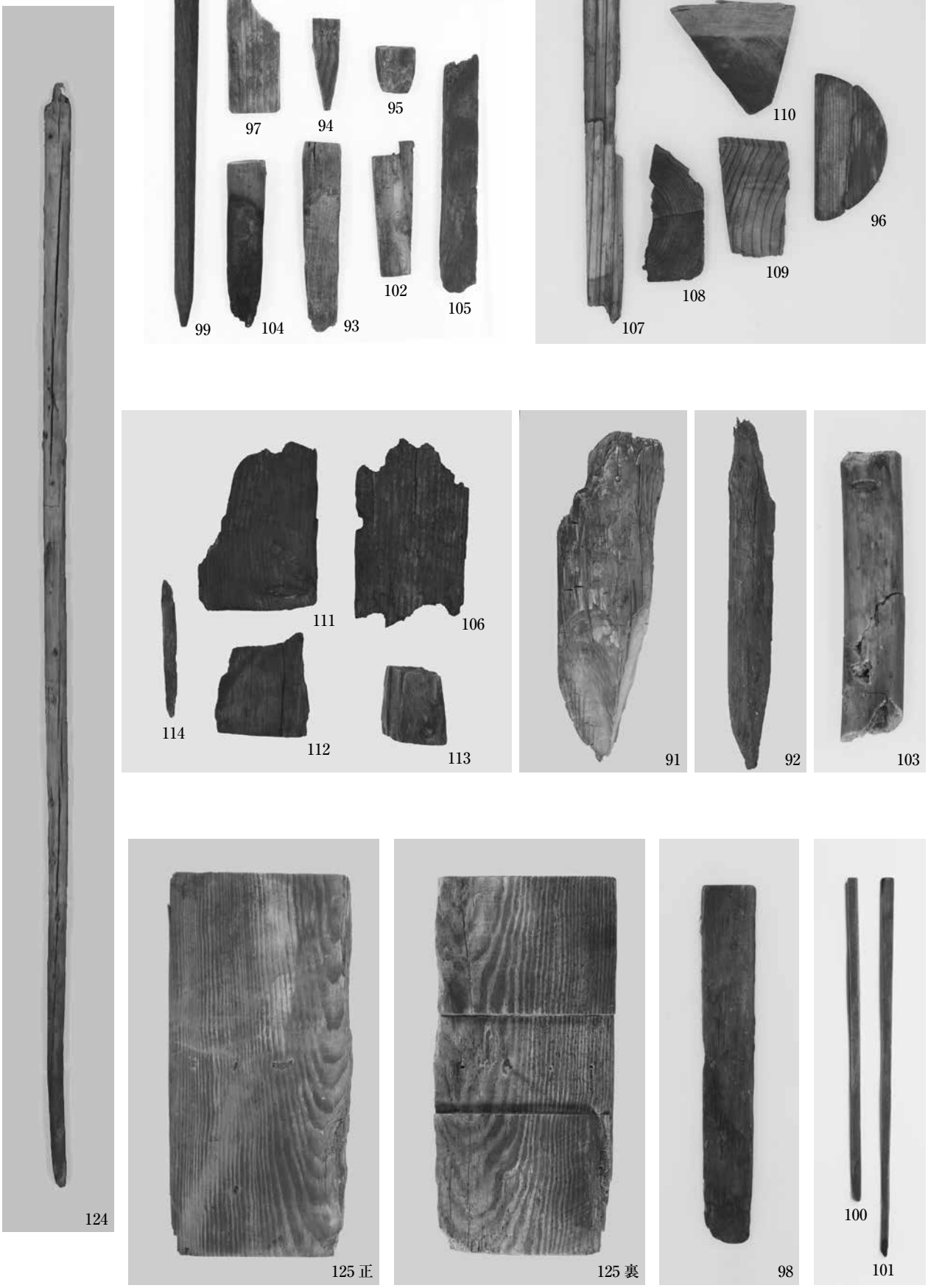






6 号溝出土遺物 1

写真図版 6



6 号溝出土遺物 2

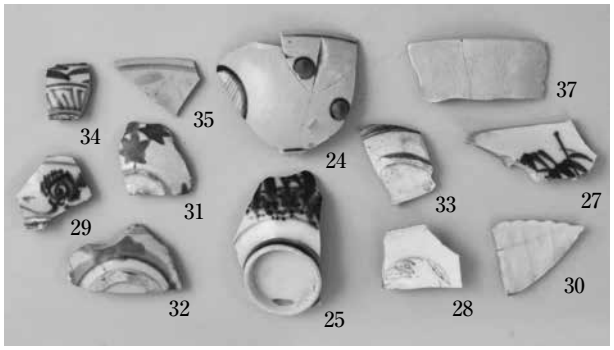
115 正

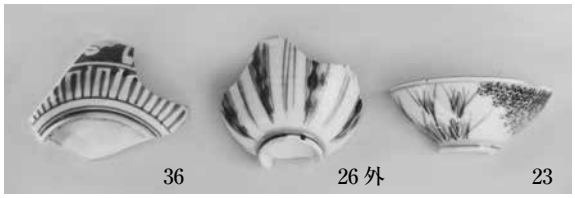
115 裏

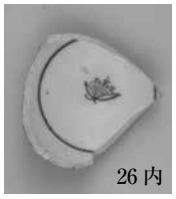
116 正

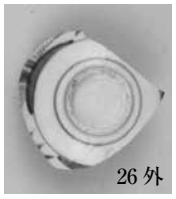
116 裏

6 号溝出土遺物 3

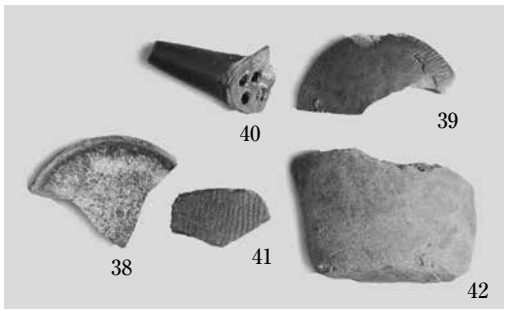




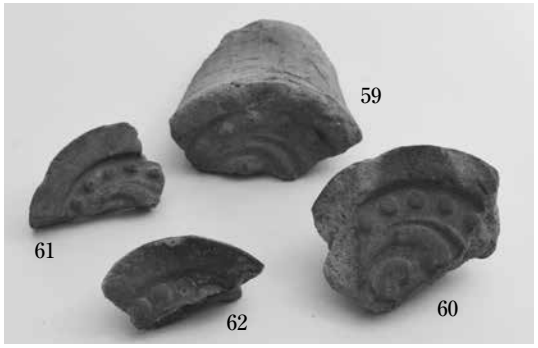

26 内

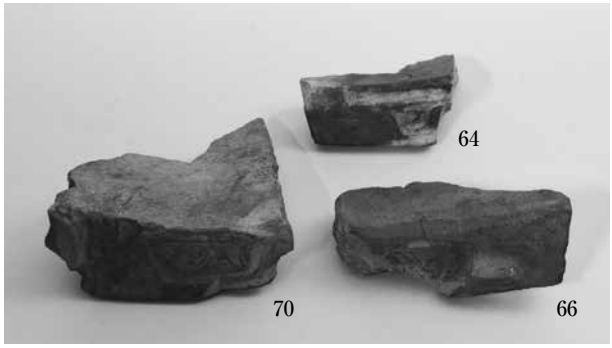

26 外

22 内



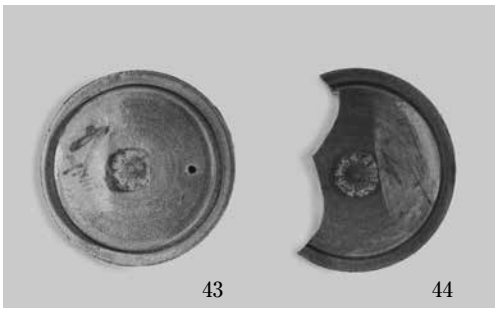
67

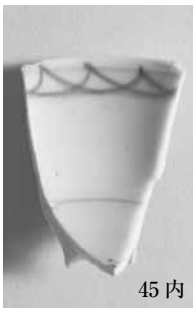


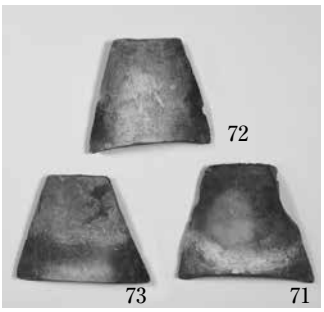


西側石垣・暗渠北側周辺一括

写真図版 8

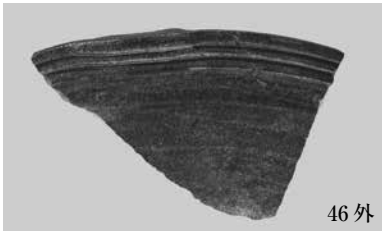


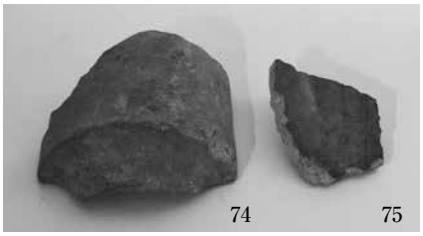




集水枡出土遺物

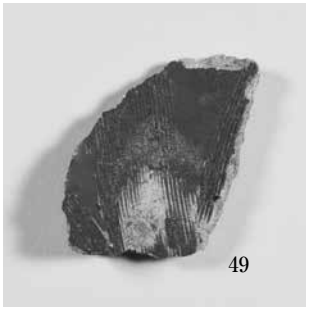
暗渠北側出土遺物





暗渠袖・暗渠北側出土遺物

包含層・表土・かく乱出土遺物



かく乱出土遺物

報　告　書　抄　録

ふりがな	こうふじょうかまちいせき（こうようしゃとうちゅうしゃじょうちてん）
書名	甲府城下町遺跡（公用車等駐車場地点）
副題	公用車等駐車場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第 321 集
著者名	柴田亮平、パリノ・サーヴェイ株式会社、西願麻以
編集機関	山梨県総務部　山梨県教育委員会
所在地	〒 400 － 1508　山梨県甲府市下曽根町 923　電話 055 － 266 － 3016
発行者機関	山梨県埋蔵文化財センター
発行年月日	2019 年 3 月 15 日

ふりがな 所収遺跡	所在地		コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
			市町村	遺跡番号					
甲府城下町遺跡 （こうふじょうかまちいせき）	甲府市丸の内二丁目 17－6		19201	253	35°66’45”	138°56’70”	平成 29 年 5 月 1 日 ～ 平成 29 年 7 月 21 日	約 940 ㎡	公用車等駐車場整備
	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
	城下町	近世	集水枡、暗渠、石垣、盛土状遺構、溝、土坑、ピット		陶磁器類、瓦、木製品、鉄製品、銭貨		本調査区は甲府城下町遺跡のうち、甲府城の西側に展開する武家地に位置する。「二の堀」のすぐ脇にあたり、近世以降連続的に土地利用がされた箇所である。調査においては集水枡や暗渠など、水に関わる遺構が多く確認され、江戸時代の町づくりの一端が明らかになった。		

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第 321 集

甲府城下町遺跡（公用車等駐車場地点）

公用車等駐車場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

印刷日　2019 年 3 月　7 日
発行日　2019 年 3 月 15 日

編　集　山梨県埋蔵文化財センター
山梨県甲府市下曽根町 923
TEL　055 － 266 － 3016
発　行　山梨県総務部
山梨県教育委員会
印　刷　株式会社ヨネヤ